

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別調査（「法隆寺献納宝物」（第39次））（(4)-①-1）		
【事業概要】 当館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長 今井敦
【主な成果】 (1)28年度に引き続き、古今目録抄の調査を実施し、報告書を刊行した。 ・古今目録抄（聖徳太子伝私記）の翻刻のための調査を行った（8月30日～31日、11月29日～30日、30年1月10日。外部調査員・東野治之、新川登亀男）。 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報38 古今目録抄4』を刊行した。 (2)報告書の刊行に向け、「商山四皓・文王呂尚図屏風」の調査を行った（30年1月29日～30日。外部調査員・東野治之、松原茂、相澤正彦、村重寧、大原嘉豊、井並林太郎、森實久美子）。 (3)通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査及び法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、本格修理のための事前準備をすることができた。また、法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「裳」について、本格修理を行っている。			
			
裳：修理前		裳の修理作業	
【備考】 (1)古今目録抄（聖徳太子伝私記）調査日数 5日 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報38 古今目録抄4』（30年3月31日発行） (2)商山四皓・文王呂尚図屏風」調査日数 2日 (3)染織品の調査と修理 2件			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査と修理を実施することができた。また、古今目録抄については、計画どおり概報を刊行できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の絵画、書跡、金工の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を順調に進めている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア b.特別調査(「書跡」(第15回))((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業は17年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、毎年1ないし2回、文化財機構内の関係職員を招聘し、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28年度より奈良国立博物館の収蔵品を対象に実施し、比較検討を行いながら調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	保存修復課長(兼書跡・歴史室長) 富坂賢
【主な成果】 (1)調査概要 古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行う。今回は、22件の古写経(ほかに28年度調査済のもの10件も再調査を行った)を対象に調査を行い、古文書を6件調査した。 (2)調査の成果(29年度調査の内容) 28年度未参加の者が多くいたことから、あらためて国宝の紫紙金字金光明最勝王経10巻を確認することから始めた。 新規に展示中のものを除き、奈良時代の古写経を8件(内、重要美術品「月燈三昧経」中国・唐時代も含む)、平安時代の古写経14件(内、重要美術品「広弘明集」中尊寺経も含む)、そのほか「門葉記」ほか古文書も6件をあわせて、調査を行った。今後も調査を継続することで、当館の収蔵品との関連を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与する予定である。			
			
特別調査の様子			
【備考】 調査件数: 古写経22件、古文書6件 調査日数: 30年2月8日(木)9日(金)の2日間 調査人員: 延べ14名(東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所) 調書作成: 28件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定通り実施できた。文化財機構内各機関からの同一分野の研究員が集まることで、最新の研究成果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。他館の収蔵品をまとまって調査する機会はないため、今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、計画通りに作品調査を実施することにより、研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという所期の目標に向けて順調に推移している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別調査(「工芸」(第9回))(4)-①-1)		
【事業概要】 当館の文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。今年度は、刀剣・陶磁・染織の調査会を行うこととした。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室長 竹内奈美子
【主な成果】 (1)刀剣(30年3月7日(水) 1日間) 当館にて、同館が所蔵する日本刀を調査し、3館(京都国立博物館・奈良国立博物館、九州国立博物館)が所蔵する作品との相互理解を深めた。調査対象は、「太刀 銘 備前国友成」(F-209、平安時代・12世紀)、「太刀 銘 長光」(F-164、鎌倉時代・13世紀)、「短刀 銘 国光(新藤五)」(F-234、鎌倉時代・14世紀)、「刀 金象嵌銘 延寿」(F-342、鎌倉時代・14世紀)、「刀 銘 肥前国住近江大掾藤原忠広」(F-17219、江戸時代〔17世紀〕)の5口とし、いずれも3館所蔵の刀剣に関連があり、なおかつ典型的な作風を示すものを取り上げた。熟覧の後、各館が所蔵する刀剣との比較などを論議することで、機構全体の刀剣について相互理解を深めることができた。参加者は、伊藤信二企画室長(京都国立博物館)、酒井元樹主任研究員(東京国立博物館)、望月規史研究員(九州国立博物館)、田澤梓アソシエイトフェロー(奈良国立博物館)の4名。 (2)陶磁(30年3月1日(木)、2日(金) 2日間) 九州国立博物館にて、寄託中の福岡市美術館所蔵黒田コレクション・松永コレクションの陶磁器を中心に作品調査を行った。2日間にわたる調査点数は計26件、国立博物館のコレクションには優品の少ない茶湯道具や懐石道具のうつわの実見を中心とし、その他中国の鑑賞陶器を含め、福岡市美術館所蔵の貴重な作品群について幅広く比較検討することができた。主な作品として、重要文化財「色絵吉野山図茶壺」、重要文化財「五彩魚藻文壺」、「唐物文琳茶入 銘 博多文琳」、「唐物肩衝茶入 銘 松永肩衝」、「柿の蒂茶碗 銘 白雨」、「黒楽茶碗 銘 次郎坊」などが挙げられる。参加者は降矢哲男研究員(京都国立博物館)、酒井田千明アソシエイトフェロー(九州国立博物館)、伊藤嘉章副館長(九州国立博物館)、三笠景子主任研究員(東京国立博物館)、今井敦調査研究課長(東京国立博物館)、立会者の後藤恒氏(福岡市美術館)の6名。 (3)染織(7月6日(木)、7日(金) 2日間) 当館には、大倉集古館が所蔵する能装束・能道具が217件寄託されている。その多くは江戸時代中期から江戸時代後期の製作で、一部、安土桃山時代から江戸時代初期のものも含まれている。備前藩池田家がかつて所蔵していた大名の能装束として資料価値の高いこれらの資料の悉皆調査を27年度より3ヵ年行うこととした。3回目にあたる今年度については、2日間で長絹:1領、着付:7領、熨斗目:7領、狩衣:8領、計23領を調査した。本調査により、備前藩池田家の能装束の形態が明らかとなり、大名家における能の実態について知見を得た。参加者は、水上嘉代子氏(遠山記念館学芸員・東京国立博物館客員研究員)、三島和美氏(大倉集古館学芸員)、興石英里子氏(文化庁文化財調査官)、小山弓弦葉登録室長(工芸室兼務)(東京国立博物館)、三田覚之研究員(東京国立博物館)、四戸菜穂有期雇用職員(東京国立博物館)の6名。			
【備考】			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の刀剣・陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	刀剣調査では当館と3館(京都国立博物館・奈良国立博物館、九州国立博物館)が所蔵する作品の相互理解を深め、陶磁調査では、寄託中の福岡市美術館所蔵作品群について幅広く比較検討することができた。染織調査でも、寄託中の大倉集古館所蔵の能装束調査を通して大名家における能の実態について様々な知見を得た。これらの成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿った調査を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア d.特別調査(「彫刻」(第7回))((4)-①-1))		
【事業概要】	寺等所蔵の仏像や彫刻作品を調査し、研究報告や論文活動に結びつけ、あるいは寄託増加、特別展等の企画につなげて文化財の活用を図るものである。今年度は、特別展「運慶」出陳作品に対する調査を、文化庁、京都国立博物館並びに奈良国立博物館と共同で行った。参加者同士で積極的に意見交換を行い、さらなる活用の道を探った。またこれ以外にも当館職員によって調査を行い、像の構造や彩色についてさまざまな知見を得ることができた。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長(兼国際交流室長) 浅見龍介
【主な成果】	<p>(1)展覧会に関連して次のとおり調査を行った。</p> <p>9月11～12日、10月30日、11月30日 特別展「運慶」出陳作品のX線CT撮影 参加人数各4名</p> <p>9月19～22日、10月2、16、23日、11月6、13、27～29日 特別展「運慶」出陳作品のX線CT撮影及び写真撮影 参加人数各4名</p> <p>10月10、18、25日、11月1、8、15日 特別展「運慶」出陳作品の調査 調査参加人数各4名</p> <p>11月27～29日 特別展「運慶」出陳作品の写真撮影 調査参加人数各4名</p> <p>11月6日 特別展「運慶」出陳作品を、文化庁、京都国立博物館並びに奈良国立博物館と共同調査 参加人数11名</p> <p>(2)X線CT撮影においては、作品の構造や保存状態が明らかとなった。共同調査においては、通常の実査によって像の構造などに関して様々な新知見が得られた。加えて、ファイバースコープを用いた内部調査も行い、墨書銘などが確認できた。また、赤外線撮影によって像に施された彩色や截金による文様の鮮明な画像が得られた。</p> <p>(3)研究成果は、展覧会の会期中に記念講演や報道発表によって逐次公表してきた。今後は、当館発行の『MUSEUM』誌にて順次報告するとともに、これらをまとめて展覧会報告として出版予定である。</p>		
	 <p style="text-align: center;">特別展「運慶」会場での調査風景</p>		
【備考】	調査回数：26回 調査作品数：37件		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「運慶」では、仏師運慶の現存する作品約30点のうち、過半数にあたる22点を展覧いただいた貴重な機会であり、通常の実査に加えてX線CT撮影、赤外線撮影やファイバースコープによる内部調査など、多角的な調査が実施できたことは大変有意義であったといえる。運慶作品のなかでも基準となる作品について、今回得られた知見は、今後の鎌倉彫刻研究の発展に大きく寄与するものである。これにより、おおむね所期の目的は達成できたと思われる。今後は当館発行の『MUSEUM』誌での報告や、その成果をまとめた展覧会報告の刊行を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会で借用した文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果は、展覧会会期中に逐次報道発表や講演会を通じて公表し、これを展覧会事業や教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。今後は研究成果を以後の展覧会などに活かすとともに、出版物などにおいて広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア e. 特別調査（「絵画」（第2回））（(4)-①-1）		
【事業概要】 当館の所蔵する仏教絵画のうち、特に14世紀から16世紀にかけて登場する、正統派の仏画とはやや離れた主題や描写を特徴とする作例について、その内容や技法等を調査する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 「毘沙門天像」(A-42 室町時代・15世紀)、「文宣王図 孔子像」(A-10180 室町時代・15世紀)、「孔子像」(A-7095 室町時代・15世紀)など絵画9点の特別調査を、国立博物館の絵画担当者によって、30年3月26日に実施した。 調査の結果、特に「孔子像」については、A-7095の作品賛文の文字の崩れや図像の決まりごとが崩れている点や損傷跡および修復跡が不自然に多い点などから近世末から近代の倣古作ではないかという意見が調査メンバーから出された。今回の調査によって、これまで十分に調査がされていない絵画作品に対する検討方針の参考となる様々な知見が得られた。 「毘沙門天像」(A-42)についても、様式的な位置付けが難しいことを再確認したことで、今後の調査においては中国の作例で典拠となるような図様の検索を行うなど新たな課題が提示された。 今回の調査対象とした作品は、類例が少なく、正統的な主題ではない作例、主題としては一般的であっても図像や描写の変ったものなど、位置づけの難しい作例を選んで仏画・やまと絵の専門家で調査したものであり、位置づけが難しいことを再確認したことで、今後のより踏み込んだ調査研究に向けた手法を確認することができた。 今回の調査対象作品の展示や類似する関連作品の展示公開の際には、調査研究の成果を踏まえて、作品の特色を来館者によりわかりやすく紹介したい。			
【備考】			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	類例が少なく、正統的な主題ではない作例、主題としては一般的であっても図像や描写の変ったものなど、位置づけの難しい作例を選んで仏画・やまと絵の専門家で調査したところ、やはり位置づけが難しいということが改めて明確になり、今後のより踏み込んだ調査研究に向けての様々な視点、意見が提示され、位置づけが明確になれば重要な意義を持つ作例であることが分かったが、確定的な成果を上げるまでには至っていない。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査は当館列品の絵画作品について各館の絵画担当者が集まり、複数の目で作品を見ることでより広く、深く理解と知見を得て、保存・展示、貸与等に活かすことを目的としている。中期計画期間内で絵画の各分野について調査を行う計画である。 29年度は仏画の中でも時代設定など位置づけが難しく、活用しにくい作例の調査を行い、作品の問題点やよりよい位置づけに向けての課題が明確になった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館では29年度より関東地域の社寺に伝存する文化財の悉皆調査を開始した。29年度は天真寺（東京都港区）所蔵文化財の調査を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長（兼東洋室長） 今井敦
【主な成果】 30年2月27日、3月27日に天真寺（東京都港区）において所蔵文化財の調査を行った。絵画は「一の谷屋島合戦図屏風」を江戸時代前期の優品と確認したほか、住職の頂相は、二世佛印禅師の画像2点が京都の仏画師木村徳栄の筆になるものであることを確認し、歴代の頂相が揃った貴重なものであることを確認できた。彫刻は本尊の釈迦如来坐像は制作時期が天真寺の開創以前、南北朝に遡るとも思われるもので、伝来は不明であるものの注目される。他に、江戸から近代の作品が多いとはいえ、在銘像が6件あり、天真寺の寺史のうえでは貴重な遺品が多く確認できた。			
			
天真寺での調査風景			
【備考】 調査日数：2日 調査点数：絵画18件、書跡15件、彫刻12件、金工1件、漆工4件、染織4件 延べ参加人数：13名			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査は、29年度よりの新規事業である。29年度は天真寺（東京都港区）を対象として所蔵文化財の調査を計画し、2日間6分野に関して行うことができた。当初予定していた新規調査の体制を確立し、現地調査を実施することができ、調査した文化財の中に貴重な遺品が含まれていることを確認することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、文化財の基礎的調査を関東地域の社寺に広げて行うこととした、初年度にあたる29年度は、天真寺（東京都港区）での調査を行ない、30年度以降の調査体制を確立することができた。30年度には、天真寺の継続調査を行うとともに、新規の寺院調査を計画している。以後も、毎年新規寺院の調査を行う体制を確立している。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 油彩画の材料・技法に関する共同調査 ((4)ー①ー1))		
【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で20年度から開始し、続行している。当館所蔵の油彩画約150件の中から、明治期を中心とした作品を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室は、これまで大学所蔵の明治期油彩画について、調査研究を続け、多数の成果を公表している。本共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析などの科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで東京藝術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国に初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考えられる。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 土屋裕子
【主な成果】 (1)①A-12427-1 高橋源吉筆「東禅寺事件図」、② A-12427-2 高橋源吉筆「東禅寺事件図」、③A-11787 原撫松筆「老人」、④A-11788 原撫松筆「画家ヘンリーの像」、⑤A-729 原田直次郎筆「三条実美像」、⑥浅井忠筆「旅順戦後の捜索」、の状態調査、普通光、側光、紫外線、赤外線写真、X線透過撮影、蛍光X線分析を行なった。 (2)①②のデータは、館外への貸し出し、展示準備用のための応急修理の参考となった。これまで、展示されなかった作品が公開・活用するために貢献した。 (3)⑤⑥は29年度本格修理作品であり、館外への修理依頼を行なったが、修理前の調査分析として当調査のデータを使用することができた。⑤は修理も終了し、30年1月2日からの展示で活用している。			
			
高精細デジタルカメラによる撮影		透過X線撮影	
			
状態調査の様子			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
A	29年度は6回という調査回数をこなし、実際に展示などの活用と直結した調査で着実に作業を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
A	一連の調査によって、次第に東京藝術大学の同時期の作品群および他館が収蔵する作品との比較研究が可能になってきている。特にX線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータの比較により、作品の特性のみならず、歴史的関係性などについても新たな検討が可能となる。また、作品の高精細画像は、展示の際に使用するパネル、『MUSEUM』の原稿などにも利用され、次第に活用する機会も増えた。さらに今年度の調査対象作品は、修理や展示活用と直結したものであり、調査の内容がそのまま役立つ機会が多かった。課題となるのは、『MUSEUM』などへの執筆である。新たな記事として掲載の必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 仏教美術等の光学的手法による共同研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館が所蔵する仏教美術等を対象に、東京文化財研究所と共同して光学的手法による研究を実施することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 国宝「普賢菩薩像」(A-1 平安時代・12世紀)、国宝「千手観音像」(A-10506 平安時代・12世紀)、国宝「孔雀明王像」(A-11529 平安時代・12世紀)の赤外線撮影及び蛍光撮影、国宝「普賢菩薩像」、国宝「孔雀明王像」の蛍光X線分析を東京文化財研究所と共同で実施した。 調査の結果、特に蛍光X線分析においては、平安仏画の背景空間に銀が検出され、従来、どのような彩色がなされていたか実態の不明であった背景の彩色に銀が何らかの形で使用されていたことを示唆する結果を得ることができた。分析技術の進化によって、肉眼では確認し難い染料を科学的に確認できたことで、平安仏画の制作過程における銀の関わりを通じて、調査研究の新たな課題を確認することができた。同様にこれらの手法によって、時代背景を確認できる道筋を検討する機会となった。 日本を代表する国宝の平安絵画の調査を結果は、絵画研究者との共有を図り、今後の展示や学術研究に活用したい。			
【備考】 調査2回(合計4日間) 研究会2回 調査結果の公開に関する打合せ1回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館所蔵の国宝の平安仏画を従来整備されていなかった赤外画像、蛍光画像、蛍光X線画像によって高精度の技術で撮影したことにより、今後の研究や修復等様々な場面において必要になる基礎的かつ重要な画像情報を整備することができた。さらに平安仏画の彩色を考えるうえで、従来の概念を覆すかもしれない、背景空間における銀の使用を示唆するデータを得られたことは、非常に重要な問題提起となった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定していた各種画像の撮影が順調に進んだ。また29年度に提示された平安仏画の背景空間における銀の使用について、より正確性を高めるため、その視点も持ちつつ当館寄託品を中心としながら同時代の他作例の調査と、比較対象としての鎌倉時代の作例の調査数を増やし、他館所蔵の平安仏画にも対象を計画的に広げる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>当館が所蔵する漢籍、洋書に関する基礎データを調査し、画像情報を公開する。29年度の対象は、安政6年(1859)にドイツ人医師シーボルトが再来日したときに携えてきた洋書及び滞留中に収集した洋書である。明治2年(1869)に長子アレキサンダー・シーボルトが外務省に寄贈した後、同17年(1884)に農商務省博物館の所管となり現在に至ったもので「シーボルト献納本」と称し、約300冊を数える。西欧の日本に対する深い関心が知られる内容のものが少なくない。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長(兼情報資料室長) 田良島哲
【主な成果】	<p>28年度に引き続き、シーボルト献納本について、図書類のデジタル画像の作成を継続するとともに、既に作成した画像を当館研究情報アーカイブズ上で公開した。</p> <p>実績値 28年度までに作成したデジタル画像86冊分のデータを、東京国立博物館デジタルライブラリーで公開した。運営費交付金によってデジタル画像の作成(9件16冊)を実施した。</p>		
	 <p>デジタルライブラリーで公開した画像データ</p>		
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	運営費交付金によるデジタル化の一環としての画像作成は、研究資料として公開に必要な品質で実施できている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	要作成画像数に比して経常的な予算が乏しく、29年度は競争的資金等の獲得もできなかった。しかし、運営費交付金によってデジタル画像の作成(9件16冊)を実施した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東洋民族資料に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	当館が所蔵する約3,500件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課出版企画室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】	<p>(1) 調査概要 兵庫県立考古博物館国際交流展「台湾パイワン族の文化—太陽の子の神珠—」の出陳資料及び普及活動に関する調査を行った。</p> <p>(2) 調査の結果得られた知見 ・同展に出陳協力をしている台湾の新北市立十三行博物館の所蔵資料や普及活動に関する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特に台湾先住民族資料の分類整理に資する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品の保存管理や展示活用に資する知見を得た。</p> <p>(3) 調査研究の成果 ・15年に北台湾の考古博物館及び遺跡保存教育センターとして開館した新北市立十三行博物館は考古学と民族学を併せて紹介する博物館である。同館の台湾先住民族資料（特にパイワン族）について生活様式に即した展示や解説を行う普及活動を通じて、当館が所蔵する東洋民族列品にとって有意義な知見を得ることができた。その成果は東洋館の総合文化展「アジアの民族文化」の参考とする。</p>		
			
	兵庫県立考古博物館国際交流展 「台湾パイワン族の文化—太陽の子の神珠—」会場	当館総合文化展「アジアの民族文化」 の展示風景	
【備考】	館外調査：兵庫県立考古博物館（8月23日）		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の南山大学・天理参考館・早稲田大学における国内の他機関調査に引き続き、29年度は兵庫県立考古博物館の国際交流展「台湾パイワン族の文化—太陽の子の神珠—」の調査を行うことで、東洋民族列品のうち台湾先住民族資料に関する基礎的な情報を充実させた。また、台湾新北市立十三行博物館の所蔵資料・活動内容・分類整理・展示活用に関する有意義な情報を得ることができた。30年度以降も当館所蔵品をはじめとする国内外の民族資料の関連資料の調査に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する東洋民族列品については、南洋資料・台湾先住民族資料・その他から構成されている。東洋館の総合文化展「アジアの民族文化」では、南洋資料と台湾先住民族資料を中心に公開するための分類整理を進めている。従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の総合文化展「アジアの民族文化」に展示活用されており、展示内容が着実に充実してきている。 30年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見や交流に基づき、更なる調査研究を重ねて南洋資料及び台湾先住民族資料に関する平常展示や特集を工夫していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「チベットの仏教と密教の世界」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>特集「チベットの仏教と密教の世界」に関する調査研究で、当館所蔵のチベット関連遺品のうち、彫刻作品について客員研究員の田中公明氏とともに調査を行い、その成果を特集として公開した。今後も調査を継続し、『東京国立博物館図版目録』のチベット編として刊行を目指す。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室研究員 西木政統
【主な成果】	<p>(1) 次のとおり調査を行った。 5月10～12日 当館所蔵チベット仏像の調査 客員研究員田中公明氏を含む調査参加人数4名 7月4日、11日 当館所蔵チベット仏像の撮影 参加人数2名</p> <p>(2) 以上の調査結果を踏まえ、33点の作品を選定して特集を行った。 名称：「チベットの仏教と密教の世界」 会期：9月5日～10月15日 場所：東洋館12室 これに伴い、備考欄に記したリーフレットを作成した。</p> <p>(3) 特集展示及びリーフレットの刊行によって、チベット仏像についての理解が深まったと同時に、これまで一般に知られることの少なかったチベット仏像のコレクションについても周知することができた。</p>		
			
	東京国立博物館・東洋彫刻収蔵庫での調査風景	特集「チベットの仏教と密教の世界」展示風景	
【備考】	<p>調査回数：5回 調査作品数：102点 刊行物：西木政統『チベットの仏像と密教の世界』東京国立博物館、9月5日</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>当館所蔵のチベット仏像の調査研究について、チベット学の専門である田中公明氏との共同調査が実施できたことにより、これまでその評価の定まらなかった200点近い作品のなかで、とくに重要な作品の名称や制作地・制作年代を特定することができた。その成果は特集「チベットの仏教と密教の世界」として一般に公開され、あわせてリーフレットを作成したことで、当館のチベット仏像について広く周知できた。これにより、おおむね所期の目的は達成できたと思われる。今後は、残りの仏像及び絵画や工芸遺品にも範囲を広げて調査を行い、逐次展示等を企画するほか、『東京国立博物館図版目録』としての刊行を目指したい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>収蔵品など文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「新指定 重要文化財 野毛大塚古墳―世田谷の中期古墳―」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 特集「新指定 重要文化財 野毛大塚古墳―世田谷の中期古墳―」に関する調査研究。当館が所蔵する東京都世田谷区野毛大塚古墳出土品を、重要文化財に新指定するための調査を行った。その成果は、特集という形で一般公開した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	考古室研究員 河野正訓
【主な成果】 (1)調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。 ・野毛大塚古墳出土の石製模造品は、水を介した祭祀や、生産に関わる祭祀に用いられ、日本列島の古墳時代祭祀を復元する上で重要な作品である。 ・これまで未報告であった作品（鉄製武器）の現状を把握することができた。 (2)野毛大塚古墳出土品は、9月15日に重要文化財に新指定された。 (3)展示公開 ・特集「新指定 重要文化財 野毛大塚古墳―世田谷の中期古墳―」を7月11日から9月10日までの期間、平成館企画展示室にて開催した。 ・展示台に作品とグラフィック（解説や画像、題箋）を一体にするという、新たな展示手法を導入した。 ・リーフレット「特集 新指定 重要文化財 野毛大塚古墳―世田谷の中期古墳―」（4頁）を刊行した。平成館の会場にてリーフレットを無償配布し、東京国立博物館のHPにてリーフレットのPDFを公開した。			
【備考】 (1)29年度の調査回数は3回、調査点数は287点である。 (2)月例講演会にて調査成果を公開した。 ・「古墳時代の石製宝器と儀器」（平成館大講堂にて開催。7月29日、考古室 河野正訓） (3)1089ブログで特集を紹介 ・「新国宝をお披露目！ 東大寺山古墳出土の謎の大刀」（6月19日、考古室 河野正訓） ・「重文指定記念！ 多摩川で古墳さんぽ ～野毛大塚古墳を訪ねて～」(7月18日、考古室 河野正訓) ・「野毛大塚古墳の展示デザイン」（8月1日、デザイン室 荻堂正博）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	(1)当館が所蔵する野毛大塚古墳出土品を悉皆的に調査することで、未報告資料も含めて、その全体像を把握することができた。今回、世田谷区が所蔵する野毛大塚古墳出土品とあわせて、ほぼすべての野毛大塚古墳出土品が重要文化財に指定されたのは、本調査研究のみならず、それ以前の継続的な基礎調査が結実した結果である。 (2)野毛大塚古墳出土品の調査成果を展覧会で公表することで、多くの観覧客に対して古墳時代へ対する関心を広げ、また知識を深めるよい機会となった。今後、野毛大塚古墳出土品は平成館考古展示室で展示するとともに、他館への貸与も行うことで、広く活用する予定である。 (3)水を介した祭祀を復元する上で、野毛大塚古墳出土品は全国的にみても貴重な事例であり、古墳時代の祭祀研究を発展させる基礎資料となることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	野毛大塚古墳出土品に関する本調査研究を発展させて、当館が所蔵する関東地方の古墳時代資料の調査研究を継続する。展覧会や講演会及び刊行物を利用して、調査研究の成果を公表する機会を引き続きつくりたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集 親と子のギャラリー「びょうぶとあそぶ」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	作品の複製と ICT などを使った参加体験型展示、親と子のギャラリー「びょうぶとあそぶ」を実施し、来館者の鑑賞体験を深めるための教育的展示について調査・研究を行った。		
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長 小林牧
【主な成果】	<p>(1) 高精細複製品と最新の ICT 技術等を駆使し、子どもや外国人など、日本の伝統文化になじみのない来館者を対象とした、親しみやすくわかりやすい参加体験型展示、親と子のギャラリー「びょうぶとあそぶ」(本館特別5室、特別4室、7月4日～9月3日)を実施した。</p> <p>(2) 作品世界と映像との融合、音・香り・風など五感を刺激する演出、インタラクティブな仕掛けなど、先進的な技術を駆使した展示の試みによって、複製品を使った展示の可能性を追求した。</p> <p>(3) 大型の畳台や半円形のスクリーンを設置するなど、来館者の鑑賞体験をより能動的にすることを旨とした空間デザインを試みた。</p> <p>(4) 会期中に、当該会場でコンテンポラリーダンスの公演を実施。現代の芸術家による創作活動を通じた古美術へのアプローチを試みた。</p> <p>(5) 鑑賞体験を形にできるワークシートを制作、会場で配布した。</p> <p>(6) 作品理解を深めるためのわかりやすい解説パネルや、実際に触って学べる模型などを設置したハンズオンコーナーを設置した。</p>		
	<p>左: 松林図屏風の複製品と映像による展示「松林であそぶ」</p> <p>右: 群鶴図屏風の複製品と映像によるインタラクティブな展示「つるとあそぶ」</p>		
【備考】	<p>来場者数: 82,966人(「びょうぶとあそぶ」 入場者数)</p> <p>アンケート: 展示全体 とても面白かった、面白かった 93%</p> <p>解説のわかりやすさ とてもわかりやすい、わかりやすい 88%</p>		


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応
B	畳の台でくつろいで複製品と映像を楽しむ家族連れや外国人、来館者の動きに合わせて動くつるの映像に歓声をあげて遊ぶ子どもたちの姿など、展示室では、楽しみながら、遊びながら作品を鑑賞する来館者の姿が数多く見られた。アンケート結果も好評で、記述式回答でも「自分が水墨画の中に入った気がする」「ツルにさわるとにげていったりしたのが面白かった」など体験型展示に好意的な感想が多かった。複製品ならではの参加体験型展示の可能性を追求したこと、それによって生まれた能動的な鑑賞体験が、来館者の鑑賞や理解を深める助けになっていることを確認できたことは、大きな成果といえよう。一方、映像機器をはじめとするさまざまなICT機器の運用について、ノウハウが欠如している部分もあり、会期中に担当職員及び監視スタッフに大きな負担がかかった。今後は、外部の技術者等の協力を得つつ、より有効な利用とスムーズな運営について研究を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	本特集は、複製品やICTを駆使した参加体験型展示の在り方についての調査・研究のための好事例となった。30年度以降は、対象とする作品の幅を広げ、新たな展示テーマを設定しつつ、よりよい教育的展示についての調査・研究を深めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	キ 特集「唐三彩」に関する調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 造形、装飾ともに卓越した技術で発展をとげてきた中国陶磁のなかでも、生き生きとした造形表現と、緑、黄、藍、白などあざやかな色彩で観る者を惹きつける唐三彩に注目する。当館の中国陶磁を代表する横河コレクション・広田コレクションの名品から、墓に埋葬するための人物や空想上の動物、家畜などの姿を表わした明器を中心に、幅広く親しまれた唐三彩の発生及びその展開をたどり、魅力を多面的に紹介する。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 三笠景子
【主な成果】 (1)展示 東京国立博物館 東洋館5室 9月5日～30年2月4日 (2)展示作品の支持具（転倒防止のため）の作製	
	
5室曲面ガラスケースの展示風景、支持具の様子	
(3)月例講演会 「唐三彩について」 9月30日 於 平成館大講堂	
【備考】 出品件数 41件	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	唐三彩のコレクションを、普段中国の青銅器を展示している曲面ガラスケースも使用し、墓に隊列を組んで納められた様子を再現するように展示することによって、唐三彩本来の「俑」という造形的特徴をわかりやすく展観することができた。また、月例講演会では20世紀初頭に世に存在が知られるようになって以降の、唐三彩の研究状況を順を追って示すことができた。これを礎とし、30年度も中国陶磁コレクションの魅力を伝える展覧事業及び講演活動を行いたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。当館の中国陶磁コレクションについて、その伝来の背景、博物館が収集した意義、そして日本における研究史上の位置づけを示しながら、展覧できたことは、30年度以降の同活動、研究につながるものとする。また、今回展示した作品に耐震のための支持具を作製した。これをもとに、30年度以降の展示予定作品の支持具についても検討を重ね、適宜作製に移りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「アジアの祈り」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 29年度「博物館でアジアの旅」に関連する特集として「アジアの祈り」を実施するため、館蔵の関連作品を調査し、その成果を当該特集、および図録において公開する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	考古室長 白井克也
【主な成果】 (1) 29年「博物館でアジアの旅」の全体テーマ「マジカル・アジア」にかかわる館蔵の民族資料の調査 調査が遅れていた館蔵の民族資料について、「祈り」「祭り」「呪い」などの視点から改めて作品を見直し、特集で展示する候補作品を選び出し、これに基づいて5月1日、5月24日に作品調査を行った。 特集終了後の10月16日にも、館蔵民族資料の補足調査を実施した。 この調査により、作品への理解を深めたことはもちろん、保存状態を確認し、作品を安全に展示するための支持具の設計に活用した。調査成果は列品検索データベース(protoDB)に入力し、今後の活用に備えた。 (2) 館蔵の民族資料に関連した館史資料の調査 館蔵の民族資料の意味を理解するため、収蔵時の状況を示す館史資料を調査した。 (3) 館蔵品への理解を深めるための館外資料の調査 館蔵品の理解を深め、また展示手法の参考とするため、8月23日に兵庫県立考古博物館で開催の交流展「台湾パイワン族の文化—太陽王子の神珠—」を観覧し、展示作品とその展示手法を調査した。 (4) 図録の作成 調査成果を公開・普及するため、特集「アジアの祈り」に限らず「マジカル・アジア」全体を視野に入れた図録を3,000部製作した。 (5) 特集「アジアの祈り」実施 調査成果を公開する特集「アジアの祈り」を、「博物館でアジアの旅」実施期間に当たる9月5日から10月15日まで実施した。この期間にアジアの旅スペシャルツアーの一環として「呪いのパワーを探す旅」を実施した(9月10日)。			
【備考】 作品調査 3回 館史資料調査 1回 館外資料の調査 1回 特集「アジアの祈り」 図録『博物館でアジアの旅 マジカル・アジア』 アジアの旅スペシャルツアー「呪いのパワーを探す旅」(9月10日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	例年開催されている「博物館でアジアの旅」の29年度のテーマとして選ばれた「マジカル・アジア」は、かつて特別展「吉祥」(10年度)において示された、美術に込められた意味を読み解きつつ普及する試みを、中国以外のアジア美術全体に敷衍し、また吉祥という肯定的なイメージだけでなく、「呪い」などの否定的な面にまで視野を広げて、アジア美術に込められた意味を伝えるとともに、アジアの文化の多様性を示すものである。 東洋館の展示作品への理解を深め、またアジア美術の楽しみ方を紹介する試みとして、好評を博した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東洋に関する所蔵品のうち、これまで調査・研究・活用が十分でなかった作品を対象とすることにより、今後の展示・教育普及への活用の可能性を広げることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「室町時代のやまと絵—絵師と作品—」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 総合文化展の特集「室町時代のやまと絵—絵師と作品—」開催に関して、出品作品の検討に基づき、会場解説、図録解説等を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 本特集は、従来まとまって展覧することのできなかった当館所蔵、寄託の室町時代のやまと絵を一堂に展示した点に大きな意義が認められる。また、刊行した図録はこれまでカラー図版で紹介されることのなかった作品も多くあり、図版目録的な性格を期待したもので、これにより当該作品の調査研究が一層進むものと思われる。			
【備考】 具体的な成果は下記の通り。 (1) 展示作品総数：35 件 (2) 図録の刊行：72 ページ。論文 1 件、作品解説 56 件収録 (3) 月例講演会：1 回			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集の開催が承認された28年度から、館藏品、寄託品の調査を進め、展示作品を絞り込んでいった。 事前調査を行っていたため、会場解説、図録解説・論文等の執筆、展示に関して継続的かつ順調に進めることができた。当館には本特集が対象とする室町時代のやまと絵作品が多く所蔵されており、これだけ点数の多い展覧を実施しえたことは文化財の公開という点からも大いに評価できるものと思われる。あわせて、今回出版した図録は当館所蔵の室町時代のやまと絵を多く収録し、図版目録的な役割も期待して発行したもので、今後の内外研究者の調査研究の発展にもつながる要素として評価されるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集は当館所蔵の室町時代のやまと絵を中心とした展覧で、これまで継続的に行ってきた館内作品の調査研究の成果に基づくものである。特に絵画作品ばかりではなく、通常公開の機会の少ない土佐家文書など関連作品の研究成果を展示に盛り込めたことは列品の有効的な活用という点からも特筆される。これらの調査研究を踏まえ、30 年度以降の総合文化展での展示解説などにその成果を活かしていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「刀剣鑑賞の歴史」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業で行われた特集は、銘に切られた刀剣と、銘はないものの、作風を整理した知識によってその刀工の作とみなされた刀剣を並べるなどして、わが国で育まれた刀剣鑑賞の歴史を、展示という形式で紹介したものである。展示の機会が少なかった刀剣を多数陳列して列品の新たな公開方法の可能性を目指し、一部ケースにおいて、刀剣の鑑賞上、適切と考えられる照明装置を用いて新たな展示手法を模索した。12月5日から30年2月25日において、当館本館14室で開催した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室主任研究員 酒井元樹
【主な成果】 (1) 従来展示の機会が少なかった刀剣を陳列し、数口の刀剣において、伝来などの新たな知見を得ることができた。 (2) 一部のケースにおいて、刀剣鑑賞上、適切と考えられる照明装置を用いた。これによって、刀剣鑑賞の際に重要な要素となる鋼の質感を伝えることができた(図1)。 (3) 陳列作品の造形的特徴を記した調書と解説を図録として発行し、展示だけでは伝達できない情報も発信した(図2)。			
			
図1 展示風景		図2 図録	
【備考】 ・展示作品数：15件 ・図録の仕様：A4判 48ページ			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年注目が集まっている我が国の刀剣に対して、その長く高度に発達した鑑賞の歴史を、実作品を用いて迎えることができた。また、展示デザイナー、カメラマン、出版企画の職員と共にプロジェクトを行ったことで、当館における刀剣の新たな情報発信の方法を模索する貴重な機会となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	刀剣の照明手法や撮影方法などについて、集中的に取り組むことで具体的な課題が明確になった。今回得られた知見を、博物館の改修等に併せた照明装置や、刀剣の美をより鮮やかに伝える画像撮影などに役立てたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	当館が手がける文化財保存と修理の役割と成果をわかりやすく広く一般に紹介するため、近年解体を含む根本的な修理を終えた作品を修理過程で得られた情報とともに展示公開し、理解を促進する。		
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長(兼書跡・歴史室長) 冨坂賢
【主な成果】	<p>(1) 調査概要</p> <p>29年度は近年、本格修理と対症修理(応急修理を含む)を行うことにより、取り扱いや保存上の安全性が向上した作品や、鑑賞性が向上して展示活用が可能となった作品を対象として、一般の鑑賞者が、博物館における保存修復への理解向上につながる作品の選定、処置内容の解説方法について調査と検討を行った。</p> <p>(2) 調査の結果得られた知見</p> <p>対象としたのは、本格修理の場合、29年3月31日までに修理が完了した作品で、修理後十分な期間を置いて状態が安定したことが確認できた作品とし、対症修理は当館アソシエイトフェロー(修理技術者)が処置を行った立体作品とした。</p> <p>本格修理のうち「紫地花鳥連珠七宝繫文錦天蓋垂飾残欠」(列品番号:1-337-174)「淡縹地葡萄唐草文綾天蓋垂飾残欠」(列品番号:1-337-175)をはじめとする東大寺正倉院伝来裂の処置として行ったマウント方法は、22年から担当研究員及び修理技術者とともに独自に開発したもので、裂の状態に合わせ3種類のマウント方法を使い分ける(沢田むつ代、『MUSEUM』東京国立博物館研究誌No.670、10月15日、P34-39)。脆弱な染織品の保存処置方法の例として、館内事業のみならず保存修復分野に貢献する研究である。</p> <p>また、対症修理として行った「享保雛」(列品番号1-3613)は、男雛の顔面が人形師の塗り重ねによる修理によりオリジナル性を失った作品を、担当研究員とアソシエイトフェローとの綿密な調査と打合せ、検討した修理方法によってオリジナルの顔の姿へ戻し展示できるようになったもので(『おひなさまと日本の人形』東京国立博物館セレクション、28年2月20日、P12-13)、2015年から始まった当館内での立体作品応急修理事業の一代表例として示すことができるものである。</p> <p>(3) 調査研究の成果</p> <p>本格修理完了品として「年中行事図屏風」や「小忌衣 浅葱天鷲絨地菊水模様」など15件、対症修理完了品として、「享保雛」と「丸盆」の2件(計17件)。</p> <p>今回の展示では、修理処置だけでなく「正倉院伝来裂のマウント方法」、「館内で行われている対症修理」、「X線CT装置の活用方法」に関し、鑑賞者の理解を深める工夫をとして処置材料や画像を多用した解説パネルを作成し、鑑賞者の関心を得た。</p> <p>会期中、一般向けにバックヤードツアー、ギャラリートークを行い、多くの参加者が熱心に鑑賞、聴講した。</p>		
【備考】	<p>展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成館企画展示室、30年3月13日～4月8日、展示作品件数17件。教育普及事業 ・バックヤードツアー 30年3月16日(金)、参加者60名。 ・ギャラリートーク 30年3月13日(火)参加者126名、3月20日(火)参加者97名、3月27日(火)参加者78名、4月3日(火)参加者124名、計4回参加者のべ425名。 		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>保存修復課ではより専門的な内容を含む詳細の報告を別途『東京国立博物館文化財修理報告』を刊行しており、一般向けの平易な展示として特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」を毎年、年度末に行っている(29年度で18回目)。</p> <p>修理を終え展示が可能になる作品はその都度変わるため、それに合わせた展示の工夫が例年の課題である。29年度は本格修理だけでなく対症修理とその保存方法、CT装置の役割などについても紹介した。修理だけでなく、その前後も紹介することで博物館の文化財保存のありかたについて、来館者の方々への理解促進につなげることができた。30年度に向け、さらに博物館内での保存修復事業の重要性を一般の人々へ分かりやすく伝えるための視点も意識し、修理技術者とともに修理時の資料情報や材料の収集を継続する。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>装こう修理のフェローが昨年度で終了し不在だが、外部技術者として招き修理対応を継続。立体作品を手掛けるフェローにより館内で応急修理が可能に対応が増えたことで、本特集で紹介できる案件の分野が広がっている。様々な文化財保存の専門技術者が事業に関わることで、修理の進捗のみならず情報も年々深化している。</p> <p>保存修復課の活動と成果が本特集によって臨場感を持って来館者に伝わり、文化財保存に関する興味関心と理解の向上へつながるよう、毎年新しい視点で鑑賞できるテーマを設け事業を展開する。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「日本の仮面 能狂言面の神と鬼」に関連する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>当館には 200 面を超える仮面が収蔵されているが、そのすべてに十分な調査研究が行われているわけではない。近年、作品研究及び収蔵品の活用を念頭に、順次調査を進めている。29 年度は、能に登場する神や鬼、怨霊、精霊の役に使用する面を展示するため、文化庁から借用した能狂言面を中心に作品調査と撮影を実施した。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 (兼国際交流室長) 浅見龍介
【主な成果】	<p>(1) 作品の調査 収蔵作品のうち、主に文化庁からの借用品の調査を進めた。近年文化庁から借用した能狂言面の調査はこれまで実施ができていなかったが、29 年度着手することができた。 調査は彫刻担当研究員に加え、芸能史の専門家などからの助言も得ながら、計画的に進めた。</p> <p>(2) データの蓄積 近年継続している仮面の調査と同じ手法と基準を用い、比較検討が可能な、客観的データの収集及び整理につとめた。これにより、今後の研究に活用可能かつ他分野での研究にも寄与するデータを蓄積することができた。</p> <p>(3) 撮影の実施 調査対象の作品の撮影を実施した。</p> <p>(4) リーフレットの作成 展示をより深く理解し、楽しんでいただけるようにリーフレットを作成、配布した。</p>		
【備考】	<p>本研究の成果である特集「日本の仮面 能狂言面の神と鬼」(30 年 3 月 20 日～4 月 22 日) と同時期に、本館 9 室では特集「神と鬼の風姿」(30 年 2 月 20 日～4 月 22 日) が実施された。 また、両特集の関連事業として、能公演「日本文化との出会い トーハク能 嵐山」(30 年 3 月 30 日) を開催した。</p>		


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>本調査研究成果は展示として公開される。さらに、他の展示との連携や、関連事業の実施なども行い、幅広い層に受け入れられることができた。</p> <p>また、これまで整理・蓄積されてこなかった作品のデータや画像などは非常に貴重なものであり、今後の彫刻史研究のみならず、芸能史、国文学等の研究にも寄与することが期待できる。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、能狂言面の調査研究を実施した。</p> <p>今後も調査研究を継続し、ほかではほとんど行われていない能狂言面の研究を進め、展示に反映していく。また、調査研究の成果を多くの分野で活用できるように整備していく計画である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「高野切—平安時代最盛期の仮名」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	30年度に行う特集「ひらがなの美—高野切—」(本館特別1室、30年5月8日～7月1日)を充実した展示にするための調査研究。現存最古の『古今和歌集』の写本にして、平安時代最高峰の美しさを持つ仮名作品である「高野切」は、日本の書の歴史においては基本中の基本の作品である。その基本の美しさをできるだけわかりやすく適切に展示・解説することを目標として、展示作品や関連資料の調査によって、展示手法、展示構成の検討を行う。また、特集にあわせて『東京国立博物館セレクション 高野切』を発行する予定のため、その調査研究も同時に進める。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】	<p>(1) 作品、関連資料調査</p> <p>4月21日：個人所蔵の「高野切」ほか関連作品を調査した。 10月16日：寄託品の手鑑にある関連作品を調査した。 11月28日：「浪花帖仮名巻」(歴史資料)の関連資料を調査した。 12月21日：出品作品の新規撮影と同時に調査を行った。</p> <p>(2) 関連資料の収集 (12月22日ほか)</p> <p>出品作品や関連作品の画像や関連する資料のデータを収集した。</p> <p>(3) 成果とその公開</p> <p>関連する研究成果を、「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』の書写年代について—高野切第三種筆跡との比較より—」として論文で発表した(8月31日)。</p>		
	 <p style="text-align: center;">箱書の確認</p>		
【備考】	<p>(1) 作品、関連資料調査 調査件数：10件、画像撮影点数：62点</p> <p>(2) 関連資料の収集 収集資料の件数：66件</p> <p>(3) 成果とその公開 公開件数：1件</p> <p>恵美千鶴子「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』の書写年代について—高野切第三種筆跡との比較より—」(田島公編『禁裏・公家文庫研究』第6輯、思文閣出版、29年8月)</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	書の歴史にとって基本の作品である「高野切」を、わかりやすく的確に紹介することは重要である。そのための準備となる調査研究は、着実に進めることができた。出品作品のみならず、関連する作品や資料まで幅広く調査し、その中から効果的な出品作品を選出することは、多角的な研究を進めることができたといえる。また、「高野切」の展示を計画する以前より研究を進めていたため、その継続的研究の成果を論文で発表した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度に展示を行う特集の準備段階としての調査研究を大いに進展することができた。着実に調査を行うことで、関連資料の発掘もでき、研究をより深化させられ、研究成果を論文発表した。30年度には、これらの成果をもとに展示の空間構成やパネル製作を進めていきたい。また、『東京国立博物館セレクション』発行(30年4月予定)では、蓄積されてきた成果を盛り込んだものとした。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	ク (ア) 日本染織コレクションの形成に関する研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1)
【事業概要】 本研究は、日本国内外の機関や個人コレクターが所蔵する日本染織コレクション蒐集の経緯や来歴、構成内容を網羅的に調査し、近代以前は蒐集されることがなかった日本染織が古美術品としての価値観を形成していく過程を考察するものである。染織史研究者の間では研究対象とならなかった江戸時代以降の袷染類・裂類を中心に各所蔵先において染織コレクションの全容が分かる調査を行い、近代における日本内外の日本染織の動向を追跡する。本調査研究によって、日本染織の価値が理解されないままに散逸する危機のある日本内外のコレクションに価値付けがなされ、現在、美術史の一分野として位置付けられる染織文化史研究が、どのような価値観を基盤として確立されたのかが実証される。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室長 (兼貸与特別観覧室長) 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 調査概要 ・名古屋・松坂屋美術館にて、同館に所蔵の日本染織コレクション 65 件を調査 (8 月 8～10 日)。また、小袖模様雛形本 78 冊を調査 (10 月 23 日/12 月 11, 12 日)。 ・神奈川・女子美術大学美術館にて、同館所蔵の日本染織コレクション 81 件を調査 (9 月 5, 6 日/10 月 12, 31 日/11 月 20 日) ・ニューヨーク・メトロポリタン美術館にて、日本工芸の展覧会を調査 (8 月 21 日) ・プロビデンス・ロードアイランド・デザイン・スクールで日本染織コレクション 2 点、蒐集にかかわる資料 10 点を調査。同スクールが所蔵する日本染織コレクションについて 30 年度集中的に調査を行う旨依頼した。(8 月 22 日) ・ハーバード大学美術館にて日本染織コレクション 5 点を調査 (8 月 23 日) ・ボストン美術館にて日本染織コレクション 30 点を調査 (8 月 24, 25 日) ・ライデン国立民族博物館にて日本染織コレクション 10 点を調査。同館が所蔵する日本染織コレクションについて 30 年度集中的に調査を行う旨依頼した。(11 月 6 日) ・ユトレヒト中央博物館にて日本染織コレクション 1 点を調査 (11 月 7 日) ・アムステルダム国立美術館にて日本染織コレクション 105 点を調査 (11 月 8, 9 日) ・デンハーグ自治区博物館にて日本染織コレクション 3 点を調査 (11 月 10 日) (2) 調査の結果得られた知見 ・名古屋・松坂屋美術館所蔵の日本染織コレクションのうち、大正期に染織のコレクターであった洋画家・岡田三郎助が蒐集し、その後、松坂屋に譲渡した小袖コレクションについては、その全容が明らかとなった。 ・女子美術大学美術館に所蔵される日本染織コレクションについては、その全容が明らかとなった。 ・ハーバード大学美術館が野村正治郎から購入した打掛を初めて日本の研究者が調査する機会を得た。 ・ボストン美術館の日本染織コレクションのうち、山中商会が寄贈した日本染織コレクションの全容が明らかとなった。また、野村正治郎からアメリカのコレクターが購入し同館に寄贈した日本染織コレクションの全容が明らかとなった。 ・オランダの各博物館に所蔵される江戸時代前期～中期に日本から輸入した日本染織の概要を知ることができた。 (3) 調査研究の成果 ・公開研究会にて研究報告 (30 年 3 月 17 日; 黒田記念館セミナー室) ・野村正治郎及び山中商会のアメリカ合衆国における第 2 次世界大戦前の古日本染織売買の活動について『MUSEUM』に執筆する予定。	
【備考】 科学研究費助成事業の 5 年計画の 3 年目 調査実施機関: 9 機関 調査日数: 21 日 調査作品数: 378 件	



ハーバード大学美術館での調査風景 (8 月 23 日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の3年目である29年度は、海外調査班に京都国立博物館国際交流室アソシエイトフェローも参加し、海外の研究者にも十分な情報が即時に提供できるようにし、海外の日本染織研究者も同行することで調査を円滑にした。また、公開研究会を行い、これまでの調査成果を中間報告という形で外部研究者にも情報を公開した。来年度の調査に向けての交渉も順調に進んだ。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。また、調査成果を公開研究会という形で広く一般に公開することができた。30年度以降は、在外日本染織コレクションを100件以上所蔵するプロビデンス・ロードアイランド・デザイン・スクール、ライデン国立民族博物館を集中的に調査することで、調査件数を増やし、まとまった成果をあげる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク(イ) 絵巻を中心とした古代・中世絵画の伝来に関する研究(科学研究費助成事業) (4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博搜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、29年度は約360件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。 (2) 当館所蔵絵巻模本の調査 絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、当館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理を継続して行った。29年度は特に(4)下記の特集に関わる模本など約10件の調査を行うことができた。 (3) 絵巻詞書のデータ化 絵巻作品の文字情報には伝来などについて記すものもある。そこで公開されている絵巻作品の詞書及び伝来情報のデータ化を進め、29年度は4タイトルの入力を終えた。 (4) 調査・研究の展示での公開 上記の調査・研究を踏まえ、以下の展示として成果の一部を公開した。 ・特集「室町時代のやまと絵」当館本館特別1・2室 10月24日～12月3日			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の3年目 (1) 絵巻伝来関係資料の抜き出し件数 約360件 (2) 絵巻模本の調査件数 約10件 (3) 絵巻詞書のデータ化 4タイトル (4) 展示への反映 1件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の3年目である29年度は、当初計画に則り、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、絵巻詞書のデータ化という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、調査・分析の成果の公開を展覧会という形で一般向けに行うことができたのは大きな成果と言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究調査研究を遂行し、データの収集を効率的に行い、また、その成果を展示に反映させることができた。30年度も引き続き、継続的に資料の収集、作品調査を進め、その成果を反映した研究を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク(エ)中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容に関する研究(科学研究費助成事業) (4)-①-1)		
【事業概要】 社寺縁起絵は、神社仏閣の由来や霊験を描き出した説話画で、日本仏教興隆の祖である聖徳太子の絵伝を淵源とする祖師高僧伝絵とともに、鎌倉時代に盛んに制作された。本研究では社寺縁起絵、高僧伝絵の最盛期とも言える鎌倉時代の作例とその構造を権力基盤の強化に利用した近世初期公武権力による作例を比較し、中世から近世へ至る絵画制作の「場」の実態と歴史的位置付けを明らかにする。そのため、当館収蔵品の調査、関連資料のデータ化、社寺縁起絵や高僧伝絵に登場する聖地の現地踏査を行い、これらの成果発表として論文発表、特集展示等を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 瀬谷愛
【主な成果】 (1)3年計画の3年目となる29年度は28年度の成果に基づき、近世に制作された社寺縁起絵、高僧伝絵を対象を広げた。五代將軍綱吉、柳沢吉保の帰依を受けて浄厳が湯島に開いた真言宗霊雲寺派総本山霊雲寺に関して、「真言律宗霊雲寺末寺院牒」「日吉山王本地仏曼荼羅図」「江戸名所図会」ほかの調査成果を、特集「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」(本館2階特別2室、4月25日～6月4日)として広く一般に公開した。成果はあわせてオールカラー、8ページのリーフレットを3,000部作成し、来館者へ配布した。また、5月16日(火)にはギャラリートークを実施し、来館者へ直接報告した。 (2)北区飛鳥山博物館が近年所蔵した「若一王子縁起絵巻模本」について調査を行った(30年1月10日)。この絵巻の原本は、三代將軍徳川家光の命により、林羅山が詞を撰述、狩野尚信が絵を描いたことが知られる名品だが、遅くとも万延元年(1860)までには焼失したと考えられており、その良好な模本が東京国立博物館、紙の博物館、そして飛鳥山博物館に保管されている。東博本は狩野派とみられる絵師によるもので、紙の博物館は板谷絵所、飛鳥山博物館は住吉絵所であることが判明している。江戸時代に將軍が関与した縁起絵が御用絵師によっていくつも写され、伝来している構造がよく分かった。この成果は、北区飛鳥山博物館春期企画展「徳川家光と若一王子縁起絵巻」(30年3月18日～5月7日)展覧会図録に寄稿した。 (3)近世の縁起絵関連として、福島・歎喜寺所蔵(福島県立博物館寄託)「光明曼荼羅」(霊雲寺開基浄厳款記)、「千葉妙見寺縁起」(寛文2年(1662))の作品調査を行った(8月10日)。 (4)引き続き「一遍聖絵」に関連して、表現が近似する作品として従来、指摘されてきた、「法華経曼荼羅図」(富山・本法寺)ほかの作品調査を行った。あわせて、中世律宗の拠点であったとみられる富山・氷見、砺波近辺の放生津八幡宮、中世墓跡、氷見市立博物館等(10月12日～13日)等の踏査を行った。27年度成果の「一遍聖絵」シンポジウム報告書は、30年刊行予定で進行している。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 作品調査:21件(上記の他、「箱根権現縁起絵」箱根神社、「浄土五祖絵」「浄土五祖絵伝」光明寺、を調査撮影)、現地踏査:1回、学会研究会展覧会等発表数:1件、論解説等印刷物:2件、「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」(特集「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」リーフレット、4月25日)。「若一王子縁起絵巻と住吉・板谷絵所」(春期企画展「徳川家光と若一王子縁起絵巻」(30年3月18日～5月7日)展覧会図録、北区飛鳥山博物館、30年3月18日)。			



特集「幕府祈願所 霊雲寺の名宝」
会場風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、1～2年目に得られた「一遍聖絵」や縁起絵諸本に関する成果を作品調査と実地踏査によって深化させ、さらに近世の寺社再興、再編に関わった幕府、將軍と古社寺、社寺縁起絵との関係について研究を進めることができた。成果は博物館における展示、リーフレット、外部博物館の展覧会図録への寄稿で報告した。30年度は、本研究から発展した中世律宗の美術制作に関する研究について、視野を広く持ってあたりたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。成果を特集展示、外部博物館展覧会図録等で発表することができた。また、本事業による想定外の成果により、28～29年度は中世律宗との関わりを視点とした調査研究を追加し、新しい課題を発掘することができた。30年度以降はその成果を順次発表、報告していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク(オ) 清朝末期における中国踏査写真資料に関する発展的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が収蔵する写真資料のうち、清朝末期に文物、史跡の撮影を行った岡倉天心・早崎稜吉、塚本靖の写真資料に焦点をあて、文献資料の調査及び実地調査によって、現状との比較、写真が撮影された行程、未詳な被写体、被写体が選択された背景を明らかにし、当時における写真撮影の実態を解明する。その成果は、博物館のウェブ上で公開中の「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」に反映させるとともに、特集によって写真資料を一般に公開する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 関紀子
【主な成果】 29年度は、明治26年(1893)に岡倉天心・早崎稜吉が行った中国調査のうち、陝西省西安から四川省成都までの行程、及び四川省重慶から上海までの行程のうち湖北省宜昌から武漢までの行程について、竹添井井著『棧雲峡雨日記』と比較しながら実地調査し、旅行記写真が撮影された場所の特定と現状との比較を行った。 (1)第1回調査、河南省西安から四川省成都、8月8日～8月16日 陝西省宝鸡市：大散関、陝西省岐山県：五丈原、武侯祠、太平寺、岐山県の城壁、陝西省宝鸡市：大散関、陝西省留壩県：張良廟、陝西省漢中市：褒斜古棧道(石門棧道)、鶏頭冠、漢中博物館、陝西省勉県：武侯祠、武侯墓、馬超墓、諸葛亮読書台、勉県万寿塔、四川省広元市：千仏崖、皇沢寺、明月峡古棧道、昭化古城、費禕墓、四川省劍閣県：劍門関、覚苑寺、姜維墓、四川省梓潼県：七曲山大廟、四川省羅江県：白馬関、龐統祠、龐統墓、四川省成都市：杜甫草堂、青羊宮、武侯祠博物館、万理橋 (2)第2回調査、湖北省宜昌から武漢、30年3月6日～3月12日 湖北省宜昌市：長江船着場、天然塔 湖北省荊州市：長江船着場、荊州古城 湖南省岳陽市：長江船着場、洞庭湖、岳楼、慈氏塔 湖北省武漢市：黄鶴楼、帰元禅寺、宝通禅寺、旧漢口駅、旧日本領事館			
			
		劍閣 明治26年(1893) 早崎稜吉撮影	現在の劍閣 29年8月撮影
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目。 29年度の調査回数2回。 平成館企画展示室で特集「清朝末期の光景—小川一真の北京城写真」(9月26日～11月19日)を開催した。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である本年度は、年度計画をほぼ達成した。29年度は明治26年(1893)に岡倉天心・早崎稜吉が行った中国調査のうち、陝西省西安から四川省成都までの行程を中心に、明治9年(1858)に同地を踏査した竹添井井の『棧雲峡雨日記』の記述との比較を行いながら実地調査を行い、本年度に予定していた調査地をほぼ調査することができた。また、27・28年度の成果として特集を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。本研究計画では、清朝末期に行われた岡倉天心・早崎稜吉、塚本靖の中国調査の行程を3ヵ年に分けて実施調査を計画しており、中期計画をほぼ達成した。 最終年度を終え、30年度に27～29年度の調査の成果として、特集「清朝末期から民国初年の写真紀行—日本人が撮影した近代中国—」(仮)(30年9月4日～10月28日)を開催する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク(カ)大小摺物(絵暦)の美術史及び文化史に関する総合的研究(科学研究費助成事業) (4)-①-1)		
【事業概要】 東京国立博物館蔵「大小類聚」の精査とデータベースを作成し、公開する(研究者対象)。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	客員研究員 岩崎均史
【主な成果】 (1)3年計画の2年目に当たる29年度は、当館所蔵の「大小暦類聚」(全20冊)全巻の大小個々のデータ採取(寸法・摺/写の判別・注文者・絵師情報、文字の翻刻・印章の判読)を完了させ、データベースに入力しつつ、データの内容検証を行った。30年度以降この完了分データベースに大小の形態(趣向及び別途分類も含む)、干支情報などを加えていく。 (2)研究分担者とは常に連絡を密にし、進行状況の報告など相互に行っているが、10月8日には、あべのハルカス美術館(大阪市)において、同館で開催中の北斎展シンポジウムに参加しつつ、研究会を開催し、情報の交換を行った(参加者は、岩崎均史(代表者)と以下の研究分担者、田沢裕賀(当館学芸研究部長)、大久保純一(国立歴史博物館教授)、桑山童奈(神奈川県立博物館学芸員)、及び研究協力者北川博子(あべのハルカス美術館主任研究員)、大和あすか(静岡市東海道広重美術館学芸員)以上6名)。今回の地方開催に合わせ、分担者個々に中部地域及び関西地域の大小調査も活発に実施された。 (3)今後の方向性として他に、神奈川県立博物館の長谷部言人コレクション(長谷部家寄託)に関して、いずれは平行して同様の調査を行うことと、コレクションの帰属に関しても本研究の成果を生かすことなど、また、他の未確認関連資料の存在確認と調査を計画すること、などが確認された。特に作業として最終年度は、データベース公開に向け、「大小暦類聚」画像及び全てのデータを全ての研究分担者・協力者(7名)で共有し、個々に確認と検討を加え、データベースに反映させる目途が立った。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である29年度は、継続調査を行っていた東博所蔵の「大小暦類聚」(全20冊)の再調査と確認、データ化を完了させた。これにより、以前から判明しつつあった、年次別の摺り(オリジナル)と描き(写し・コピー)の区別を明らかにすることができ、「大小暦類聚」の編纂が、当初よりのものでなく、次第に精度を上げていったことを確実に検証することができた。これを踏まえ、データベース公開に向けた作業として、30年度以降の研究発展に対する作業の絞り込みが可能となった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の調査を外部専門家の協力によって行った。29年度は、28年度に続き、収蔵作品の調査が中心であったが、「大小暦類聚」の再調査と確認、データ化は、当初計画より順調に推移し、29年度中に完了することができた。この成果を、30年度に分担者・協力者で共有し、ここに確認と検討を加える。まとめられた最終形が、公開されるデータベースの基本となる。研究会により、同種の作品の所在と、調査方法を確立することができ、30年度以降、他の所蔵先の作品調査を重ねることで、大小摺物(絵暦)の文化史的重要性を明らかにすることができる状況にある。その成果として、将来的に干支関連も含め、様々な展示での活用が図られる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものであり、あわせてデジタル画像による最新版の画像資料データベースを作成することを目指している。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】	<p>これまで、日本国内では詳しい情報が紹介されてこなかったボストン美術館（アメリカ）所蔵の「聖徳太子絵伝」について、詳細なデジタル撮影を行い、事績場面の分析など基礎的な情報整備を行った。</p> <p>また、同様に「叡福寺本」及び「四天王寺本」についても、詳細なデジタル撮影の実施によって、画像情報の整備や事績場面の分析など、基礎的な情報整備を行った。</p> <p>今回の調査対象作品のように、主要な作例や画像資料の少ない作例に関して高精細画像を整備し、事績内容を検討して場面ごとに分類することで、従来より詳細な事績分類を行うことが可能となった。また、描写内容についても、高精細画像で細部をよく観察検討することが可能となったため、新たな知見の発見にもつながることができた。</p> <p>これまでの調査結果と合わせて、データベースを構築し、聖徳太子絵伝研究のみならず、伝記絵の中での図様の継承や流布、転用などの研究や、描写された習俗・風俗の研究など、絵画研究の発展に貢献するとともに、展示公開の際には、多くの方々に聖徳太子太子絵伝をわかりやすく理解できる解説文に活かしたい。</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業6年計画の6年目（1年延長）</p> <div data-bbox="253 996 655 1263" data-label="Image"> </div> <p>ボストン美術館現地調査（8月9日）</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業6年計画の6年目（1年延長）である29年度は、主な成果で述べたように、調査成果としてはボストン美術館本、四天王寺本、叡福寺本についての詳細なデジタル撮影などの基礎的な情報整備ができ、所期の目的を達成した。</p> <p>引き続き調査研究によって収集したテキストデータの整備を図り、データベースの完成、公開を予定している。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>1年延長した最終年度までの6年間で、当初計画していた作例のすべてをカバーしきれていないが、主要な作例や画像資料の少ない作例に関して高精細画像を整備し、事績内容を検討して場面ごとに分類する中で、従来よりもより詳細な事績分類ができた。また描写内容についても、高精細画像で細部をよく観察検討できるようになったため、新たな知見の発見にもつながることができた。</p> <p>データベース化が未完成だが、完成時には、太子絵伝研究のみならず、伝記絵の中での図様の継承や流布、転用などの研究や、描写された習俗・風俗の研究などが広がる。</p> <p>そして太子絵伝に関する特集や特別展などへの展開が期待される。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>法隆寺献納宝物として当館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂(じょうだいぎれ、古代の織物)を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態で保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また、未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像(数量・技法・文様)についても作品調査と写真撮影によってデータベース化を図る。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育普及室研究員 三田覚之
【主な成果】	<p>(1)論文発表実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京国立博物館研究員・三田覚之ほか、「法隆寺献納宝物の木簡について」、10月15日、『MUSEUM』第670号、東京国立博物館、査読あり 東京国立博物館研究員・三田覚之ほか、「奈良・法隆寺献納宝物」、11月、『木簡研究』第39号、木簡学会、査読あり 東京国立博物館研究員・三田覚之ほか、「飛鳥寺本尊 銅造釈迦如来坐像(重要文化財)調査報告」、『鹿園雑集 奈良国立博物館研究紀要』第19号、奈良国立博物館、査読あり 東京国立博物館研究員・三田覚之ほか、『日韓 金銅半跏思惟像 科学的調査に基づく研究報告』、国立中央博物館 <p>(2)その他発表実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京国立博物館研究員・三田覚之(編集)、『法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄4』、30年3月、東京国立博物館 <p>(3)国内調査実績</p> <p>法隆寺献納宝物の染織品調査(本格修理作品2件に対する事前調査)、通年</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の延長4年目(最終年度)</p> <p>(1)論文等発表回数:4件</p> <p>(2)その他発表実績:1件</p> <p>(3)調査回数:1件</p>		



法隆寺献納宝物「裳」の修理作業

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業の最終年度である29年度は、本研究の一環として行った法隆寺献納宝物の未整理品調査において見出した木簡について論文を2篇発表した。本作は、伝世品として国内最古と考えられる木簡であり、論文を通じ、広くその意義を公表したものである。</p> <p>また、奈良・飛鳥寺の本尊像、および日韓所在の金銅半跏思惟像について調査に基づく所見をまとめ、分担執筆者として論文を発表した。</p> <p>献納宝物の染織品調査については、未整理品の袍と裳について行い、特に裳については29年度から本格修理を開始し、実作業に参加している。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。法隆寺献納宝物の未整理品から見出した木簡について論文を発表するなど、館蔵品に対する再評価を行い、また、研究成果を法隆寺献納宝物の染織品本格修理に活かすことができた。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1)		
【事業概要】 本研究は我が国において伝来、また出土した染織作品を通じ、広く古代東アジア世界における染織文化の実像を明らかにしようとする試みである。これまで日本染織史の分野で研究されてきた作品を国際的な文化交流の枠組みで捉えなおし、我が国へ伝来した染織作品がもつ意義の大きさを明らかにしたい。また、考古遺物に付着した繊維等を詳細に調査・検討することで、現在では形の失われた作品の遺存状態や織物などの種類、仕様等を通して、現存作品と比較検討することで、古代東アジアにおける染織品の使用法についても、その実態の解明を目指すものである。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	客員研究員 沢田むつ代
【主な成果】 (1)主な調査 ・茨城県行方市・三味塚古墳出土の遺物は、過去に調査が行われ、報告書も出版されているが、繊維については詳細が記されていない。遺物は現在2ヵ所(明治大学博物館と茨城県立歴史館)に分散しており、今回は茨城県立歴史館所蔵品の大刀や鉄鏃、冠等に付着した繊維の調査を行った。これらの遺物に付着した繊維については、これまで言及されていない新発見が得られた。 ・高井田山古墳出土品は、現在大阪府柏原市歴史資料館で所蔵されており、この古墳からは鏡や火熨斗、槍等が出土している。これらに付着した繊維の素材をはじめ、種類や仕様について調査を行った。 ・法隆寺献納宝物を含む法隆寺伝来の染織品調査(存在確認で、新たに発見された舞楽装束の袍と裳の事前調査)と、裳の修理に着手した、修理は通年行っている。 (2)主な調査成果 ・高井田山古墳出土の遺物のうち、火熨斗は韓国・武寧王陵出土品に類例がある。高井田山の遺物に付着した繊維等についてはほとんど報告されていないため、朝鮮半島との関係、織物の種類や仕様等、種々な新知見を得た。 また、槍の柄巻きについて新資料を検出した。 (3)主な調査成果の発表 ・これまで長年調査・研究を続けてきた法隆寺献納宝物の経緋(広東裂)の調査・研究成果をまとめた論文を4月に『MUSEUM』667号へ掲載した。広東裂については、残欠を組み合わせて文様を復元し、小片の残欠も、どの文様と一連になるかを推定することができた。さらに、緋の文様は中国・敦煌莫高窟壁画や法隆寺・金堂壁画、金堂の四天王像の袴等に描かれており、また、中国青海省からは実物資料が出土している。これらを総合的に検討し、文様から中国系の緋と韓半島製作の二系統の種類があったことを明らかにした。 ・これまで調査を行ってきた福岡県大野城市善一田古墳出土の盛矢具に付着した繊維についての調査成果論文を、11月に刊行された『乙金地区遺跡群23(中巻)善一田遺跡第4次調査』に掲載した。なお、ばらばらの状態で出土した胡籙金具や鞞金具に付着した織物や縁飾り等から、当初、胡籙が3個体あり、鞞金具に付着した織物から鞞の仕様を推定した。 ・法隆寺伝来の染織品修理の成果については、10月刊行の『MUSEUM』670号で論文を発表した。			
【備考】 科学研究費助成事業の最終年度となるため、4年間の研究成果をまとめた『東京国立博物館所蔵 法隆寺伝来一飛鳥・奈良時代の染織品一』を刊行した(共著)。30年3月。 (1)調査回数：考古関係は高井田山古墳出土、益子天王塚古墳出土、鳥居前古墳出土等の遺物に付着する繊維等の調査7件。染織等関係は当麻曼荼羅、天寿国繡帳の調査。法隆寺特別調査「商山四皓・文王呂尚図屏風」の調査に参加した。 (2)論文等の成果物：①沢田むつ代「法隆寺献納宝物の広東裂—その分類および絵画・彫刻等からみた文様の伝播について—」『MUSEUM』667号、東京国立博物館、4月。沢田むつ代「法隆寺伝来・上代裂 天蓋垂飾・錦・綴織・刺繍等の残欠—平成二十五年度修理の成果—」『MUSEUM』670号、東京国立博物館、10月。沢田むつ代「善一田古墳出土の盛矢具に付着する繊維について」『乙金地区遺跡群23(中巻)善一田遺跡第4次調査』大野城市教育委員会、11月。 (3)講演会等の回数：3件			



上代裂の調査・修理風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の最終年度である29年度は、プロジェクト名に記したとおり、法隆寺伝来の広東裂について、文様の復元と古代東アジアとの文化交流の関連性等を論文にまとめることができた。また、考古出土遺物に付着する繊維についての調査では、新発見や資料の蓄積等ができた。この調査は今後とも継続的に行っていく。国内の資料調査はある程度遂行することができたが、海外調査については、先方との日程調整等がつかず行うことができなかった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施することができた。科学研究費助成事業の最終年度にあたり、これまで実施してきた研究成果を報告書としてまとめることができた。なお、考古の出土遺物に付着する繊維については、今後継続して調査を行い、遺物中心の考古学とは違った視点で繊維の素材や織物の技法、仕様等を調査し、遺物の埋納仕様の解明に視点をあてて研究していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク デイルムン文明の起源—バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究—(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金により全5年度にわたって実施される調査研究の第4年度。26～28年度に引き続き、バハレーン王国において、30年1～2月に初期デイルムン時代の古墳群の考古学的調査研究を実施した。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	客員研究員 後藤健
【主な成果】	<p>(1) 調査概要：バハレーン本島内陸部、ワーディー・アッ=サイルに所在する初期デイルムン時代の古墳群において、本年度は5基の高塚式古墳を新たに発掘した。</p> <p>(2) 調査の結果得られた知見：従来、本古墳群では墳丘を外周壁で囲む古墳が極めて少数知られており、社会的「エリート」の墳墓と考えられてきた。本年度の調査対象にはそれらが3基含まれていると考えられていたが、発掘の結果、そうではないことが判明した。また1期の古墳の石室内からは遠隔地よりもたらされた紅玉髓製飾り玉が2個出土した。</p> <p>(3) 調査研究の成果：発掘された古墳の共通点は以下の通りであった。石室上に石積による覆いはないこと、1名の被葬者が頭を東、足を西、顔を北に向け、横臥屈葬で安置されること、そして焼き跡のある山羊または羊の骨が備えられていることなど。</p>		
			
	左より WS-207 号墳 (発掘前)、WS-207 号墳石室内部、WS-107 号墳出土紅玉髓製飾り玉、日本人会の見学会 (2月9日)		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の5年計画の4年目。 本年度はバハレーンにおける古墳5基の発掘調査を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公式概報：Gotoh, T. et al, <i>Preliminary Report on the Archaeological Excavation at Wadi as-Sail 2018</i>. ・口頭発表：Gotoh, T., “Dilmun and the Japanese: a short history of archaeological studies.” (Feb. 7, 2018, Bahrain-Japan Business and Friendship Society) ・口頭発表：安倍雅史「古代デイルムン王国の起源を求めて」第25回西アジア発掘調査報告会 (30年3月25日, 日本西アジア考古学会・古代オリエント博物館)。 		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業5年計画の4年目である29年度は、28年度に引き続き、バハレーン王国に所在する初期デイルムン時代のワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的調査を中心に実施された。</p> <p>29年度は5基の古墳を発掘調査し、その内容を明らかにした。この時代の古墳には珍しい宝飾品が出土したことも大きな成果であった。ただ当初もくろんでいた外周壁付きの「エリート墓」の発見には至らなかった。都市化が進みつつある現在、すでに多くの古墳が失われてしまったが、その少数例が、現存する古墳群の中にあるか否かは次年度において追究すべき課題である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。</p> <p>26～30年度にわたる全体計画の中で、バハレーン王国ワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的発掘調査は中核を占めるものであるが、現在までにすでに10基を精査しており、所期の成果を挙げつつある。</p> <p>また研究代表者・分担者が国内外の学会等で成果を公表し、また現地の日本人社会、学校等でも同国の古文化財に関する知識の普及を実施してきたことは誇るべき資産であり、30年度においても継続したいと考えている。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 「地域考古学」と「聖書考古学」の協業による古代パレスチナ地域史の再構築（科学研究費助成事業）((4)-①-1)		
【事業概要】 古代オリエント史、その中でも古代パレスチナ地域史の再構築を試みる考古学的研究。当域の古代史は概して、断片的な文献史料や旧約聖書の記述に依拠したかたちで描かれてきた。これに対して、本プロジェクトは、「地域考古学」と「聖書考古学」の立場を対峙させ、双方のコミュニケーションを重ねることで、より魅力的な古代パレスチナ史を提示することを目的とする。 本分担研究が属する「地域考古学」班では、既存の歴史観や資料に対する先入観を極力取りのぞき、発掘で得られた一次資料を丹念に分析することで地域史の復元、再構築に取り組んでいる。昨年度に引き続き、イスラエル国内の都市遺跡、テル・レヘシュにおける発掘調査成果を検討し、青銅器時代の都市国家システムや、鉄器時代末期の帝国支配地域の実態を実証的に検証することができた。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室研究員 小野塚拓造
【主な成果】 29年度は研究代表者、分担者とともに1件の国内調査を実施し、古代パレスチナ史を再構築する上で貴重な学術的成果を得ることができた。成果の一部は一般誌において分かりやすく紹介したほか、より学術的な論考を準備中である。 (1) テル・レヘシュの発掘調査成果の整理と検討 29年度には出土物の検討を行い、同遺跡の青銅器時代末期の文化層が存在することを確認するにいった。同時代の西アジアは、青銅器時代的な都市国家社会から、中央集権的な領域国家が形成される過渡期に相当し、注目を集めている。 (2) 公開シンポジウム テル・アヴィヴ大学のオデド・リブシツ教授を迎えて、天理大学で開催された公開シンポジウムにて、研究代表者らとともに、研究成果を踏まえたパネル・ディスカッションを実施した。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 (1) 国内調査 1件 (2) 論文発表1件、シンポジウムでのパネル・ディスカッション2件 新聞等による関連報道 2件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、継続的に実施してきたテル・レヘシュの発掘調査成果を基軸に古代パレスチナ史の新たな一面を解明することに成功した。特に、下ガリラヤ地方のカナン系の青銅器時代の都市国家が前10世紀まで生き残っていたことが実証的に提示できたのは、関連分野にとって極めて重要な知見となった。同地の古代史は『旧約聖書』やキリスト教の誕生などに関連があり、一般的にも関心が寄せられるテーマであるため、一般誌においても成果の一部を紹介した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、調査研究を実施した。本科研プロジェクトは、テル・レヘシュの調査成果を基礎資料とし、古代パレスチナ史の再構築を目指すものである3年目にあたる29年度にも、先行研究にはない新たな知見を多数得ることができた。同時に、3年間の研究を総括すべく、プロジェクトのメンバーが集まって研究成果のとりまとめと検討を実施できた。また、調査成果を社会に発信し、有形文化財の基礎的調査に基づく地道な歴史研究の面白さと重要性を示すという課題においても、一定の成果があったと考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク 東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究(科学研究費助成事業) (4)-①-1)
【事業概要】 東アジアの人々の間には、儒教に基づく礼拝空間における形象が共通の視覚イメージの一つとなっており、またそれに関わる漢詩文も思想の背景として今日まで共有されている。儀式のあり方、礼拝の諸像の形式や配置、また唱道する詩文や作法などの視点から、東アジアに遍在する礼拝の「かたち」の表象を解釈することによって、地域間や民族間の文化の多様性を明らかにする。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課
【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 勝木言一郎
【主な成果】 29年度は28年度に引き続き、儒教の影響を受けた仏教経典、そしてそれに基づいてつくられた図像に関する調査研究に重点を置いた。 (1)儒教思想を取り込んだ仏教経典とその図像に関する研究 父母恩重経は父母に対する孝道を説く仏教経典であるが、近年の学説では唐代に中国で撰述された偽経とする見方が有力である。そこで敦煌や黒水城から出土した文献などに徴し、父母恩重経や父母恩重経講经文について調査するとともに、敦煌莫高窟や大足石刻宝頂山石窟に残る父母恩重経変相の図像との比較考察を行った。 (2)仏教と儒教、道教の思想の習合とその造形に関する研究 青龍寺腰殿壁画、毘盧寺後殿壁画、公主寺大雄宝殿壁画、永安寺伝法正宗殿壁画、故城寺大雄宝殿壁画、重泰寺水陸殿壁画などの水陸画に徴し、水陸法会に基づいて三教が習合した図像を考察した。 また大足石刻の石篆山石窟第6号孔子及十哲窟、妙高山石窟第2号三教窟、仏安橋石窟第12号三教窟、石壁寺石窟第1号三教窟、そして安岳石窟華嚴洞第2号大般若洞三教合窟などの石窟芸術に徴し、山中異界観に基づく三教の宗教空間の共有についても考察を進めた。 (3)中国仏教美術にみる儒教思想の受容と展開に関する研究 上記2点の研究を踏まえ、中国の仏教寺院の絵画や彫刻の表現を切り口に、儒教思想の受容と展開を考察した。その成果の一部として「中国仏教美術にみる儒教思想の受容と展開」と題して、国際会議「釈奠—東アジアの孔子祭典を考える」(30年1月26日、筑波大学)で発表するとともに、それを加筆修正したものを『東アジア文化の基層としての儒教イメージに関する研究論文集』(筑波大学日本美術史研究室)に掲載した。	
【備考】 科学研究費助成事業の5年計画の4年目	

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の4年目である29年度は、研究の内容が儒教思想を取り込んだ仏教経典とその図像の関係から仏教と儒教、道教の思想の習合とその造形の関係へと展開できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。研究の内容が儒教思想を取り込んだ仏教経典とその図像の関係から仏教と儒教、道教の思想の習合とその造形に関する研究へと展開できた。30年度は日々の業務との連携を図りながら、研究を継続していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究—大航海時代を中心に—(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究ではアジア螺鈿史の全体像把握理解を目的として各地での作品や工房調査を行い、特に南蛮漆器に関する新たな知見を得ることを目的とした。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 末兼俊彦
【主な成果】 28年度に国外調査した作品のデータをもとに、国内伝来の作品と比較検討を行い、南蛮漆器及びそれに関連する日本の金属工芸作品の製作年代に対する新たな知見を提示した。具体的な成果公表として、第10回東京文化財研究所文化情報資料部部会研究会において、メトロポリタン美術館武器武器部門長のピエール・テルジャン氏を招聘し、大航海時代にもたらされたとされる滋賀県水口市・藤栄神社所蔵の洋剣について調査を行うとともに、その産地と製作年代についての検討と報告を行った。			
【備考】 科学研究費助成事業5年計画の3年目 第10回東京文化財研究所文化情報資料部部会研究会の発表内容については『東文研ニュース65号』(11月10日発行)にて報告。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の3年目である29年度は、28年度までの国外調査の結果と、国内調査の結果をもとにして、南蛮漆器の製作年代について新たな知見を示すことができた。また、同時代にヨーロッパよりもたらされたとされる滋賀・藤栄神社所蔵の洋剣に対して、そこに用いられている彫金技法から製作地を日本、時代を1630年代頃との結論を下し、当該作品がスペイン・17世紀製のレイピアをもとに、日本において製作された可能性を指摘することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。本年は5年計画のうちの3年目にあたり、1年目・2年目に行った国内調査・国外調査の成果の下、新たに得られた知見を2件の研究発表を通じて国内外の研究者に提示することができた。29年度の進捗は良好であり、29年度に得た各方面からの指摘をもとに、4年目にはこれまでに手の届かなかった細部の検証を行い、計画最終年度である5年目につなげる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 「月次祭礼図模本」の総合復元研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>「月次祭礼図模本」(東京国立博物館)は室町時代(15世紀頃)に描かれた屏風絵を江戸時代に写したもので、原本はすでに失われている。本図は祇園会などの祭礼描写が丁寧で、洛中洛外図との関連性への関心から美術史的注目も一段と高いが、模本という制約によって本来の絵画表現は不明な点が多かった。本研究は、技法、歴史、美術史、材料の各分野からの専門知識や研究成果を総合して、原本の図像復元を目標に絵画分析を行う学際研究である。失われた原本図像を復元し、その過程で得られる各分野の研究成果を集約することで、中世と近世の狭間にある本図の表現や成立背景について解明を試みる。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 瀬谷愛
【主な成果】	<p>(1) 3年計画の3年目となる29年度は、2度の研究会(7月24日、30年1月17日)が行われた。1、2年目に引き続き、検討をもとに研究代表者の所属する愛知県立芸術大学で復元画制作が推進され、実際の作品制作は最終的な確認と今後の成果発表(論文集等)の検討へと進んだ。</p> <p>(2) 復元画制作にあたって表現を比較するため、「月次祭礼図模本」と図様が近似することが指摘されている当館所蔵の狩野益信(洞雲)筆「年中行事図屏風」(A-12439、江戸時代・17世紀)について調査を行った(於東京国立博物館)。この屏風は近年再発見され、当館へ寄贈されたもので、「月次祭礼図」に関して、模本に描かれていること以外の情報を持ち合わせていることが期待されるものである。本調査にあわせて新知見に関する研究報告会を行い、本事業により作品の復元のみならず制作年代について新しい提示ができる見込みが得られた。</p>		
【備考】	<p>科学研究費補助事業の3年計画の3年目 研究会：2回</p>		



「年中行事図屏風」調査風景
7月24日

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、研究代表者の所属する愛知県立芸術大学での復元画制作作業が進む一方で、計画していた比較作品である当館所蔵狩野益信(洞雲)筆「年中行事図屏風」(A-12439、江戸時代・17世紀)の調査を実施した。近年再発見されたこの作品は、当初からその重要性が指摘されていたが、状態不良により、本事業の1年目にあたる平成27年度より当館アソシエイトフェローにより本格修理が行われていた。修理完了とともに本事業の調査を行うことができた。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。歴史学、美術史学からの検討を経て、3年目は2年目に引き続いての具体的な復元図案の制作を行っている。予定どおり当館所蔵「年中行事図屏風」の調査を行い、比較検討することによって有益な情報を得られた。「年中行事図屏風」については今後、当館研究員による作品紹介論文も予定されており、総体として、当館所蔵品に関する研究の一端が大きく進展することになる。最終的な研究報告会では成果発表について検討を行った。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称	ク 模本制作の第一人者・田中親美を中心とした近現代の書の受容に関する基礎的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))	
【事業概要】	明治時代後期から昭和にかけて、数多くの書画の模本制作を行った田中親美(1875～1975)の業績を整理することを主眼とする。そのために、制作された模本・複製本の所在確認とデータ収集をし、実見調査も行う。並行して、関連資料の収集なども進めることにより、近現代における書の受容・評価に関する個別研究も進める。	
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】学芸企画部百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】	<p>(1) 田中親美制作の模本・複製本の所在確認とデータ収集(5月2日ほか) 田中親美が制作した模本について、これまで展示や論文などで紹介された記録から所在を確認していく作業を行った。そのほか所在に関係するようなデータを収集し、デジタルデータとして入力した。</p> <p>(2) 模本の比較調査(12月4日、12月22日) 東京国立博物館が所蔵する「平家納経模本」(原本は広島・厳島神社蔵)一組全33巻と別本1巻を、大倉集古館が所蔵する同じ模本一組と並べて比較を行った。調査参加者：連携研究者の島谷九博館長、研究協力者の大倉集古館・田中学芸員、徳川美術館・安藤学芸員、大和文華館・古川学芸員、織物文化館・小柳学芸員。また、調査には、田中親美遺族も出席し、聞き取り調査も同時に行った。</p> <p>(3) 模本の実見調査(10月21日) 個人所蔵の田中親美制作模本の実見調査を実施した。</p> <p>(4) 関係資料・情報の収集(12月12日ほか) 生前に田中親美が発言した記録や雑誌・図録等資料より、関係する内容の記事を抜き出し、データ化を進めた。 また、模本や原本の所蔵先と連絡打ち合わせをして、情報収集を行った。</p> <p>(5) 本研究の成果を論文で発表(7月ほか)</p>	
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の1年目</p> <p>(1) 所在確認とデータ収集 A)新たな所在確認：8件 B)データ収集・入力：98点</p> <p>(2) 模本の比較調査 調査点数：23点</p> <p>(3) 模本の実見調査 調査点数：5点</p> <p>(4) 関係資料・情報の収集 データ入力点数：943点</p> <p>(5) 論文3件 「明治の皇室に選ばれた表象—明治宮殿と御物」(『天皇の美術史』6、吉川弘文館)ほか</p>	



模本比較調査 調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の3年計画の1年目である29年度は、まず、田中親美が関わった模本や複製本の所在情報を収集した。以前より蓄積してきた所在情報に加えて、あらたに8件の所在を確認できた。また、大倉集古館が所蔵する模本との比較調査を実施した。書跡、絵画、染織に関わる研究者に参加してもらうことで、比較調査を多角的に進行することができた。同時に、親美遺族からの聞き取り調査も実施できた。関係模本の実見調査や関係資料の情報収集も着実に進めることができ、早々に成果を論文で公開できたことは当初計画を十分に達成できたといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。本研究課題は、科学研究費助成事業の3年計画であり、この期間でなるべく多くの田中親美制作模本・複製本の所在を確認することを主な目的としている。所在についてはこれまでに蓄積してきた情報に加えて、新たに8件も確認できたことは着実に成果を出せていると考える。大倉集古館の模本との比較調査においては、全体の約3分の1の量の調査を終え、3年間で終了する予定である。30年度は、さらなる所在を確認するとともに、関係資料の収集につとめることで、個別研究を進めて新たな知見の確認を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 平等院鳳凰堂空間の荘厳と機能に関する総合的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 平安時代を代表する建築・絵画・彫刻・工芸の総合芸術である平等院鳳凰堂について、堂内柱絵や扉絵の光学調査を実施し、堂内全体の空間構想を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員 皿井舞
【主な成果】 科学研究費助成事業5年計画の1年目である本年度は、創建当初の扉絵8面のうち3面の撮影・調査を実施し、これと並行して、戦前に撮影された鳳凰堂扉絵および建造物彩色のガラス乾板のデジタル化に関する交渉をガラス乾板所蔵者で行う予定であった。本年度は、平等院の事情により扉絵の撮影はできなかったため、鳳凰堂内北側中品中生図母屋柱彩色のカラー・赤外・蛍光エックス線撮影および蛍光エックス線分析を行った(7月14日、7月29日～30日、8月25日～26日、9月28日、10月22日)。 またガラス乾板のデジタル化については、所蔵者とスムーズに交渉が進みデジタル化のための作業を進めた(10月3日～5日に実施、約1,000枚のうち400枚終了)。また、その後、30年3月5日～9日にわたって、残りのガラス乾板のデジタル化作業を行い、すべて完了した。			
【備考】 科学研究費助成事業5年計画の1年目			

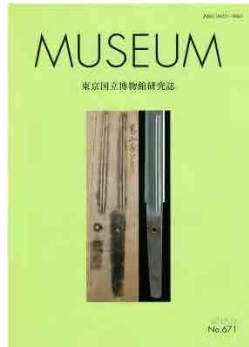
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の1年目である29年度は、これまで調査がされにくかった鳳凰堂内の母屋柱や、創建当初の壁画ではないためあまり調査撮影がなされてこなかった中品中生壁画について、主要な図容を抑えるかたちで、カラー撮影、赤外線撮影、蛍光撮影を実施することができ、また蛍光エックス線分析を実施することができた。 また鳳凰堂昭和解体修理前の状態を撮影したガラス乾板は解体前の鳳凰堂の様子を伝える唯一無二の資料であり、すでに剥落してしまっ彩色などを復元的に考えるにはきわめて重要なものである。そのデジタル化に着手することができ、また今年度中にほぼすべてデジタル化を完了する予定であり、きわめてすみやかな研究資料の取得を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画では、鳳凰堂創建当初の壁扉画および母屋柱の彩色をすべて撮影し、これまで良好な資料がなかった母屋柱の図容解明を目指し、鳳凰堂内のプランを明らかにすることを目指している。当初予定していた創建扉絵の調査は、扉絵の状態がよくないことから、ご所蔵者と協議のうえ、実施を見送った。そのため来年度以降の計画については、変更を余儀なくされることから、再考を期したい。具体的には、ご所蔵者の修理計画とあわせた天井ほかの調査の実施である。そのほかの調査の進捗はきわめて順調である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 日本刀における連続と変容の表現に着目した歴史的展開の考察 (科学研究費助成事業) (4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は、日本刀（ここでは、刀身及びこれを収納する柄や鞘などの刀装を含む）について、歴史区分ごとにみられた連続した表現と変容した表現に着目するものである。これまでの刀剣研究で培われた即物的な研究手法を基盤としつつ、学際的観点を加味することによって、より正確な歴史理解を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室主任研究員 酒井元樹
【主な成果】 (1) 研究初年度の29年度は、刀剣博物館、愛知・徳川美術館、福井県立図書館などのご協力のもと、所蔵・保管される刀剣に関する文献の調査を実施した。 (2) 前記調査の結果として、東京国立博物館研究誌『MUSEUM』671号（査読誌）にて論文「続・名物「岡山藤四郎」について」を発表した（図）。これによって、当館所蔵の短刀1口（短刀 銘 吉光、F-4）が、中世末期から連続して評価の高かった栗田口吉光による名刀であることが確認された。 (3) また、12月5日から30年2月25日まで本館14室で開催された特集「刀剣鑑賞の歴史」の図録では、刀剣を受容史の観点から考察し、その評価の基準を巡る連続と変容の様相を論じた。その結果、刀剣の評価の基準が「銘」や「造形的な特徴」など複数存在し、それらの要素が重要性を変えつつ歴史的に推移していることが分かり、刀剣を文化史のなかで捉えなおす貴重な機会となった。			
 図 『MUSEUM』671号			
【備考】 科学研究費助成事業4年計画の1年目 ・論文発表1篇 ・特集展示（含図録発行）1回			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の1年目である29年度は、調査先のご協力をいただき、査読審査を有する論文を1件発表し、展示においても研究成果を生かすことができた。30年度も引き続き調査先からのご協力を賜りつつ、多様な観点から研究を行い、その成果を論文発表などにつなげたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。研修初年度の29年度は、当初の予定どおり、研究に必要な機材の調達などを行って基本的な研究環境を構築し、研究成果を論文・展示の面から発信できた。 本研究は、刀剣の調査から得られた知見を学際的に考察するものであり、30年度も、刀剣、美術工芸史以外の歴史学の理解も深め、論文などで研究成果を公開することを目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク フェニキア人の「出現」－考古資料から見た初期の交易活動と対外進出（科学研究費助成事業）((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業は、フェニキア人の躍進の背景となった活発な海上交易と植民活動の起源と、その後の歴史的経緯を探ることである。発掘調査で得られる一次資料を含むデータを収集し、分析することで、最初期のフェニキア人によるエジプトとの海洋交易と周辺地域との接触を解明し、最終的にはフェニキア人の「出現」を具体的に描き出すことを目指す。その中で、レバノン、イスラエル、エジプトにおける調査・研究成果を地域横断的に活用することで、国境を越えた学術交流の重要性を示す。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室研究員 小野塚拓造
【主な成果】 29年度は海外調査と国内調査を実施し、初期のフェニキア史を再構築する上で貴重な学術的成果を得ることができた。 (1)テル・レヘシュの発掘調査と出土物の検討 テル・レヘシュの発掘調査に参加し、フェニキア人の「出現期」に相当する前12～前11世紀に相当する居住を検討。その出土物、特に彩文土器にフェニキア地域の影響がみられることなどを確認し、写真、実測図などのデータを作成した。 (2)国内の資料調査と研究集会 天理大学が所蔵するテル・ゼロール遺跡の調査資料を整理・検討したほか、国内の関連研究者とともに研究会を実施。成果の一部は日本オリエント学会のセッションで紹介した。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目 (1) 海外調査 1件 (2) 論文発表1件、シンポジウムでのパネル・ディスカッション2件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、上述の調査を実施したほか、関連分野の研究者とともに成果を検討した 特に、課題の一つである「フェニキア人と周辺地域との接触の解明」に寄与するデータを得ることができたことが特筆され、本事業は順調に進展していると評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。 重要な知見が得られたので、30年度以降も調査成果の検討を続けるとともに、新たなデータ収集に努める。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 東アジア礼制に基づく物質文化研究 一日・中・韓・越・琉の宮廷工芸を対象として一 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 東アジア(日本・中国・韓国・ベトナム・琉球)の宮廷工芸(宮殿・調度・服飾)を対象とし、東アジアの実情に即した物質文化研究を構築する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課出版企画室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】			
(1) 調査概要 日本・韓国・琉球の宮廷関係の史跡・資料・行事を実見調査した。 日本…難波宮跡、大津宮跡、長岡宮跡、平安宮跡、平安神宮、住吉大社、熱田神宮、大阪歴史博物館など。 韓国…景福宮、昌徳宮、慶熙宮、昌慶宮、宗廟、社稷壇、国立中央博物館、国立古宮博物館、ソウル歴史博物館、北村韓屋マウルなど。 琉球(沖縄)…首里城、沖縄県立博物館美術館。			
(2) 調査の結果得られた知見 日本・韓国・琉球の宮廷関係の史跡・資料を対象とし、形式・技法・意匠などの造形様式、規定・習俗・用例などの生活様式に関する調査を行うことにより、それぞれの物質文化について時代・地域・民族の特質を見出した。			
(3) 調査研究の成果 東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究の構築をするための日本・韓国・琉球の宮廷関係の史跡・資料・行事の情報を収集した。			
  			
<p>大阪・住吉大社(白馬神事) 韓国・昌慶宮(明政殿) 那覇・首里城(二階御差床)</p>			
【備考】 科学研究費助成事業3年計画の1年目 10月18日～10月22日: 今城塚古墳、今城塚古代歴史館、難波宮跡、大阪歴史博物館、紫香楽宮跡、近江大津京錦織遺跡、吉田神社、平安神宮 12月1日～12月3日: 首里城、沖縄県立博物館・美術館 30年2月6日～2月11日: 景福宮、昌徳宮、慶熙宮、昌慶宮、宗廟、社稷壇、国立中央博物館、国立古宮博物館、ソウル歴史博物館、北村韓屋マウル			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、日本・韓国・琉球の宮廷工芸を対象として、宮廷関係の史跡・資料・行事に関する調査を行った。本調査により、それぞれの物質文化について時代・地域・民族の特質を見出した。日本では難波宮跡、大津宮跡、長岡宮跡、平安宮跡、住吉大社、大阪歴史博物館など、韓国では景福宮、昌徳宮、慶熙宮、昌慶宮、宗廟、社稷壇、国立中央博物館、国立古宮博物館、ソウル歴史博物館、北村韓屋マウルなど、琉球(沖縄)では首里城、沖縄県立博物館美術館において、宮廷関係の史跡・資料を対象とし、形式・技法・意匠などの造形様式、規定・習俗・用例などの生活様式に関する調査を行った。これによって東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究の構築をするための情報を収集した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。 29年度は本研究の初年度にあたる。研究期間を通じて、日本・韓国・琉球の宮廷関係の史跡・資料を対象とし、形式・技法・意匠などの造形様式、規定・習俗・用例などの生活様式に関する調査を行うことにより、それぞれの物質文化について時代・地域・民族の特質を見出した。東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究の構築をするための日本・韓国・琉球の宮廷関係の史跡・資料・行事の情報を収集した。 30年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見や交流に基づき、東アジア(日本・中国・韓国・ベトナム・沖縄)の宮廷工芸(宮殿・調度・服飾)に関する調査研究を行い、東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究の構築をする準備を進める。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 近世狩野派を中心とした図様継承と絵画制作システムに関する研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館所蔵の絵画模本の中から、木挽町狩野派を中心とする狩野派によって制作された模本を抽出し、データベースの作成をするとともに、図様の継承と絵画制作システムに注目して近世の絵画制作がどのように行われていたかを研究する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	部長 田沢裕賀
【主な成果】 (1) 29年度は、4年計画である本研究の初年度にあたり、現在狩野派以外の絵師によって制作された模本を含む当館所蔵模本類の収蔵時期並びに経路、また個々の伝来情報を調査し、狩野派製作による模本の抽出作業を進めた。館史資料の中からこれまで注目されていなかった「狩野派伝来目録原稿」を見出し、これが木挽町狩野派による模本関連のもので、画題分類の資料となることを確認した。模本資料との照合を進め本研究該当作品選定の指針を確認することができた。 (2) 研究会(第1回8月22・23日)を開催し、上記の指針をもとに、将来データベースを構築するための基本方針が作られた。 (3) (2)の方針に沿って、画題、原図筆者、模写者、制作時期、原本の伝来等、研究に必要な項目を記録する調査と撮影を行うとともに、データベース化のための法量の計測、留書など模本類に記載された文字の翻刻作業を行った。 (4) 分担者の土屋貴裕、瀬谷愛がそれぞれの科学研究費助成事業と連動した絵巻物模本の調査を行った。 (5) 本研究の対象である狩野派制作の模本を含む静岡県立美術館「美しき庭園画の世界」を企画した担当学芸員を交え、研究会(第2回11月24日)を開催し、実景写生と模本制作に関する、新知見を得ることができた。 (6) 狩野山楽筆の四天王寺絵堂聖徳太子絵伝16面の調査並びに高精細撮影(12月11・12日)を行った。			
【備考】 科学研究費助成事業4年計画の1年目 (1) 研究会の開催2回 (2) 模本の調査撮影件数 129点 951カット (3) 外部資料の調査撮影件数 1件 33カット (4) 関連絵師リスト作成 299名収録			

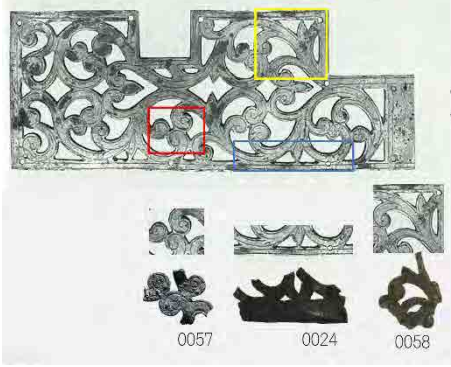
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の1年目である29年度は、館蔵模本類の中から、調査対象作品を選別することと、データベース化を目指した調査方法の確立を第一目標とし、次いでそれに基づいた調査、作品の撮影を進めることとした。作品の選別方法は、「狩野派伝来目録原稿」を見出したことで一定の方針を確立し、順次調査撮影を行う基礎的体制が確立できた。また、研究会を通じて模本だけでなく、実景写生からの絵画制作についても研究を進めることができた。調査ならびに撮影を行いデータベース化の第一歩を踏み出すことができたが、調査日程の確保が困難であったため、データベース化のための調査件数はあまり多くできなかった。ただし、分担者それぞれの研究と結びついた個人調査は進展している。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	データベース作成と該当作品選定に関する方針を確定することができた。実作品の調査件数はまだ少ないが、今後計画的に調査日程を組むことで、調査件数を増やし、撮影とデータ整理をすすめる体制を確立する。29年度に得られた知見を論文等での発表に進め、最終年度に予定しているシンポジウムの開催に備えたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 古代寺院荘厳具の復元的研究～川原寺裏山遺跡出土金属製品を中心として～（科学研究費助成事業）（(4)-①-1）		
【事業概要】	飛鳥・川原寺裏山遺跡からは、1,500点以上もの金属製品が出土しているが、その大部分は破片資料である。これら破片資料は、もとは堂内荘厳や塑像の躯体に用いたものであったと推察されている。29年度は、研究最終年度として、金属製品の年代、用途の特定並びに文様復元を実施する。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 市元 壘
【主な成果】	<p>(1) 金属製品の製作時期については近年の研究により、7世紀末から8世紀前半を中心とすると指摘されている。29年度の調査によって、新たに調査した資料についてもほぼ同様の年代観であるとの結論に至った。</p> <p>(2) 薄板透彫り風の金属製品については、これまで幡であったとの推測がなされている。今回、蝶番金具と思しき金属製品を見出したことで、この推測を機能面から補強した。</p> <p>(3) 正倉院宝物にもみられるような、装飾板を別材に留めるための小鋸の存在を見出した。これにより、堂内荘厳を復元するための具体的な材料を提示することができた。</p> <p>(4) 法隆寺天蓋並びに正倉院宝物との比較を試み、文様の全体像の復元のための足掛かりを得た（右、文様比較図参照）。</p> <p>(5) これまでの調査研究をまとめた報告書を年度末に刊行した。</p>		
	 <p>【文様比較図】 正倉院葛形裁文金堂帳金具(上)と 川原寺裏山遺跡出土品(下)</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業 3年計画の3年目 調査点数：約 150 点 打合せ回数：1 回 報告書刊行：1 冊</p>		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業 3年計画の3年目にあたる 29年度は、これまでの調査研究内容を総括するために、既調査資料の再整理と類例資料との比較研究に力を置き、年度末に刊行する報告書にその成果を反映させた。</p> <p>蝶番金具や小鋸の存在を見出したことで、川原寺裏山遺跡出土品がもと用いられた寺院における堂内荘厳の復元研究に大いに寄与することができた。しかしながら、同遺跡出土のすべての金属製品について文様復元や原体復元がおこなえたわけではなく、今後課題をのこすこととなった。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。</p> <p>本研究課題の推進により、川原寺裏山遺跡出土品がもと用いられた寺院の全容解明にむけての現時点で出しえる資料が出そろった。しかしながら、川原寺裏山遺跡自体が未だ部分的な調査にとどまっているため、全容解明にむけてはさらなる調査研究の進展がまたれる。もちろん、発掘調査は軽々に行えるものではないため、まずは比較資料の搜索を東アジア諸地域にひろげることが肝要である。かかる問題意識を保持しつつ、今後の研究へとつなげていきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 撰閣家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究(科学研究費助成事業) (④)-①-1)		
【事業概要】	関係史料群がほとんど散逸することなく伝わる近衛家伝来史料のうち、古文書や古記録、典籍、書跡、絵画を中心に画像データによる公開を目的とする。画像データ作成のための史料調査、データ作成を行うことから、個別研究も進める。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】	<p>(1)史料リストデータ作成と整備(6月6日ほか) 画像データで公開する史料を選別するために、まず、作業の基本となる目録『陽明文庫文書分類目録 書画編』のデータを作成した。</p> <p>(2)画像データ作成のための史料調査(7月3・4日、8月26日、11月22日) 画像データ(画像用キャプションなど)を作成するために、その対象史料について実見調査を実施した。これまで公開されていない手鑑を中心に、近衛家の手本類、近衛家熙による模本も対象とした。</p> <p>(3)画像撮影のためのデータ作成 画像に入れるためのキャプション・データ作成を行った。手鑑については、できるだけ一葉ずつキャプションを入れるため、その史料がどのような内容であるのかを調査・検討しながらデータ作成を行った。それらのデータを東京大学史料編纂所教授・尾上陽介氏に提供し、尾上氏が史料撮影を実施した。</p> <p>(4)展示における成果の公開 本研究で対象となっている近衛信尹の書について、研究成果も含めて特集「近衛信尹と三藐院流の書—近世初期の名筆—」(東京国立博物館本館1室、8月29日～10月9日)として展示を行った。また、ギャラリートーク「江戸初期の三筆 近衛信尹の書」を実施して研究成果を口頭発表した(8月29日)。</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業3年計画の1年目</p> <p>(1)史料リストのデータ作成数 1,964件 7,052点</p> <p>(2)史料調査 調査史料数:30件、調査画像数:479点</p> <p>(3)画像撮影のためのデータ作成 196件 941点</p> <p>(4)展示における成果の公開 展示1回、口頭発表1回</p>		



画像データ作成のための撮影

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、まず、基礎資料となる目録の整備を行った。近衛家伝来史料は膨大な量が伝わっているため、対象とする目録の整備だけでも意義のあることといえる。また、画像を撮影して公開するための準備作業においては画像撮影の際のキャプションの元データを作るために、史料を実見する調査を定期的に行なった。未公開史料も数多く対象としているため、必要性も高く、実見調査に基づいた画像撮影は正確性も高いものといえる。29年度の成果をすばやく展示やギャラリートークで公開したことも、29年度の目標を大幅に達成できていると考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。本研究では、最終年度までにより多くの近衛家伝来史料を画像にて公開することを目標としているが、29年度中に基礎となる目録の整備を行なったことは大きな成果といえる。また、撮影のための実見調査も着実に進めることができ、撮影にはその成果を反映することができた。さらに展示などで成果の公開もできたことは初年度である29年度の目標を十分に達成できたといえる。30年度には、さらなる実見調査を進めて、撮影のためのデータを整える作業をできるだけ多く実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 古代西アジアにおける宗教と福祉の相互関係をめぐる総合的実証研究（科学研究費助成事業）((4)-①-1)		
【事業概要】 現代でこそ福祉は国家と社会の政策課題となったが、ごく最近まで、福祉は宗教と切り離せない関係にあった。歴史に現れる福祉活動の多くは、西欧における病院やホスピスであれ、日本における悲田院であれ、宗教思想によって基礎づけられていた。本事業の全体的な目的は、そうした事実をふまえ、まずは文明発祥の地と言われる古代西アジア地域における宗教と福祉の相互関係を資料に基づいて解明することである。本プロジェクトはその一部であり、テーマに関連する考古資料の収集と検討を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室研究員 小野塚拓造
【主な成果】 29年度は海外調査と国内調査を実施し、イスラエル考古局の研究者や国内の研究者と情報交換を行った。古代の障がい者に関する考古学的痕跡など、今度の研究を進めるための視座を得る貴重な機会となった。 (1) 関連資料の収集 本テーマに関連する先行研究を把握するために、必要とする書籍や論文の収集に努めた。今年度は、収集した多数の著書を整理分類し、次年度の調査研究に活用する準備期間とした。 (2) 研究集会 本プロジェクトのメンバーが中心となり研究集会を開催した。プロジェクトメンバーの調査成果や研究の進捗状況を共有し、次年度の方角性を検討した。メンバーの経験値から様々な研究成果の共有がなされたことで本テーマの十分な結果を得る準備が整った。 引き続き資料収集と調査研究を計画的に実行し、研究の成果を当館の展示活動において公表することで、研究が十分になされていない分野の研究がより一層深化させて行きたい。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の1年目 (1) 資料収集 35件 (2) 研究集会 1件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、先行研究の収集とデータ収集に尽力するとともに、国内外の研究者との情報交換を行った。これらを通じて、本テーマに関わる土偶や出土人骨など、具体的な事例と検討課題を見いだせたことが特筆される。国内外調査をはじめ、計画通りに資料収集を実施するなど、本事業は順調に進展していると評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。29年度は調査研究を推進する上で重要な知見が得られたため、30年度以降も計画的に調査成果の検討を続けるとともに、新たなデータ収集に努める。これらの調査研究によって、研究が十分になされていない分野のより一層の深化を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 平安時代における「国風」的文化現象についての学際的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	本研究は、現在、混沌をきわめるに至っている「国風文化」の理解をめぐって、隣接諸分野の研究者が集まり、この問題に結着をつけようとするものであり、研究分担者として美術史分野を担当している。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員 皿井舞
【主な成果】	<p>科学研究費助成事業3年計画のうち1年目の29年度は、3か月に1回ほどのペースで研究分担者等のメンバーが研究発表をおこない、平安時代における「国風」「日本風」とはいったいいかなる現象であったのかについて、各分野での研究状況と問題点を共有することになっている。</p> <p>29年度は、渡辺秀夫「国文学からみた「国風」の捉え方」(4月17日)、皿井舞「日本彫刻史における「国風」について」(8月19日)、前田禎彦「公家法の形成と構造—古代法の変容—」(12月16日)、滝川公司・李宇玲(30年2月11日)を実施した。</p>		
			
	研究会の様子(8月19日)		
【備考】	<p>科学研究費助成事業3年計画の1年目 研究会：4回 渡辺秀夫「国文学からみた「国風」の捉え方」(4月17日) 皿井舞「日本彫刻史における「国風」について」(8月19日) 前田禎彦「公家法の形成と構造—古代法の変容—」(12月16日) 滝川公司・李宇玲(30年2月11日)</p>		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、日本史(法・経済・政治史・対外関係史)、美術史、国文学の研究者がそれぞれの分野での「国風」「日本風」についての考察をおこない、共有しながら問題点をあらいだす。今年度は、こうした認識共有のプラットフォームをつくることを目指す。またこうした日本の状況を相対化するために、朝鮮史などの研究者も参加しながら議論を深めている。計画通りにすすめており、B判定とした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	最終年度に公開のシンポジウムをおこなうこととしており、来年度からその準備にはいる。次年度に向けての改善計画としては、歴史学では中国史、美術史では絵画史、工芸史を専門にする研究者に声をかけて、より緻密に議論が深められるよう、工夫をする必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 真言密教寺院の資料調査に基づく分野横断的総合研究—新たな仏教思想史の枠組みを求めて(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	真言密教拠点寺院における史料調査を基盤にした着実な実証的研究を踏まえ、諸分野の研究者による総合的研究を進め、最終的には新たな仏教思想史研究の枠組の構築を目指そうとするものである		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員 皿井舞
【主な成果】	科学研究事業4年計画のうち2年目の29年度も、各研究者がそれぞれ真言密教寺院史料の調査を行いながら、思想史・文学・建築史・美術史の分野で密教法会に関する調査・研究を進め、研究会にて研究発表をおこない、科研テーマにもとづく議論を深めた。8月8日に開催された研究会にて、「仁和寺阿弥陀三尊像と宇多天皇」というタイトルの研究発表をおこなった。		
【備考】	科学研究費助成事業4年計画の2年目 研究会：「仁和寺阿弥陀三尊像と宇多天皇」(8月8日)		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である29年度は、ある図像の成立について天台宗と真言宗の視点から考察することのできる仁和寺阿弥陀三尊像をとりあげて、研究を進めた。8月8日に開催された研究会で報告をおこない、そこでメンバーから出された意見や知見は、当館の特別展「仁和寺と御室派のみほとけ」展の図録各論に反映させた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	真言密教寺院史料の具体的な調査を行いながら、実証的に仏教思想史の枠組みをみすえた研究をすることが要求されているが、密教寺院における聖教調査が手薄であり、今後、研究代表者ととも聖教の実地調査をおこなう必要がある。30年度はあるまとまった寺院史料をとりあげ、集中的に研究ができるような体制をつくることにし、そのうえで美術作品と寺院史料とを結びつけた研究を進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 中国典籍日本古写本の研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 [基盤研究A 研究代表者：京都大学名誉教授 高田時雄] 中国典籍の日本古写本について、所在情報を含めたその全貌を明らかにすべく調査を進め、中国文献学の立場から基礎的研究を行うとともに、日本古写本についてのデータベースを構築する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 (兼情報資料室長) 田良島哲
【主な成果】 (1) 8月9日～10日 京都大学人文科学研究所で研究の運営についての打ち合わせ会議に参加した。 (2) 12月3日 上海・復旦大学で開催された研究会「日本古写本と中国典籍」に参加し、「古筆手鑑に見る中国古鈔本」と題して研究報告を行った。 (3) 古筆手鑑類掲載の漢籍について、現状で確認できる限りの断簡を抽出し、データベース用のデータを作成した。 (4) 30年1月30日 当館において、研究代表者、研究分担者とともに関係する漢籍類の調査を行った。 (5) 研究プロジェクトで発行しているニュースレター第4号の記事として田良島哲「古筆切としての漢籍古鈔本の特徴」を執筆、掲載した。			
【備考】 科学研究費助成事業5年計画の5年目			



上海・復旦大学での研究会


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の最終年度である29年度は、調査事例の充実を図るとともに、その結果をデータとして反映することに努めた。その具体化として、当館所蔵の資料の調査を企画するとともに、古筆切などの断片的な資料を網羅的に収集することができたので、年度当初想定した成果は実現したものと判断する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで、館蔵品として調査や情報の把握が十分とは言えなかった、漢籍の写本類について、多くの専門家による調査を実施し、その学術的価値を認識するとともに、ニュースレターや研究代表者、分担者の論文等により、新たな情報を公表することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 日本陶磁における銀彩の美術史的意義について (鹿島美術財団) ((4)-①-1))		
【事業概要】	仁清及び京焼の代表的作品を収蔵する東京、京都、金沢、奈良、福岡の各美術館、博物館を対象として調査を行い、適宜、陶芸作家や修復師といった作陶の専門家に意見を仰ぎながら、日本陶磁における銀彩の技法とその意義に関する考察を進める。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 三笠景子
【主な成果】	<p>8月31日 大和文華館 仁清作品、中国陶磁 (北宋定窯金彩作品) 調査</p> <p>11月10日 東京藝術大学豊福誠教授、北野珠子准教授より、制作技法に関するご教示 (中国陶磁、日本陶磁 計7点 東京国立博物館所蔵品について)</p> <p>11月15日 佐賀県立九州陶磁文化館、有田市歴史資料館 日本陶磁 (伊万里金銀彩作品) 調査</p> <p>11月24日 館蔵品 G-5044 「瑠璃地金銀彩山水図徳利」の蛍光エックス線分析調査 (於 東京国立博物館)</p> <p>12月6日 出光美術館 仁清作品調査</p> <p>30年1月17日 MOA美術館 仁清作品調査</p> <p>30年2月11日 沖縄県立埋蔵文化財センター 中国陶磁 (清朝)、日本陶磁 (伊万里金銀彩) 調査</p> <p>30年3月2日 九州国立博物館 日本陶磁 (仁清、伊万里銀彩) 調査</p> <p>30年3月16日 石川県立美術館 日本陶磁 (仁清、永楽和全作品) 調査</p>		
			
	「瑠璃地金銀彩山水図徳利」の蛍光エックス線分析風景		
【備考】	館外調査7件 館内調査2件		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仁清、及び江戸17世紀の京焼、伊万里焼の代表的な作品群について、金銀彩というこれまでに無かった視点をもって調査を行った結果、同時期に生産された陶磁器の一装飾法ながら、作品ごと、描かれた文様ごとに異なる賦彩技法を使い分けていることが判明した。また、同時期の動向でありながら、京都と九州では金銀彩の付された製品の生産状況も異なる。これらは日本陶磁の特色を示す一例であり、引き続き類品の調査研究を続け、30年度の成果へつなげたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。29年度は主に17世紀に焦点を絞って、京都、九州の主な陶磁作品の調査にあたったが、上記の成果を受けて、古代より認められる金銀装飾の基本的特徴、及び17世紀以降も京焼に引き続き認められる銀彩について調査を続け、30年度の考察へつなげたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 上杉家の伝来能楽面の学際的調査研究（野上記念法政大学能楽研究所）((4)-①-1))		
【事業概要】 戦国大名時代からの伝統を有する上杉家に伝来した能狂言面は、戦後その一部が当館の所蔵になった以外、所在不明である。その所在調査及び上杉家の能道具の解明を目的として、能狂言面のほか、面袋、面箆、文献史料の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長（兼国際交流室長） 浅見龍介
【主な成果】 (1)当館所蔵面の調査 当館所蔵上杉家伝来能狂言面及びそれらに付属する面袋の調査を行った。この調査の成果が本研究の基礎となる。 (2)上杉家伝来能面の全体像について 昭和4年（1929）に撮影された上杉家の能道具の古写真や、上杉家文書、当館館史資料を調査し、当館所蔵の上杉家伝来能狂言面との照合を行った。これにより、すべてではないが、散逸したいくつかの面の種類等が判明した。 (3)散逸した上杉家伝来面の所在に関する研究 上記の調査から佐野美術館所蔵の能面の中に上杉家伝来能狂言面があることが分かり、また、上杉家の面箆も同館に所蔵されていることが分かった。また、古写真の調査から、上杉家伝来面の可能性のある面を見出した。			
【備考】 29年度調査実績 7回、52面及び文書39件 本件研究の成果は、30年3月29日に法政大学で行われた公開報告会にて発表した。また、より広く成果発信するために30年度に特集として展示に反映させることが決定している。これは上杉家伝来の能狂言面と装束をまとめた形で展示する、初めての機会である。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで上杉家伝来能面の研究はほぼされておらず、そこに焦点を当てたという意味で独創性があるといえる。散逸してしまった大名家コレクションに迫る糸口を見出すことができ、一部の面については上杉家旧蔵品であることをつきとめた。これは大名家の能楽の実態という点からも、数の少ない金剛流の能道具の実像という点からも重要な成果といえる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。30年度以降は、この成果を踏まえつつ、上杉家伝来能面の全体像の解明に取り組んでいきたい。また、他の大名家コレクションにも焦点を当て、研究を進めていく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】	館蔵品を中心に京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究を実施し、その成果を当館における展示、講演、論文などの博物館の事業へ還元する。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川禎一
【主な成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国宝展の展示作品のうち京都市左京区上高野出土の国宝「金銅小野毛人墓誌」についてその出土地と出土の歴史的経緯を調査した。特に江戸時代に墓誌を一度墓に戻す際に製作された模造の墓誌（木製金箔）を地元の宝幢寺へ調査に赴いて、その製作・伝来の歴史経緯や墓誌本体との差異などを明らかにした。考古遺物のレプリカの嚆矢となる作品として今後研究報告を準備している。 ・ 京都府向日市の物集女恵美須山古墳出土の「変形方格規矩鏡」についてその出土地を踏査して出土状況の確認を行った。また歴史経緯や同地域から出土の土器類の追跡調査を行い、その成果を学叢 40 号（30 年 5 月刊行予定）に掲載する予定である。 ・ 新たに寄贈された伝宇治市木幡出土の「越州窯製青磁碗破片」について調査を行い、藤原氏累代墓地との関連から平安時代半ばに舶載された高級輸入陶磁器の可能性を検証した。その成果は学叢 40 号で報告の予定である。 ・ 京都市左京区花背別所町の花背別所経塚についてその出土地を京都市教育委員会職員（埋文担当者）とともに踏査を行い平安時代当時の石積み の所在確認や紀年のある「石柱（経塚標柱石）」の調査を行った。この花背経塚については今後の埋蔵文化財調査に参加協力する予定である。 		
【備考】	当館の性質上、収蔵の対象は京都周辺の考古遺物が中心となるが、日本全国の考古遺物（北は東北から西は北部九州まで）にまで徐々に対象を拡大していく必要がある。		



花背別所経塚の標柱石（旧福田寺跡・仁平三年 西暦 1153 年）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>京都における考古学史の一環である国宝「小野毛人墓誌」の複製品に関して新たな発見があったことが評価される。</p> <p>出土地情報があいまいであった恵美須山古墳出土鏡の出土位置が推定されるようになった。</p> <p>伝宇治市木幡出土の青磁破片に関する情報が整理できた。</p> <p>花背別所経塚に関して経塚の位置確認が出来、標柱石に関しても新たな知見が得られた。</p> <p>考古展示場の撤収展示が頻繁であり、そのために京都周辺出土遺物の研究がその量の面で充分とは言い難かったが、その制約の中でも新発見や成果報告に繋げるなど、質的な面は担保できた。</p> <p>来年度はより計画的に遺物の調査研究を推進し、博物館に備えられたX線CTなどの新たな科学機器を用いて内部構造調査や成分分析を行い研究に活用する予定である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に基づき、京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究として、館蔵品を中心とする京都周辺の考古遺物の調査研究を行った。</p> <p>30 年度以降、量的な面を確保するため、考古展示場の作業と調査研究の時間配分を十分に考え、作品調査の予定をより計画的に立てることで、その研究および報告を着実に進行。また、調査においては博物館の科学機器を積極的に活用し、新たな側面からの研究も行う予定である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>漢文を訓読するために施された、「訓点」とよばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、当時の日本人がどのように本文を訓読していたか、あるいは日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を行うことにより、得ることの出来た成果を展示や講演、あるいは刊行など、博物館における事業へと還元する。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 羽田聡
【主な成果】	<p>(1)典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、29年度よりアソシエイトフェローとして採用した上杉智英（仏教学）のほか、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、計10回の調査を実施した。</p> <p>(2)調査作品は、「涅槃経疏」（館藏品）や重要文化財「大乘掌珍論卷上」（寄託品）ほか、国宝「伝藤原行成筆 仮名消息」（個人蔵）など18件に及び、今後の研究にも資するよう全巻撮影を行った。</p> <p>(3)国宝「伝藤原行成筆 仮名消息」について、公開機会のほとんどない作品であるが、本事業の趣旨を所蔵者に伝えたところ、29年度に当館で実施した展覧会への出陳、さらには詳細な調査及び写真撮影を許可されたことは特記すべき事項である。</p> <p>(4)調査対象作品のうち、国宝「伝藤原行成筆 仮名消息」は、所蔵者の快諾を得て、紙背の漢籍を中心とした史料紹介を当館紀要に掲載することが決定している。また、27年度の研究成果をうけ、当館で購入した国宝「漢書楊雄伝第五十七」は、その内容を反映させた解題付きの書籍を30年度、勉誠出版より刊行する予定である。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 10回 ・調査件数 18件 ・撮影コマ数 約120カット ・成果の公開（展示） 1回（特別展覧会「国宝」展、10月3日～11月26日） ・成果の公開（史料紹介） 1件 上杉智英「鳩居堂蔵『伝藤原行成筆仮名消息』紙背『三宝感応要略録』（『学叢』40号、30年5月予定） 		



平成知新館での調査風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業の大きな目的である作品の調査研究及び成果の公開に照らし、備考欄に記載した調査回数や件数、あるいは公開のなどの数値を28年度と比較しても、ほぼ同等の成果をあげることが出来ているため、所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。良質な古典籍を多数収蔵する当館にあって、それらの調査研究を進め、展覧事業などに成果を反映させるためには、「無理のない継続性」は必要不可欠である。この点を勘案すると、29年度計画における実績値は28年度とほぼ同等であるため、順調に進捗し所期の目標は達成していると判断した。また、前中期計画にあたる27年度に課題としてあげた「後進の育成」について、アソシエイトフェローを採用することが出来た点も加味している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 陶磁に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】	主に日本国内に伝わる陶磁器（出土品も含）について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。		
【担当課】	学芸部	【プロジェクト責者】	工芸室研究員 降矢哲男
【主な成果】	<p>(1) 調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・30年2月15日～16日に福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 ・28年度に引き続き、近畿地方の江戸時代から続く旧家の所蔵品や金剛寺所蔵の陶磁器の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。（詳細は処理番号1411B4及び1411B5参照）。 ・個人コレクションの陶磁器の調査を行い、写真撮影等を行った。 <p>(2) 成果内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧家の所蔵品や金剛寺所蔵の陶磁器などの調査を行い、各所蔵品の全体的な様相を把握することができた。そこから、陶磁器流通の状況やコレクション形成の過程について、多くの清朝陶磁が受容されているなど、新たな知見を得ることができた。 ・そして、個人コレクションの調査により、作品の寄贈や今後、作品の寄託を受ける予定もあり、館蔵品で網羅されていない時期や産地の作品の展示が可能となり、平常展の内容をより充実したものとすることができると思われる。 ・また、研究内容の状況を論文等にまとめることにより、日々の研究成果を一般に公表した。 		
【備考】	<p>(1) 調査回数 20回</p> <p>(2) 主な研究発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「鎌倉室町の喫茶文化」土岐市美濃陶磁歴史館 11月11日 <p>(3) 主な論文執筆</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「黒いやきものの登場と流行」『天然黒ぐるー鉄と炭素のものがたり』12月 ・「中国への憧れと日本独自の美意識」『淡交』885号 9月 		



愛宕坂茶道美術館調査



個人コレクション調査

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトの主眼は、基礎データを蓄積し、研究を進めることにある。28年度に引き続き、複数の事例の調査を行うことができた。こうした基礎データの蓄積を継続的に行えたことは大きな成果である。30年度は、これまでのデータの蓄積を活かした成果発表をより積極的に行っていきたい。また、調査の過程で展示を拡充できるだけの寄託品を受け入れられることとなったことは、大きな成果であり、このことにより、大規模な展覧会や講演会などの博物館事業の内容を充実させていくことに繋がるのが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。今中期計画の2年目として、着実に調査を進め、多くの基礎データの蓄積を行い、研究発表や展示を通じて、研究成果を着実に還元してきている。また、基礎データの収集を通じて、館蔵品や寄託品の充実を図ることができそうである。</p> <p>30年度以降も、基礎データの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを照らし合わせながら研究を行い、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究																						
プロジェクト名称	エ 近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究 河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))																						
【事業概要】	京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査行ってきた。28年度からは、4年にわたって科学研究費補助金による助成を受け「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」というテーマのもと、大阪・河内地域に存在する社寺の文化財を中心に調査を行う。																						
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 浅湊毅																				
【主な成果】	<p>(1)河内地域の社寺調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 29年度は4年計画の2年目にあたり、河内長野市の所在の天野山金剛寺において、塔頭の摩尼院を中心に、28年度に続き調査を行った。また、同市観心寺において第1回目の悉皆調査、八尾市教興寺において彫刻作品の調査をおこなった。 <table border="1"> <tr> <td>金剛寺摩尼院本調査</td> <td>6月19日～23日</td> <td>調査作品数</td> <td>220件</td> </tr> <tr> <td>金剛寺補足調査</td> <td>10月10日～13日</td> <td>調査作品数</td> <td>26件</td> </tr> <tr> <td>観心寺悉皆調査</td> <td>30年2月19日～23日</td> <td>調査作品数</td> <td>175件</td> </tr> <tr> <td>教興寺彫刻調査</td> <td>30年2月26日～27日</td> <td>調査作品数</td> <td>10件</td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td>合計</td> <td>431件</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> 本調査の成果は、科研の最終年度である31年度末に発行予定の報告書で公表する予定である。 <p>(2)過去の調査成果の公表と展覧会への反映等</p> <ul style="list-style-type: none"> 28年度行った金剛寺における社寺調査の成果の一部を、特別展覧会『国宝』(10月2日～11月26日)において展示し、その会場解説及び図録解説等で一般に向け広く公開した。 過去に行った京都市内の社寺調査のうち、建仁寺塔頭及び永観堂禅林寺に関して、報告書刊行に向け、これまでに作成した調書の分類・整理を継続して行った。このうち建仁寺塔頭両足院の報告書を29年度末に刊行した。 			金剛寺摩尼院本調査	6月19日～23日	調査作品数	220件	金剛寺補足調査	10月10日～13日	調査作品数	26件	観心寺悉皆調査	30年2月19日～23日	調査作品数	175件	教興寺彫刻調査	30年2月26日～27日	調査作品数	10件			合計	431件
金剛寺摩尼院本調査	6月19日～23日	調査作品数	220件																				
金剛寺補足調査	10月10日～13日	調査作品数	26件																				
観心寺悉皆調査	30年2月19日～23日	調査作品数	175件																				
教興寺彫刻調査	30年2月26日～27日	調査作品数	10件																				
		合計	431件																				
【備考】	<p>科学研究費助成事業4年計画の2年目</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査回数4回 本調査に関しては最終年度に調査報告書を刊行する予定である。 																						



摩尼院での調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、課題と対応等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である本年度は、河内長野市の金剛寺において塔頭摩尼院の悉皆調査と本坊の補足調査を行った。それぞれの調査で、金剛寺が所蔵する文化財については一部を除きほぼ調査を行うことができ、報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影を終えることができた。また、河内長野市の観心寺において第1回目の悉皆調査を、宝物館の収蔵作品を中心に行い、報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影をすることができた。あわせて、これらの情報をデジタルデータとして入力し、資料の整理をおこなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、課題と対応等
B	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、河内地域の仏教文化と歴史に関して科学研究費助成事業に申請し、それに基づく調査研究を実施した。本事業は4年計画であり、初年度から3年度にかけては各年度毎に1ヶ所以上の寺院を当該地域から選択し(28年度は金剛寺、29年度は観心寺)、全研究員参加による悉皆調査を行う予定である。29年度に関しては当初の予定どおり、金剛寺の補足調査と、観心寺宝物館の悉皆調査を行い、それに加えて教興寺の彫刻調査を行い、総計431件のにのぼる多数の文化財を調査し資料を収集できた。30年度についても引き続き観心寺・教興寺の悉皆調査を行う予定である。</p> <p>過去に行った調査寺院の補足調査に関しては、河内地域の調査に重点を置いていたため十分には行うことができなかったものの、調書の整理等に関しては継続して行い、建仁寺塔頭両足院の報告書を刊行することができた。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	オ 幕末近代の商家が伝えた文化財の総合調査(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】	大型の寄贈案件である「貝塚廣海惣太郎家コレクション」について、大阪府貝塚市の旧家の五つの土蔵が伝えた大量の文化財の調査を、科学研究費助成事業と併せて実施する。所蔵者の意志のもと寄贈先を検討し、当館への寄贈分は、搬入後に燻蒸した上で本格清掃を施し、受贈手続きを経て収蔵品として整備する。29年度中に寄贈顕彰の展覧会を開催する。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 永島明子
【主な成果】	<p>廣海家は江戸時代後期に米穀や肥料の間屋として身を起し、幕末に廻船問屋として活躍した後、仲買、株式投資、銀行経営などに転じてその資本により地域の近代産業の発展に寄与した商家である。当館は24年度に調査を開始し、作業効率の向上をめざして27年度からは採択された科学研究費助成事業と併せて事業に取り組み、28年度までに書画・工芸・考古・歴史資料の収蔵品884件と教育事業や茶会等のイベントで用いる備品279件を受贈してきた。</p> <p>29年度は金工51件、陶磁97件、漆工・木竹工7件、染織6件の計161件の収蔵品と、1件の備品を受贈した。また図録用撮影を進め、117件を「貝塚廣海家コレクション受贈記念特別企画 豪商の蔵—美しい暮らしの遺産—」と題した展覧会として一般公開し図録に収めた。併せてコレクションの概要を「廣海家の蔵が伝えたもの」に、調査報告を「土蔵から展示室へ」としてまとめ、受贈の収蔵品全1045件の一覧とともに図録に掲載した。さらに一般観覧者向け講座「土蔵は大きなタイムカプセル!—旧廻船問屋、貝塚廣海家からの大型寄贈を記念して—」、「商家に伝わったやきもの」、「御所人形の展開」や、受贈の備品を用いた呈茶会も開いた。足掛け6年に及んだ調査の後、展覧会の閉幕を見届けるように寄贈者が亡くなられたが、ご生前に展覧会の成功を報告し、感謝を伝えることができた。</p>		
			
	展覧会ポスター	図録	展覧会場風景
			
			廣海家の屋敷(調査先)
【備考】	当館の収集対象でない文化財について、堺市博物館など、他館への寄贈をとりまとめることもできた。特別企画図録『貝塚廣海家コレクション受贈記念特別企画 豪商の蔵—美しい暮らしの遺産—』30年2月3日		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である29年度は、当初の計画どおり調査をすすめ、162件について所定の手順を踏んで寄贈を受けた。これまでに合計1045件の収蔵品と280件の備品が廣海家から寄贈されたことになり、幕末から戦前期の関西の商家が用いた品々をその背景ごと概観できるコレクションを形成できた。これをもとに展覧会を開催し、図録をまとめ、各分野の担当研究員による講座を開き、さらには備品として寄贈された茶道具で呈茶会を開催し、広く社会へ調査の成果を還元することができた。その大きな反響はインターネット上でも確認できる。多くの文化財が、それを用いた環境から切り離されて博物館施設に収蔵されるが、本件は、廣海家の暮らしの記憶を纏ったまま、ひとまとまりで収蔵された点が特異である。調査には多くの学生も参加しており、調査の手法や姿勢を伝授することもできた。また図録に調査報告を掲載したことで、今後、類似の案件に遭遇する文化財関係者に、ひとつのモデルケースを提示できたと考える。展覧会の開催を目標としていたが、国宝展などで多忙を極めたなか図録の作成も達成したため、所期の目標を上回る成果が得られたと判断する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 <ul style="list-style-type: none"> 最終的に1045件の収蔵品と280件の備品の寄贈を受けた。 科学研究費助成事業の最終年度にあたって、目標の展覧会の開催を実現したうえ、図録も作成し、一般観覧者への普及教育のみならず、文化財行政の関係者に対しても、今後いっそうの消滅が予想される旧家の土蔵の調査について、ひとつのモデルケースを提示することができた。 寄贈点数があまりに多かったため、今回の展覧会では1/9程度を披露したにすぎない。今後は、30年度にすでに計画されている展示を含め、当館の平常展での活用や他施設への貸与等も行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 日本の宮廷装束・調度に関する基礎的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】一般には目に触れる機会がほとんどない日本の伝統的な宮廷装束及び調度について所蔵調査を行い、基礎的な情報を記載した調書を作成する作業により、宮廷の物質文化の実像に可能な限り迫る。その成果を報告書や展示として紹介し、日本民族が培った美意識を広く伝える。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 山川暁
【主な成果】 学術研究助成基金助成金事業の3年計画の3年目である29年度は、28年度に引き続き、当館が所蔵する歴史分類作品群のうち、宮廷装束及び調度の悉皆調査を継続して行うとともに、それらがどのように館蔵品として受け入れられたかについて、当館所蔵の行政文書によって確認した。悉皆調査を行う中で、宮廷において日常的に用いられた調度や装束は、束帯装束に用いる平緒のように特殊なもののをのぞけば、江戸時代を遡る違例が極めて少ないことが改めて浮き彫りとなった。また、江戸時代に京都御所で用いられていた調度や装束のほぼすべてが、宮内庁、東京国立博物館、当館の三所に分蔵されていることが明確になった。 あわせて、現存する宮廷関係作品のデジタル・データベースの作成に向け、他機関所属宮廷関係作品の文字情報のデジタル化を行った。これらの調査から、本年をもって助成研究はひと区切りとなるため、これまでの研究成果を盛り込み、平成知新館において特集展示「御所文化を受け継ぐ 近世・近代の有職研究」(12月19日～30年1月28日)を開催し、鑑賞ガイドを作成するとともに、関連講座を開講した。			
			
調査風景		展示風景	
【備考】科学研究費助成事業の3年計画の3年目 ・京都国立博物館が所蔵する歴史分野作品の調査(調書作成・簡易デジタル画像の撮影) 調書 120件 画像 591カット ・当館所蔵作品の保存公開用画像 10件(81カット) ・他機関所蔵作品のリスト:1機関 45件 ・特別展示 御所文化を受け継ぐ 近世・近代の有職研究 展示作品:41件 鑑賞ガイド「御所文化を受け継ぐ」:25000部 関連土曜講座:2回 「京都御所旧蔵品と国立博物館」(30年1月30日)(山川暁) 「近代の有職故実—江戸時代から伝えられた雅び—」(30年1月20日)(田中潤氏)			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、作品調査を下半期に集中して行えたため、これまでの遅れを取り戻すことができた。これらの成果を簡易データベースにまとめた。この助成研究が実施される間、皇室をめぐる報道が増したため、宮廷への関心が高まる中、時宜を得た研究課題となった。研究成果を展示に結びつけ公開として、特集展示および講座を開講することにより、調査内容を広く社会に還元することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都文化の根幹を成す宮廷に関わる研究であり、中期計画における趣旨に即した調査研究を実施することができた。館蔵の宮廷調度・装束については、精粗はあるもののすべての調査を完了した。現在把握できた作品の文字情報による簡易データベースを作成した。今後は、この成果を活用し、毎年年初の開催を恒例としている皇室関係の展示を構成していく。データベースは今後も拡充を続け、伝世する宮廷装束、調度の集積を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1)		
【事業概要】	<p>大正から昭和にかけて数多く中国書画が日本に将来された背景を、「京都学派」の漢学者にして書画鑑定に秀でた長尾雨山(1864～1942)の業績を再検証することにより明らかにする。膨大な書簡や詩文稿、書画作品など雨山に関する一次資料の整理と調査を核とし、断片的な紹介にとどまっていた雨山の業績と思想を総合的に理解するための基礎的研究とする。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 呉孟晋
【主な成果】	<p>29年度は3ヵ年計画のうちの最終年度にあたる。27年度および28年度から継続して、29年度では長尾雨山関係資料の目録刊行に向けた整理作業に注力した。その結果、詩文稿については雨山が明治36年(1903)から大正3年(1914)の約11年にわたる上海居住期をのぞく前後の期間、すなわち若年期と晩年期のものが充実していることがわかった。内容としては、中国書画鑑定にかかわるもののほかに、自作の詩文、著名人士の略伝なども数多く含まれている。高松藩の儒学者の家系にあることを自覚して、儒学を基盤とする漢学の修養が終生変わらず雨山の詩文に貫かれていることが確認できた(図版)。</p> <p>(1)目録の精査：これまでの目録の改訂をすすめる一方で、上述のように草稿の執筆時期についても検討をおこなった。この作業では、これまでに引き続き、西上実・京都国立博物館名誉館員の協力を得た。</p> <p>(2)報告書の刊行：(1)での作業をもとにして、刊行に必要な項目の加除をおこなった。あわせて、重要と判断した資料の写真撮影をすすめた。報告書は「長尾雨山関係資料目録」として30年3月に刊行した(全174頁)。</p> <p>(3)研究成果の発表：発表の場を3回得て、それぞれ異なる聴衆向けに研究成果を発信することができた。11月に中国・北京で渥美国際交流財団関口グローバル研究会が主催した国際研究集会「第11回SGRAチャイナ・フォーラム」(於北京師範大学)では中国人研究者及び学生向けに、30年1月に立命館大学が主催した「立命館土曜講座」(於立命館大学衣笠キャンパス)では国内の一般市民を対象に漢学者としての長尾雨山の思想を紹介した。3月には、明治美術学会の研究会(於西宮市大谷記念美術館)にて大学や博物館・美術館関係者向けに3年間の研究成果を発表した。</p>		
	 		
	図版：(上)「五経」(箱と冊子) (下)箱蓋裏墨書		
【備考】	科学研究費助成事業の3年計画の3年目		

年度計画に対する総合的評価

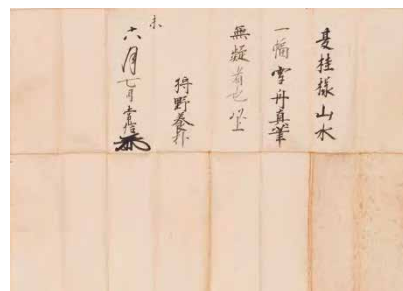
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の最終年度である29年度は、中間年度の成果を引き継ぎ、目録の精査、報告書刊のための準備、研究発表をおこなうことができた。研究の取りまとめと情報発信を主眼とし、期限内に資料の全体像を把握するという所期の目標を達成した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。最終年度での事業である成果公開のための目録刊行をした後、所蔵者と協議して資料の有効活用に向けての方策を探る。調査の成果は、当館の特集展示などとおして広く一般に公開することを計画する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 近世期に作成された、書画の「極書」に関する基礎的研究(科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	書画に付属する極書のうち、近世期に作成されたものを対象として、主に書誌学的観点から形式等の諸データについて分類・整理を行うことで極書を史料として扱うための基礎的研究とする。作品の伝来・伝承等に関する情報抽出にとどまっていた極書そのものを研究対象とし、将来的には鑑定行為全般の文化史的意義の研究へと発展させることを目指す。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】	<p>29年度は4年計画のうちの2年目にあたる。28年度に引き続き、当館に収蔵される作品及び京都近郊に所在する作品を中心に極書の調査を行い、基礎データの収集を行った。</p> <p>(1) 作品及び極書双方の作者・内容について基本的な情報を整理、目録化を進め、30件の作品を目録化することができた。</p> <p>(2) 数値データや文字情報の記録に加え、極書の詳細な写真撮影を進め、相互の比較考察を可能とする画像データの蓄積を行った。</p> <p>(3) 作品研究と同様、極書の研究を行うにあたっては基準となる資料の選定が必要となる。極書制作者が当該作品を実見していたことが別の史料から裏付けられる基準的事例(挿図)を調査し得たことは、今後研究を進めるうえで大きな成果と言える。</p> <p>(4) 極書の形式は、その制作者あるいはその制作者が所属する集団によってかなりばらつきがあるように見受けられる。それぞれの制作者・集団ごとの形式に注目する必要がある一方で、相互の影響関係についても考察すべき課題であるとの見通しが得られた。</p> <p>(5) 30年度の調査候補作品として約40件をリストアップし、効率的な調査研究を進めるための準備を行った。</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の4年計画の2年目</p> <ul style="list-style-type: none"> 目録化した作品：30件 撮影カット数：約150カット 		



狩野常信による添状
(雪舟筆「倣夏珪山水図」の付属資料)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業4年計画の2年目である29年度は、28年度に引き続き調査した作品・極書の諸データについて目録化を進め、その過程で分類・整理に必要な項目についても随時更新を行った。蓄積されたデータはまだ充分ではないが、相互の差異を比較考察するに足る量の史料が集まりつつある。</p> <p>極書の形式には制作者およびその所属する集団(流派)により様々な相違点が見受けられ、特に、極書を数多く残している狩野派および古筆家に特に注目しながら調査を進めることにより、研究上有効な手掛かりが得られるとの見通しが立った。</p> <p>研究上の基準となる史料を調査し得たことは大きな成果であった。30年度以降に極書が付属することが判明している作品を狙い調査を進めていく。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。</p> <p>30年度は、京都近郊での調査に加え、関東・東海・九州地方でも集中的に調査とデータの日録化を進める。調査データの偏向を確認し、必要なデータの収集に努める。</p> <p>31年度は、引き続き必要なデータの収集に努めるとともに、蓄積されたデータの整理と形式の統一、画像の調整等を行う。展示・報告書等を通じて研究成果を公表する。</p> <p>30年度の調査対象作品には極書が付属することがほぼ確実であり、有益なデータが得られるものと期待される。</p> <p>あわせて、史学および古文学書学等での関連研究についても調査を進め、史料の収集とともに研究考察の前提となる情報の把握に努める。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
【事業概要】	ケ a. 特集展示「鳥羽伏見の戦い」に関連する調査研究((4)-①-1)		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川禎一
【主な成果】	<p>鳥羽伏見の戦いは大政奉還後の主導権争いの結果、旧幕府側が京都回復を目指して大坂城から兵を京都に進め、慶応4年(1868)1月3日に京都南郊の鳥羽街道上で入京を阻止しようとする薩摩藩兵との間で戦端が開かれたもので、薩長主体の京都側(官軍)が勝利したことによって徳川の時代は終焉し、近代日本が始ったとされる重要な戦争であった。</p> <p>この「鳥羽伏見の戦い」に関する資料として、京都市の城南宮所蔵品、同市御香宮所蔵品および大阪市の個人所蔵品の調査を行った。城南宮では薩摩藩兵関係の書簡や隊旗・鉢振(写真)、御香宮では鉄製砲弾(丸弾・会津藩所用)、さらには個人所蔵品では鳥羽伏見の戦いの錦絵や瓦版類などである。</p> <p>特に、5月には城南宮において「薩摩藩伏見屋敷総図」の存在が確認されたことは特筆される。薩摩藩伏見屋敷は鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍側に焼き討ちにあった屋敷であるとともに、慶応2年(1866)1月24日に伏見寺田屋で襲われた坂本龍馬と三吉慎蔵を收容し匿った歴史的イベントの舞台となった場所である。その絵図面をはじめに詳細に調査してその歴史的意義を記者発表(城南宮主催)した。</p> <p>これらの調査成果をもとに平成知新館特別展示室において特集展示「大政奉還150年記念 鳥羽伏見の戦い」(7月25日～9月3日)を開催した。歴史史料・錦絵・軍旗・砲弾など約30点を展示して広く観覧者に観ていただいた。</p> <p>8月19日には土曜講座で「鳥羽伏見の戦いの戦場をたどる」として展示担当者が来館者向けの講座を行い展示の理解を補助した</p>		
【備考】	京都市が主催した大政奉還150年記念プロジェクトの一環として開催した。大政奉還そのものを歴史史料から展示することが困難であったため、大政奉還が引き起こした徳川方と薩長討幕方との軋轢の結果である「鳥羽伏見の戦い」を絵画・文書・遺物から展示することとなった。		



京都市城南宮における薩摩藩軍旗(遊撃隊)の調査


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>夏休みの時期の開催に伴い中学・高校生にも理解できるように、平易な解説文とビジュアル重視で展示作品を選定したところ、自由研究のために訪れた中高生の姿も多く見られたのでその点は評価できる。</p> <p>また「鳥羽伏見の戦い」が京都の地元に関する歴史事象であるため、当館での開催が相応しいものであったと考えられる。</p> <p>歴史展示の困難さはあるが、薩摩藩の無名の兵士の故郷への書状は慶応4年(1868)1月5日付で明日の淀城攻を前に書かれたいわゆる「遺書」であり、その内容は時間を越えて普遍性をもつものであったことを紹介できた。</p> <p>鉄製砲弾を2個展示したが、ひとつは会津藩が使用した丸弾(御香宮蔵)、もうひとつは椎実形の砲弾(四斤山砲用・城南宮像)で薩摩藩側の砲弾である。両者を並べることによって旧幕府側と薩摩側の軍装兵器の差異を示すことが出来た。</p> <p>29年年末から30年年始にかけて鳥羽伏見の戦い150年目の様々な行事がある中で、本展示がそのさきがけとなり時機を捉えたことから、雑誌・テレビの取材があり、雑誌記事やテレビ番組の源泉となったことも評価できる。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画におけるに基づき、京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究を実施し、順調に達成した。</p> <p>京都国立博物館収蔵史料のうち有名な重文「坂本龍馬関係資料」については28年度から特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」として京都国立博物館を皮切りに、長崎市歴史文化博物館・江戸東京博物館・静岡市美術館を巡回し、大きな反響と多数の来館者(総数28万人余)を得た。今回の特集展示「大政奉還150年記念 鳥羽伏見の戦い」はそのスピノフ的な位置づけであり、龍馬展の準備がその準備であったとすることができる。</p> <p>美術作品が中心となりがちな博物館展示において「歴史展示」というものの位置づけを示すことができたことは今後の展示のありかたを考えるうえで参考になった。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ケ b. 特集展示「京博すいぞくかん—どんなおさかないのかな?」に関する調査研究 (4)-①-1)		
【事業概要】 本事業は博物館と水族館が協力し、それぞれの視点から互いの研究対象・収蔵品を見直し、展示に還元することで、来館者が未知の分野への関心を深めるきっかけとなることを目指し、当館では特集展示「京博すいぞくかん—どんなおさかないのかな?」を、京都水族館では連携企画イベント「すいぞくかんとはくぶつかん」を実施し、両館で講座、体験イベント等の多様なイベントを行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【主な成果】			
<p>(1) 京都国立博物館では、特集展示「京博すいぞくかん—どんなおさかないのかな?」(7月25日～9月3日)を実施。水生生物に関わる収蔵品を展示し、子ども向けのキャプションと水族館館長による「ひとこと解説」を掲示した。</p> <p>(2) 上記に関連して、土曜講座、水族館館長によるギャラリートーク等を実施した。あわせて期間中はミュージアム・カートに、関連する教材(貝合わせ・鮫皮)を設置し、京博ナビゲーターが対応した。また、展示を楽しむための鑑賞ガイド「トラリんと見てみよう! どんなおさかないのかな?」を発行・配付した。</p> <p>(3) 京都水族館では、連携企画イベント「すいぞくかんとはくぶつかん」(7月1日～9月3日)を実施、水槽の前に美術品と実際の生物を比較できる解説パネルを設置した。</p> <p>(4) 上記連携企画イベント中に、京都水族館主催で、クイズラリー、「絵画コンテスト&フォトモザイクアート」、「描いて撮って! お絵かきワークショップ」、「京都水族館下村実館長×京都国立博物館研究員トークイベント」が行われた。</p> <p>(5) 調査の結果、本事業が両館において従来とは異なる層の来館に繋がったことが分かった。特に博物館では、子ども(小学生以上高校生以下)の来館者数が、前年度の同時期に比べて1.5倍(閉館日の子ども招待イベントを含めると2倍)になるという効果が見られた。</p> <p>(6) これまで不明だった画中の魚種が特定され新知見が得られたほか、水族館・博物館でのみ把握されていた事柄が共有されることで、両者の研究が促進されるという成果もみられた。</p>		 <p style="text-align: center;">両館のチラシ</p>	
【備考】 平成29年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業(2,568,000円)として実施した。			
<p>(1) 特集展示「京博すいぞくかん—どんなおさかないのかな?」: 36日間・40,911人</p> <p>(2) 関連土曜講座: 2回・159人/ギャラリートーク: 5回・41人/貝合わせで遊ぼう!: 2回・113人 トラリんの水族館への出張: 3回/ミュージアム・カート(貝合わせ・鮫皮): 36日間/リーフレット: 7,000部</p> <p>(3) 連携企画イベント「すいぞくかんとはくぶつかん」: 65日間・322,000人</p> <p>(4) クイズラリー: 7,071人/絵画コンテスト&フォトモザイクアート: 3,370人/ワークショップ: 約800人 トークイベント: 1回</p> <p>・新聞取材: 3件(毎日新聞、産経新聞、京都新聞) / 広報掲載: 38件 / 他館調査: 2件</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館で初めて「子ども向け」と銘つけた展示を実施した。他分野の展示施設と連携することで新たな来館者を博物館に招き入れることができた。事業はおおむね好評であったが、来館者の動向を観察した結果、展示・解説文による鑑賞は小学校高学年以上でないとし難いこと、それ以下の年齢の子どもに向けては体験・対話によるイベントが有効であることが実際に確認できたため、今回得られた知見を今後の教育普及活動に反映していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。中期計画の教育普及活動では「展示」を想定していなかったが、今回、水族館との連携の機会を得て、新しい取り組みに挑戦することができた。これまでの活動では、すでに計画された展示を分かりやすく伝えることに注力してきたが、企画段階から初心者を意識したテーマ設定も効果的であることが確認された。このことにより所期の目標を上回る成果を得ることができた。今後、収蔵品を活用した入門的な展示を企画するなどの活動を行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	a. 東アジアにおける繡仏の基礎的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	<p>本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表現した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史及び染織史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的に捉えることを目的とするものである。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 伊藤信二
【主な成果】	<p>本研究は当初、28年度までの4年計画であったが、調査の中でそれまで未調査・未照会である作品が多数存在することが判明したため、調査研究機関を29年度まで1年間延長した。</p> <p>国内に所在する中世～近世期の作品について実見調査を実施した。主な作品は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重要文化財「刺繍阿弥陀三尊図」1幅 (石川・西念寺蔵) ・刺繍種子阿弥陀三尊図 1幅 (大阪・金剛寺蔵) ・刺繍種子阿弥陀四尊図 1幅 (京都・智恩寺蔵) ・刺繍釈迦涅槃図 1幅 (千葉・松翁院蔵) ・刺繍釈迦涅槃図 1幅 (岐阜・盛巖寺蔵) ・刺繍釈迦八相涅槃図 1幅 (京都・天龍寺蔵) ・刺繍種子幡 10流 (滋賀・石道寺蔵) <p>刺繍釈迦涅槃図 1幅 (千葉・松翁院所蔵) は縦が3メートルを超える大型の刺繍涅槃図(江戸時代・17世紀)であり、浮世絵師として著名な菱川師宣とその父吉左衛門が共同制作した作品として、近年注目されている作品である。</p> <p>大型で全体像の写真撮影や調査が困難であったため、大型スキャナーを現地に設置し、高精細の画像を撮影した。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・現地調査 13回 		



重要文化財「刺繍阿弥陀三尊図」(西念寺)



刺繍涅槃図(松翁院) スキャナー撮影

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>調査研究期間を1年延長し、科学研究費助成事業5年計画の5年目となる29年度は、28年度に引き続き日本国内所在の繡仏作品の実見調査を実施するとともに、これまで調査した作品データの整理を実施した。日本中世～近世期の繡仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義と成果は大きい。</p> <p>浮世絵師として著名な菱川師宣とその父吉左衛門が共同制作した作品として、近年注目されている刺繍涅槃図について、大型スキャナーを現地に設置し、高精細の画像を撮影できたことも大きな成果であった。この調査研究によって重要性が認識された結果、30年7月～8月に奈良国立博物館で開催される特別展に出品されることとなった作品も少なくなく、研究代表者は当該展覧会図録において調査をふまえた論考を発表する予定である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。</p> <p>本研究は刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表現した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国や朝鮮半島など、東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式を分析し、繡仏を総合的・体系的に捉えることを目的とするものであり、29年度も28年度に引き続いての実見調査と、最終年度であることを踏まえた整理を実施することができた。</p> <p>いくつかの作品については奈良国立博物館との共同調査を実施し、同館で30年度に予定されている特別展にも資するものとなった。</p> <p>繡仏については、研究代表者が平成17年(2005)刊行した書籍『繡仏』以降も未発掘作品が多く発見されている繡仏研究に寄与するものと考え。特に近世期の繡仏作品はほとんど調査研究の埒外に置かれてきたこともあり、新たな作品の発見や報告を促す契機を作ったといえる。</p> <p>本研究は、今後繡仏作品の大規模展覧会が開催される上で最新の所在情報や成果を提供することに大きく資すると思われる。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b.思溪版大蔵経刊行実態の解明―目録と遺例による実証的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究の目的は、思溪版大蔵経の目録である台北故宫博物院蔵南宋刊本(故宫本)の書誌学的研究、並びに故宫本と本来一具であった中国国家図書館蔵思溪版大蔵経の原本調査により、目録と現存状況の乖離の原因を究明し、思溪版大蔵経刊行の実態を実証的に解明することである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室アソシエイトフェロー 上杉智英
【主な成果】 (1)28年度に閲覧調査を行った京都大学附属図書館蔵『思溪版目録』写本について、29年度は内容を検討し、以下の点を明らかにした。 ・京大本が現在の思溪版研究の基礎資料とされる『大正新脩大蔵経』所収本(大正蔵本)の底本であること。 ・京大本の底本は南宋刊本である故宫本であること。 ・故宫本には後代の補写箇所があるが、京大本・大正蔵本では刊刻・補写箇所の弁別が不能であること。 上記成果を「大正蔵本『安吉州思溪法宝資福禪寺大蔵経目録』の底本とその問題点」として日本印度学仏教学会第68回学術大会(9月2日於花園大学)にて発表、『印度学仏教学研究』第66巻第2号(30年3月)に「大正蔵本『後思溪録』の祖本とその問題点」(84-89頁)として投稿、掲載された。 (2)岩屋寺所蔵の原本、及び国際部教学大学院大学所蔵の画像データにより、岩屋寺蔵思溪版本『大宝積経』120巻に附される康永年間の奥書94点を確認、翻刻することで、来歴と転読の実態を明らかにした。			
【備考】 ・科学研究費助成事業の4年計画の2年目。 ・国際仏教学大学院大学日本古写経研究所において思溪版本の調査(5月13日、11月11日、30年1月19日)。 ・岩屋寺において思溪版本の調査(8月1日、30年3月23日~25日)。 ・国際仏教学大学院大学日本古写経研究所主催の国際シンポジウムに参加(7月28~29日)。 ・花園大学において日本印度学仏教学会第68回学術大会(9月2日)へ参加し、「大正蔵本『安吉州思溪法宝資福禪寺大蔵経目録』の底本とその問題点」を発表。 ・『印度学仏教学研究』第66巻第2号(30年3月)に論文「大正蔵本『後思溪録』の祖本とその問題点」掲載。			



岩屋寺調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目であるが、研究の進捗状況としては、28年度の成果を踏まえた研究発表、論文執筆・公開ができ、未だに現存状況の確認がなされていない岩屋寺蔵本に対して、奥書94点を確認することで来歴と転読の実態を明らかにし得た点など、順調に成果が上がっている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。思溪版の目録と現存状況との乖離の原因究明を目的とする本研究にあって、従来、無批判に使用されてきた大正蔵本の目録の祖本が故宫本であること、故宫本に後代の補写が認められることを明らかにし得たことは、問題の核心部を指摘するものである。30年度は現地に赴き故宫本の調査、及び補写部分の底本を検討することで問題を解決し、最終年度である31年度に報告書としてまとめた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光 X 線分析器等を用いた光学的調査を念入りに実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】			
<p>(1) 愛知県立芸術大学が進める当館蔵大仏頂曼荼羅復元模写制作の基礎資料を提供するために高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた顔料調査を実施し、制作が進められた復元模写と原本との詳細な比較検討を行った(5月12日)。</p> <p>(2) 東京藝術大学の大学院生が行う信貴山縁起絵巻模写制作のため、高精細デジタル画像の撮影及び同絵巻山崎長者巻の原本熟覧調査を2度実施した(5月25日・9月11日)。</p> <p>(3) 文化庁によって制作が進められた薬師寺所蔵板絵神像復元模写の高精細デジタルカメラを用いたカラー画像撮影及び近赤外線撮影を伴う原本調査を実施した(9月7日・11月7日)。同復元模写を出陳する修理完成記念特別陳列「薬師寺の名画―板絵神像と長沢芦雪筆旧福寿院障壁画―」(30年2月6日～3月14日)を開催し、図録に高精細カラー画像及び模写制作過程で得られた最新の知見を掲載した。</p>			
東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻模写制作			
【備考】			
調査回数：5回(5月12日：大仏頂曼荼羅調査、5月25日・9月11日：信貴山縁起絵巻調査、9月7日・11月7日：薬師寺板絵神像調査)			
調査作品数：3件(大仏頂曼荼羅1幅、信貴山縁起絵巻山崎長者巻1巻、薬師寺板絵神像6面)			
論文発表：1件「薬師寺板絵神像の模写制作」『薬師寺の名画―板絵神像と長沢芦雪筆旧福寿院障壁画―』特陳図録			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の館蔵品である大仏頂曼荼羅の復元模写を愛知県立芸術大学が制作するにあたり、同大学と共同で各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察し、復元模写制作につなげることができた。また、東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻模写のため、当館が撮影した高精細カラー画像を提供し、原本の詳細な熟覧調査を2度設けることができた。さらに、薬師寺所蔵板絵神像復元模写を修理完成記念特別陳列「薬師寺の名画―板絵神像と長沢芦雪筆旧福寿院障壁画―」への出陳に伴い、原本の詳細な光学的調査を実施し、その成果を展覧会図録に掲載する準備を進めた。30年度以降も、他機関との協力のもとに光学的調査に基づいた復元模写の制作を進め、その成果を展覧会等の場を通じて公表していく計画である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大仏頂曼荼羅、信貴山縁起絵巻、薬師寺板絵神像という当館を代表する館蔵・寄託品について復元模写を制作するにあたり、愛知県立芸術大学、東京藝術大学、文化庁とともに精度の高い光学的調査を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。30年度以降も、愛知県立芸術大学や東京藝術大学など芸術系大学による復元模写制作に積極的に寄与できるよう、引き続きこれまでと同様の光学的調査をはじめ各種の調査研究を実施することで、中期計画の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 古代の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 我が国には、寺院を中心に古代の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、たとえば文学作品や歴史書、古文書などに比較すると、仏教学以外の分野での資料としての利用が低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の提示を目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻忠
【主な成果】 (1) 写経の調査 ・和銅5年(712)の願文を持つ『大般若経』(長屋王願経)(見性庵所蔵)を、元興寺文化財研究所の研究者とともに調査した。(4月10日) ・当館所蔵の平安時代写経を、当館調査員とともに調査した(数年来の継続調査)(4月28日ほか) ・特別展「源信」の開催にあたり、紺紙の『法華経』を多数調査し、展示解説文等に反映させた。また、図録に掲載するため写真を撮影した。(6・7月) ・当館所蔵で、現在修理中の『法華経』(色紙)を調査し(7月12日・28日、10月16日、30年1月17日)、過去の修理における表紙・見返しの改変や、紙継ぎの錯簡等が判明した。 ・唐代の書写と推定される『仏説因果経』(正智院所蔵)を調査した。(7月3日) ・天平神護2年(766)の願文を持つ『大毘盧遮那成佛神変加持経』(吉備由利願経)(西大寺所蔵)全7巻の写真を撮影し、併せて過去の修理の痕跡を調査した(7月13日、8月4日)。 ・唐招提寺において、『梵網経』等(覚盛願経)を調査した。現場にて、京都大学人文科学研究所の船山氏より教示を得た。(9月27日) ・『大般若経』599帖、『般若心経』(千部心経)98巻、『般若心経』(紺紙金字)7巻、『般若心経』(五巻本)5巻、『般若心経』(紙背消息)1巻(以上、海住山寺所蔵)を、京都府の文化財調査員及び木津川市の文化財担当者とともに調査した。(11月1日) (2) 聖教の調査 ・仁和寺(京都市)において御経蔵の聖教を調査した(文化庁事業に参加)。(7月27日) ・『聖徳太子伝暦』(本願寺所蔵)を、徳島県の文化財調査員とともに調査した。(10月30日) ・当館所蔵の『不動護摩次第』を、当館職員のほか修復業者を交えて調査し、保存上の問題点及び研究上の意義等について議論を深めた。(12月19日) (3) 紙素材文化財一般の調査 ・寧楽美術館において、中国トルファン出土の唐代田制関係文書を、韓国国立慶州博物館の学芸研究士とともに調査し(12月1日)、これまでモノクロ写真でしか見られなかった紙背の文書・文様を、詳細に観察することができた。 ・膨大な量に及ぶ「染田天神講資料」(染田区)を調査し、目録番号を付して整理した。(12月27日) (4) 研究成果の開示 ・これまでに蓄積された研究成果の一部を、「口絵解説 大般若経(魚養経)巻第二百五十一」(『正倉院文書研究』十五号、11月)などの形で発表したほか、平常展での展示解説等に反映させた。			
【備考】 論文:「口絵解説 大般若経(魚養経)巻第二百五十一」(『正倉院文書研究』十五号、11月) 講演:「奈良時代の福祉制度」(サンデートーク、6月18日)ほか2件			



不動護摩次第の調査

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度も、展覧事業の合い間を縫い、機会を捉えて古代の写経と聖教及びそれに関わる文化財を調査し、基本情報を蓄積することができた。他の研究機関に属する研究者が同席する場での調査も何度もあり、有益な意見交換ができた。調査及びそこから得られた知見は十分な実績に値すると考えるが、公表の面では論文1本にとどまっているため、左記の評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査と研究は、順調に実施できている。写経や聖教の重要性に関する認識は、学界において高まってきているが、なお関心を高め、原品の保存管理に対する理解を深めていく必要がある。それが博物館における事業の活性化に繋がっていくであろう。今後も、引き続き、数多くの資料を調査し、得られた知見を機会あるごとに公表していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関・社寺等が所蔵する作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水健
【主な成果】 (1) 展覧会に関する調査 ・科学研究費助成事業「染織技法による仏像の研究」(処理番号 1411C9 参照)は、仏教工芸の調査研究の一環として、30年度夏季開催予定の特別展「糸のみほとけ」展の事前調査を兼ねて実施した。 (2) 外部資金による調査 ・科学研究費助成事業「染織技法による仏像の研究」による文化財調査を30件実施した。 ① 細見美術館にて繡仏を調査・熟覧した(4月27日)。 ② 京都国立博物館にて繡仏を調査・熟覧した(5月26日) ③ 台北国立故宮博物院にて繡仏を調査・熟覧した(7月15日～17日)、ほか。 ・諸事情により対象年度中に行えなかった仏教美術協会研究等助成事業「天台宗の地方展開と鏡像」(28年度採択)による文化財調査として、以下の2件を実施した。 ① 岩手県八幡平市西根歴史民俗資料館、久慈市アンバーホールにて鏡像を調査・熟覧し、出土地を探索した(4月16日～17日)。 ② 京都府立丹後郷土資料館にて、鏡像を調査・熟覧し、一部は出土地を探索した(4月23日)。 (3) 経常調査、その他の調査 ・館蔵品の、X線CT撮影を含む調査を行った(5月24日、8月22日)。 ・修理寄託中の文化財につき、X線CT撮影を含む調査を行った(8月22日、30年3月1日)。 ・修理寄託中の文化財につき、写真撮影を含む調査を行った(9月25日)。 ・アソシエイトフェローの海外研修(大韓民国国立研修博物館学術交流事業)中の調査(大韓民国・国立中央博物館、国立慶州博物館)。 ・収蔵する仏教工芸品について随時調査を実施した。			
【備考】 ・調査61回(うち客員研究員・調査員による調査11回。海外調査3回)			



八幡平市西根歴史民俗資料館にて調査した鏡像の出土地

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表するという、事業概要に従い、当初の計画に基づき、概ね成果を達成している。殊に29年度は科学研究費を活用し、30年度夏季特別展「糸のみほとけ」の事前調査を数多く実施することができ、展覧会の充実が見込まれる点は評価される。</p> <p>また29年度新たに導入されたX線CT装置を用いた調査・研究にも着手し、金工・木漆工のデータの蓄積を開始した。今後は一層の多くのデータを取得し、充実と活用に努めたい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>展覧会に関する調査に加え、継続して行っている奈良周辺の文化財の調査・研究、仏教工芸に関する調査・研究、上代工芸に関する調査・研究について一定度成果を上げることができた。また、光学機器を用いた調査について、新たにX線CT装置が導入され、一層幅広い調査・研究が可能となった。光学調査は成果の待望される分野であり、データの蓄積や分析に力を入れていく必要があると考えている。</p> <p>30年度は29年度の成果を引き継ぎ、調査回数増加を図るとともに、対象となる文化財の多角的な調査に励むなど、計画の遂行に一層努力したい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 墳墓出土品の調査と研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列室室長 吉澤悟
【主な成果】 (1) 群馬県白山古墳出土品の調査： 28年度よりはじめた白山古墳出土品の調査を29年度も継続実施した。同出土品は和同開珎や銅碗を含み古墳の副葬品としては最も新しい段階に属する。関東地方の古墳消滅過程を考える上で貴重な資料であり、28年度に発表した報告(下記「備考」参照)は各地の研究者より高い評価を得ている。29年度はさらに銅製品を主とした材質分析の比較検討を進め、また同種の副葬品組成をもつ終末期古墳の考察など、研究の進展を図った。これらの成果をとりまとめ、30年度の当館紀要『鹿園雑集』21号に掲載する予定である。 (2) 奈良県五條猫塚古墳出土品の整理収蔵： 同古墳出土品は25年から27年にかけて3分冊の報告書を刊行しており、対外的な研究発信は完了している。次段階として、この出土品を一括して重要文化財に指定するためのリストや調査作成等の作業が必要とされている。29年度はその一環として、約1300点を数える出土品の収蔵方法を従来の「遺物台帳番号」順から報告書掲載の「図版番号」順に整理し直し、約100箱のコンテナに効率的に収納した。これにより、既刊の報告書を台帳として現物を容易に引き出すことができ、重文指定用の調査作成への準備が整えられた。 (3) 奈良県中宮寺出土瓦の整理作業 当館寄託の同寺出土の瓦について、帝塚山大学考古学研究所と共同で整理作業を進めた。その成果報告は30年度の帝塚山大学考古学研究所の報告に掲載予定である。 (4) 重要文化財・額安寺五輪塔出土品(忍性塔)の実測図作成： 額安寺五輪塔出土品(文化庁所蔵)は27年より当館の寄託品となっている。この五輪塔地下より出土した忍性(鎌倉時代の西大寺流真言律宗の僧侶)の銅製骨蔵器とその共伴品について、実測図を作成し、鑄造・製作技法の検討を行った。これは科研調査「叡尊・忍性による中世的救済ネットワークの研究」の3年計画の初年度成果の一部である。			
【備考】 (1) 28年度報告/諫早直人・大江克巳・金宇大・降幡順子・吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の研究1」『鹿園雑集』第19号 奈良国立博物館 白山古墳出土品の調査報告に向けた関係者・担当者打ち合わせ2回 (2) 既報告書/『五條猫塚古墳の研究 写真図版編』(25年)、『同 報告編』(26年)、 『同 総括編』(27年) いずれも奈良国立博物館発行 五條猫塚古墳出土品の29年度整理作業は作業員2名、のべ20日間 (3) 中宮寺出土瓦の整理はコンテナに約15箱分。打ち合わせ2回。 (4) 科学研究費助成事業/「叡尊・忍性による中世的救済ネットワークの研究」(29年度基盤研究(C)、研究代表者:吉澤悟) 実測作品数4件、作業のべ3日間			



忍性銅製骨蔵器実測図(部分)

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵および寄託の墳墓出土品を対象に、基礎的かつ堅実な調査・研究活動を推進することができた。白山古墳出土品の継続的な調査、そして五條猫塚古墳出土品の重要文化財指定に向けての整理作業など、当館所蔵の古墳資料で学会的にも注目度の高い物件に取り組むことができた。また、当館所蔵・寄託の古瓦の整理も継続的に進めている。これらは今後の研究の基盤となる活動として評価され得るであろう。 額安寺五輪塔出土品の調査については、科学研究費助成事業3年計画の初年度にあたる。29年度は忍性墓出土品(忍性墓は全国に3箇所存在、すべて重要文化財)の基礎情報を蓄積できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査研究の一環として、当館の所蔵品・寄託品を中心に、積極的に調査や整理活動を行った。特に考古部門では、錆びに覆われた鉄製品や土器・瓦片など膨大な数の資料を収蔵しており、その個体把握や効率的な収納、材質分析、図化など基礎作業がきわめて重要である。29年度はこの地道な基礎作業を進めることができた。30年度以降もこれを継続しつつ、さらに成果をとりまとめて発表できるよう努力したい。また、名品展の展示にその成果を反映できるよう工夫していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線ないしCTスキャン調査を通じ、データの収集と蓄積を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【主な成果】			
<p>(1) 館の内外において多数の作品の調査・撮影等を行った。作品名は下記のとおり。</p> <p>(2) いずれの作品についても、調査を通じて重要な学術的知見が得られた。</p> <p>(3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、あるいは公開講座における口頭での報告、また論文その他刊行物のかたちで、新知見の発表を行った。</p> <p>(4) 調査を契機として新たな寄託品に加えることのできた作品もある。</p> <p>【調査作品】 新大仏寺盧舎那仏坐像 (4月6日) / 金剛院金剛力士立像・東大寺聖観音菩薩立像 (4月10日) / 随心院金剛薩埵坐像・パラミュージアム十一面観音菩薩立像・正智院不動明王立像 (4月17日) / 善集院阿彌陀三尊像 (4月18日) / 西方院阿彌陀如来立像 (4月21日) / 松尾寺阿彌陀如来坐像・金剛院執金剛神立像 (4月25日) / 園城寺釈迦如来坐像・園城寺軍荼利明王立像 (4月27日) / 秋篠寺伝梵天立像 (5月10日) / 高雄寺十一面観音立像 (5月16日) / 金剛峯寺孔雀明王坐像 (5月25日) / 秋篠寺伝救脱菩薩立像 (6月19日) / 新長谷寺阿彌陀如来立像 (7月18日) / 秋篠寺伝伎芸天立像 (8月9日) / 秋篠寺伝帝釈天立像 (8月10日) / 即成院阿彌陀二十五菩薩坐像 (8月14日) / 知足院地藏菩薩立像 (8月21日) / 東大寺勸進所四天王立像 (8月25日) / 保安寺阿彌陀三尊像 (8月28日) / 唐招提寺毘沙門天立像 (9月27日) / 綱敷八幡宮伎楽面 (10月4日) / 東大寺真言院僧形八幡神坐像 (11月1日) / 如法寺毘沙門天立像 (11月16日) / 東大寺俊乘堂阿彌陀如来立像 (11月29日) / 天受院薬師如来立像 (12月7日) / 藤田美術館阿彌陀如来立像・藤田美術館地藏菩薩立像 (12月18日) / 観音正寺観音菩薩坐像 (12月19日) / 金剛寺降三世明王座像 (30年1月10日) / 善福寺阿彌陀如来坐像 (30年3月22日) / 金剛峯寺四天王立像 (30年3月23日)</p> <p>【調査の成果】 正智院不動明王立像については、調査の結果、同院所蔵の重要文化財毘沙門天立像と元は一具のものであったことが判明した。秋篠寺伝救脱菩薩立像からはこれまで知られていなかった像内銘が発見され、作者が判明した。東大寺真言院僧形八幡神坐像から台座銘が見いだされ、東大寺勸進所八幡殿の国宝僧形八幡神坐像の伝来に関わる重要な情報が得られた。如法寺毘沙門天立像は奈良時代(8世紀)にさかのぼる木心乾漆造の新出作例であり、国指定クラスの重要作品であることがわかった。</p>			
【備考】			
(1) 調査回数 35回 (28年度調査回数 16回)			
(3)			
<ul style="list-style-type: none"> ・新大仏寺盧舎那仏坐像や金剛院金剛力士立像、東大寺聖観音菩薩立像、随心院金剛薩埵坐像、パラミュージアム十一面観音菩薩立像、西方院阿彌陀如来立像、松尾寺阿彌陀如来坐像、金剛院執金剛神立像に関する調査結果を、29年度春季特別展「快慶—日本人を魅了した仏のかたち—」の会期中の公開講座「快慶の生涯と『如法』の仏像」(5月13日、担当山口隆介) / 「快慶作品に関する二、三の問題」(5月27日、担当岩田茂樹) に反映させた。 ・また上記の諸作品にくわえ、金剛峯寺孔雀明王坐像や東大寺俊乘堂阿彌陀如来立像などに関する知見を、当館研究紀要『鹿園雑集』(30年3月刊行) 掲載の論文(山口隆介「快慶作品の造像銘記に関する二、三の知見」) に反映させた。 ・高雄寺十一面観音菩薩立像に関する調査結果を、29年度夏季特別展「源信—地獄極楽の扉—」の図録解説に反映させた。 ・秋篠寺伝伎芸天・梵天・救脱菩薩・帝釈天立像に関する知見は、29年度発刊の学術図書(中央公論美術出版『日本彫刻史基礎資料集 鎌倉時代 造像銘記篇』第14巻/30年3月刊行) に反映させた。(執筆岩田茂樹) 			
(4) 正智院不動明王立像、如法寺毘沙門天立像につき、新たな寄託作品とすることができた。			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	作品調査について、29年度は28年度と比較して実施回数を倍増することができ、作品同士の関連性や作者の特定といった多くの新知見を得られたことは大きな成果である。また、この成果は29年度の春季及び夏季特別展における図録や会場パネル、題箋等に反映させることができた。更に、29年度発刊の研究紀要などの刊行物にもこれらの新知見を発表し、広く世間へ実績を公表した。調査が契機となつての寄託品の充実に資することができた。以上により、計画に対して著しい成果が得られたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	28年度に引きつづき、南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、光学的手法による調査を行ったことにより、データの収集・蓄積に十分な成果をあげている。中期計画の2年目として、28年度から作品調査の回数を倍増するハイペースで事業を推進していることは大いに評価できる。今後同様のペースで進めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】	<p>(1)当館において国宝信貴山縁起絵巻について高精細デジタルカメラを用いた顕微鏡画像の撮影及び蛍光エックス線を用いた顔料分析調査を実施した(5月15日)。</p> <p>(2)国宝信貴山縁起絵巻に関する光学的調査成果報告書の年度内刊行に向けて原稿執筆及び編集作業を進めた。</p> <p>(3)国宝信貴山縁起絵巻について22年度より継続的に実施してきた光学的調査の成果について総括を行うとともに、同絵巻に関する美術史的考察を踏まえた研究報告書を31年度に刊行するための編集方針について東京文化財研究所研究員と協議を行った(12月11日)。</p>		
	 <p>信貴山縁起絵巻の蛍光エックス線による顔料分析調査</p>		
【備考】	<p>調査回数 1回(5月15日)、調査作品数 1件(信貴山縁起絵巻3巻)</p> <p>研究会等開催件数 1件(12月11日)</p> <p>刊行物 報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書—光学調査編—』30年3月31日刊行</p>		


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安絵巻を代表する名品である国宝信貴山縁起絵巻について光学的調査の実施及び成果報告書第1冊の年度内刊行に向けた追加調査、編集作業を計画どおり進めた。また31年度に計画されている国宝信貴山縁起絵巻調査成果報告書第2冊(研究編)の刊行に向けて調査データの整理、分析を順調に進めることができた。これら精度の高い調査データは美術史研究や現在計画中の保存修理に際して重要な基礎資料となることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、29年度は平安絵巻を代表する信貴山縁起絵巻の調査報告書第1冊の本年度内刊行に向けて追加の光学的調査及び編集作業を着実に進めた。さらに、31年度に同絵巻の調査報告書第2冊(研究編)を刊行する計画であり、その編集方針についても協議を進めることができた。今後はこれまでの個々の作品調査や研究から一歩踏み込んで、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、中期計画の達成を目指した更なる進展を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	a.特別陳列「おん祭と春日信仰の美術 ―特集 社家史料と若宮―」に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術 ―特集 社家史料と若宮―」の開催にあたり、展示候補となる文化財を調査し、実際の展示や図録などの形で研究成果を発表し、さらに今後の研究活動へと結びつける。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻忠
【主な成果】			
(1) 展示候補資料の調査			
<ul style="list-style-type: none"> ・春日大社所蔵の古文書中から鎌倉時代のおん祭に関わる2点の史料を抽出し、関連資料を探索した。(8月18日ほか) ・江戸時代のおん祭の祭礼について調査するため、奈良県立図書情報館において『序中漫録』(写真版)を閲覧し、お渡り行列中の巫女に関する各種の史料を収集した。(9月10日) ・かつて春日社の神官を代々務めていた辰市家に伝来の典籍・文書を調査する機会を得、おん祭あるいは若宮社に関する史料を収集した。(9月12日) 			
(2) 展示のための調査・写真撮影			
<ul style="list-style-type: none"> ・春日大社所蔵資料及び辰市家・大東家伝来資料につき、展覧会図録に掲載するため写真撮影した。(11月6日) ・春日大社所蔵『若宮秘伝記』を調査し、現存写本の書写年代を特定した。(11月6日) ・旧社家の大東家に伝来した卷子本「春日御社御造営之事」を調査し、これと一連の資料である屏風装の古文書との接続関係を確認した。(11月6日) ・辰市家伝来の「応永十五年御遷宮精進記」を調査した。本書の記主である中臣祐建は、二十年後の応永三十四年の御遷宮(式年造替)にあたって本書を参照し、必要に応じて書き込みをしていたことがわかった。(11月7日) 			
			
<p>大東家伝来「春日御社御造営之事」 接続が確認された二枚の断簡</p>			
(3) 研究成果の公開			
以上の調査と、それに基づく研究成果を反映し、12月9日～30年1月14日を会期として特別陳列「おん祭と春日信仰の美術 ―特集 社家史料と若宮―」を開催した。合わせて同展の図録を刊行し、掲載の論文及び解説文に、研究成果を反映させた。			
(4) 本研究の意義			
春日若宮おん祭は、800年以上続く伝統行事であり、祭儀の内容やそれを支える信仰について研究を深め、将来へと継承していかなければならない。29年度に特集した「社家」は、明治維新によって神社の制度が大きく変わるまで、長きにわたり春日社を支えたシステムであり、その内容と歴史を正しく理解することなくしては、祭礼や信仰の研究も深化していかない。			
旧社家に伝来した史料、特に辰市家伝来のもは、これまで複製本によって内容は知られていたが、原本が公にされる機会はなかった。今回、初めて展示され、基礎的なデータも図録の形で公開された。近年、別の社家(東地井家)の当主が書き残した『中臣祐範記』の翻刻が刊行されつつあり(八木書店刊)、春日社の歴史における社家史料の位置づけはますます高まっており、今回の展示内容も時宜に合ったものと考えられる。			
【備考】			
論文等:「展示概説 おん祭と春日信仰の美術 ―特集 社家史料と若宮―」(奈良国立博物館編『おん祭と春日信仰の美術 ―特集 社家史料と若宮―』、一般財団法人仏教美術協会、12月)			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会のタイトルである「おん祭と春日信仰の美術」と、特集内容である「社家史料と若宮」の2つのテーマに沿って、展示候補となる文化財の調査から、それに基づく出陳品の選定、研究成果の展示会場および図録解説文への反映に至るまで、当初計画どおりに事業を進めることができた。特に書誌情報等を初めて公にした辰市家伝来史料については、今後の研究の進展が期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上述のとおり、本事業において、文化財の調査を通じて得た知見を展覧会の形で国民に還元するという計画は、順調に達成されている。ただし、ほかの展覧事業に比べ、際だった研究成果があったとは言えないため、左記の評価とする。引き続き、奈良の地に密着したテーマを設け、堅実な調査と研究を進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. X線CTスキャナ等による彫刻・漆工・考古資料などの文化財に関する構造技法の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の内容について実施した。 (1) 展覧会で借用した文化財に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてX線CTスキャナによる調査を実施した。得られた結果は文化財の保管環境向上の資料として活用を図る。 (2) 館蔵品や寄託品に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてX線CTスキャナによる調査を実施した。得られた成果は保存カルテ作製や修理の際での利用を予定している。 (3) 他の博物館・美術館、教育委員会や大学等から依頼のあった文化財等について、構造や製作技法解明を目的としてX線CTスキャナによる共同調査を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 春の快慶展で45件、夏の源信展で6件の木彫像に対するCT調査を行い、虫損の状態や構造、納入品などの状況が確認できた。 (2) 館蔵の中国古代青銅器を33件、古墳出土の馬具などの考古資料を60件CT調査し、外観から把握できなかった劣化や破損に伴う過去の修理状況が確認できた。 (3) 指定候補作品や仏教美術に関する出土資料など10件あまりの文化財に対してCT調査を行い、構造や製作技法などに関する知見を得た。 調査で得られた成果の一部は、当館紀要や学会等での公開を予定している。			
【備考】 ・ X線CTスキャナ調査件数：200件 ・ 「等身大の木彫像を対象とした大型文化財用X線CTスキャナの導入と調査事例について」『鹿園雑集』第20号(30年3月)			

X線CTスキャナでの漆工品調査の様子


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTスキャナを4月末に導入し、5月から調査を開始した。展覧会での借用品、館蔵品や寄託品、外部から依頼のあった文化財など、200件の文化財を調査し情報の蓄積を図った。成果は研究紀要や学会等で発表し、構造や製作技法など文化財の価値の再評価に役立つ基礎資料を提供した。30年度についても、継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4月末に導入したX線CTスキャナは順調に稼働しており、展覧会の借用品、館蔵品や寄託品などを随時調査し情報の蓄積を図ることができた。30年度以降も調査を継続し、データの蓄積を図ることにより、文化財の多角的な調査研究に資するとともに、文化財の保管環境向上及び修理の際の状況把握のために有効に活用していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	c. 染織技法による仏像の研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 我が国で製作された刺繍の仏像(繡仏)、綴織の仏像(織成像)を調査し、飛鳥時代から江戸時代までの技法の変遷、製作背景、図様の特徴、文献資料などを研究する。あわせて国外の類例も調査し、わが国への影響を考察する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤栄
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・29年度は国内27箇所の博物館、寺社、個人所蔵家を調査の対象とし、92件の作品を調査した。 ・海外は台湾の故宫博物院において10点の作品を調査し、さらに韓国・国立中央博物館で調査した。調査では通常の撮影に加え接写用の器材を用意し、細部の技法を記録に残した。 ・また、宮内庁正倉院事務所の協力を得て修理中の綴織當麻曼荼羅(奈良・當麻寺蔵)の可視分光分析を行い、染料調査を行った。 ・このほか、川島織物株式会社において綴織の製作過程を見学したほか、刺繍作家の樹田紅陽氏より古代、中世の刺繍技法を指導いただいた。 			
			
調査の様子			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、国内と近隣諸国の作品調査を行い、新出の作品の発見など多くの成果を挙げた。92件の作品を調査し、時代ごとの表現技法の変遷、表された尊像の傾向、製作の目的や背景などの傾向も明らかとなってきた。従来、彫刻や絵画が仏像表現の主流と考えられてきたが、染織技法による仏像の存在は無視できないものがあることが確認できた。あわせて文献資料から製作の目的、信仰背景などを考察した。我が国の仏教美術研究において注目されることが少なかった分野に焦点を当てた独創性は高い。</p> <p>研究の成果は展覧会での展示や目録等に反映したいと考えており、社会や学会へ貢献する予定である。</p> <p>実行できなかった研究にイギリスと中国における調査があり、30年度以降で行いたいと考えており、この点が評価をBとした主な理由である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。本研究は3年計画であり、計画概要は次の通りである。</p> <p>29年度 ①国内調査、②光学調査、③染織技術者との共同研究、④歴史の考察、⑤海外調査 30年度 上記①～⑤を継続、報告の準備 31年度 予備調査、報告の作成</p> <p>29年度の進行状況は⑤海外調査の一部を除き順調である。調査が進む過程で新たな調査地が増えることも多く、新出の作品の情報が得られたことは特筆される。また、連携研究者が調査の成果を講演会に盛り込んだように、社会への貢献も既に実施されたことは当初計画以上の成果であった。</p> <p>30年、31年度は29年度実施できなかった調査のほか、調査の過程で新たに生じた課題にも対応して調査を継続し、最終的に報告としてまとめたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	d. 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相に関する調査研究 (科学研究費助成事業) (4)－①－1)		
【事業概要】 本研究は京都・神護寺に伝来する高雄曼荼羅を中心とする研究である。高雄曼荼羅は空海が中国より請来した両界曼荼羅を写したものであるが、類する作品は中国には残っていない。その表現は多分にインド的であるが、当代にさかのぼる絵画作品はインドにはわずかしか残っておらず、インドとの具体的関係は明らかになってはいない。おそらくその表現は、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものと考えられる。本研究は、高雄曼荼羅とそれに関する国内外の作品を検討し、古代アジアの仏教美術の様相を探ろうとするものである。			
【担当部課】	奈良国立博物館	【プロジェクト責任者】	館長 松本伸之
【主な成果】 (1)インドにおける調査 (平成 30 年 2 月 25 日～3 月 3 日) 古代インドの希少な遺品が残るアジャンタ石窟、エローラ石窟のほか、サンチー遺跡、ウダイギリ、ヴィディヤー考古学博物館、ポーパル州立博物館、カンヘリー石窟の調査を実施し、写真などの研究資料を作成した。 (2)仁和寺の密教美術調査 (「仁和寺と御室派のみほとけ」展に関わる調査) 9 世紀末に創建され、真言密教の重要な拠点となった京都・仁和寺に伝わる密教美術の調査を実施した。仁和寺は密教の実践 (事相) の寺として知られ、図像類が多く伝わり、それらの調査を行った。空海が中国留学時に書き留めた経典等が含まれる三十帖冊子の全項の写真撮影を行い、研究資料の充実を図った。 29 年度は科学研究費助成事業 4 年計画の最終年度に当たるが、インドを中心とした海外作品のほか、日本密教の中心的な寺院である京都の東寺、醍醐寺、仁和寺などの作品調査を実施し、多くの知見や写真等資料を得ることができた。30 年度も科学研究費等外部資金を活用しながら、効率的に調査を進めたい。			
			
インド・アジャンタ石窟		インド・エローラ石窟	
【備考】 科学研究費助成事業の 4 年計画の 4 年目			

年度計画に対する総合的評価

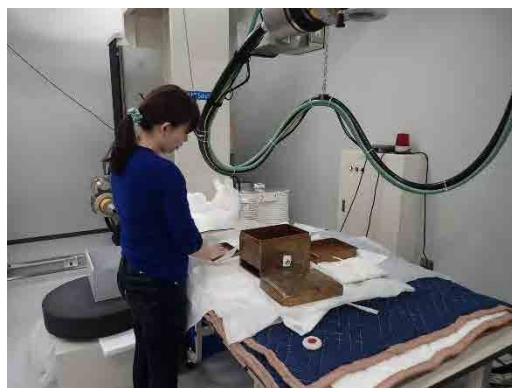
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の4年目である29年度は、これまでに実施してきたインドにおける作品調査を踏まえ、それらと密接に関連するインドの絵画、彫刻等の調査を実施した。また、高雄曼荼羅同様に空海が造営を指導した京都・東寺の講堂諸像の調査、また、888年に創建され、日本の密教史上重要な役割を果たした京都・仁和寺が所蔵する三十帖冊子 (空海筆) などの密教関連作品の調査も実施した。それらを通して写真等の多くの資料を作成することができた。また、醍醐寺をはじめとした国内の密教美術の調査も実施した。高雄曼荼羅を、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものとする本研究にふさわしい成果を上げることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。29年度は科学研究費助成事業としての最終年度に当たるが、研究機関を通じて、インド、中国、朝鮮半島、日本の絵画・彫刻等の作品調査を実施し、高雄曼荼羅成立の背景を探ることができた。今後は、高雄曼荼羅制作以降に制作された日本の密教美術の研究を行うことによって、高雄曼荼羅の特質と高雄曼荼羅が直接あるいは間接的に与えた影響を考察していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア X線CTスキャナ等による青銅器・彫刻・漆工などの文化財の構造技法解析に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 X線CTスキャナ等によって青銅器・彫刻・漆工などの文化財の構造や製作技法を解析し、文化財を製作した当時の技術についてより深く理解することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長（兼環境保全室長） 木川りか
【主な成果】			
(1) 漆工品木地構造調査のための調査研究 漆工芸品の木地構造、主に木組みを検証するため、29年度も徳川美術館所蔵の「初音の調度」の共同研究にX線CTスキャナによる調査を実施した。(12月、30年1月)その結果、輪台については薄い板を2重又は3重にあわせて美しい曲線を出していることがわかった。また、渡金箱については、木目を詳細に観察することにより、木取りやパーツごとの木目の向きなど、技法上の細やかな情報を得ることができた。また花形の器についても、どのように部材を組んでいるかがわかった。			
(2) 彫刻の製作技法解明のための解析研究 木彫像に施工されている漆喰の厚みや構造を調査するため、X線CTスキャナによる調査を実施し、当初予想していたよりも、外側の漆喰層がごく薄いことが明らかになった。			
(3) 金工品の構造、鑄造技法解明に関する調査研究 X線CTスキャナで調査を実施した結果、きわめて薄い金工品の容器が一枚の金属板から巧みな鍛造技術により造形された可能性が高いことがわかった。			
【備考】 ・ X線CT調査件数：46件・調査回数 373回 ・ 学会発表 X線CTスキャナを用いた国宝「初音の調度」の構造調査-小櫛箱、乱れ箱、湯桶の構造研究- 日本文化財科学会 34回大会（6月10日、11日） ・ 取材：BS11「尾上松也の謎解き歴史ミステリー」（第28回興福寺・阿修羅像の表情はなぜ優しいのか）（10月12日）			



初音の調度の調査風景


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・ 調査回数は373回と年間を通して、多くの文化財の調査を実施することができた。中でも、漆工品の木取りに関する情報や、彫刻作品、金工品の製作技法などについて調査を通じ、理解を進めることができた。公表できる調査結果については、作品の所有者と協議のうえ積極的に学会などを通じて公表し、すぐれた文化財作品の製作技法についてより広く知ってもらえるように努力した。30年度以降も、公開できる内容についてより広く発信していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・ X線CTの撮影方法の改善による鮮明なCTデータの取得については常時検討しており、中期計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に調査研究を遂行できた。30年度も継続して実施する予定である。 ・ 30年度も研究を継続させ、材質にあった調査方法の確立を目指す。 ・ 鮮明なCTデータから構造に直結するデータ解析の方法についても検証し、漆工品であれば木地構造の解析を、鑄造品であれば湯の流れの解析を行う予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 近世キリスト教に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	文化交流の重要なテーマの一つである、キリスト教の日本伝来と禁教に関する作品展示を継続して行うとともに、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究成果を発信する。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 松浦晃佑
【主な成果】	<p>(1) 28年度に引き続き、「キリスト教の伝来と禁教」というテーマで、キリスト教が日本に伝来した時期から明治時代にキリシタン高札が撤廃されるまでの時代の、近世の作品を中心に、観覧者が日本のキリスト教の歴史に触れられるよう、作品展示を行った（4月1日～8月27日）。また、29年度は新たに、「キリスト教信仰の道具」と題して、江戸時代に長崎奉行所がキリスト教信徒から没収、あるいは幕末に海外から日本にもたらされた十字架やメダイ、島原・天草一揆に加わっていた人々が所持していた十字架やロザリオの一部を展示し、信徒たちの信仰の様子的一端を紹介した（10月3日～12月24日）。</p> <p>(2) 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がUNESCOの世界遺産への登録を目指すなか、「潜伏キリシタン」あるいは「かくれキリシタン」に関する作品の調査を行った。五島列島の奈留島の「かくれキリシタン」が代々伝えてきた「絹のおらしょ」と呼ばれる資料を実見・調査する機会を得た（11月20日）。本資料は成立時期など不明とされてきたが、調査の結果、江戸時代後期の成立ではないかとの知見を得た。また、近年中の展示に向けて、所蔵者と協議した。</p> <p>(3) 特別展「新・桃山展―大航海時代の日本美術」（会期：10月14日～11月26日）において、近世日本におけるキリスト教に関する作品の展示を行うとともに、調査・研究の成果を、展覧会図録を通じて発信した。</p>		
			
	「絹のおらしょ」調査写真		
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	例年行っている「キリスト教の伝来と禁教」の作品展示に加え、29年度はキリスト教徒の信仰の様子を紹介する「キリスト教信仰の道具」の作品展示を行った。キリスト教の関連遺産が世界遺産への登録を目指し、社会的に日本のキリスト教の歴史への関心が高まるなか、こうした展覧事業を通じて、日本のキリスト教の歴史を紹介するという社会的要請に応えることができた。また、同じく注目を浴びる「かくれキリシタン」に関する資料を調査する機会に恵まれ、当該資料の研究を行う方針が定まった。近年中に展示を行い、成果を公表する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	第4期中期計画に沿って、当館の特色である日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財に関する展示・調査研究の一環として、28年度に引き続き、29年度も日本のキリスト教の歴史を、展覧事業を通じて一般に紹介することができた。また、江戸時代以来、現在まで続いている、日本固有の信仰の形である「かくれキリシタン」に関する資料を研究し、展示を通じて紹介できるとぐちについて。30年度以降も、昨今注目を浴びる日本のキリスト教の歴史を継続的に紹介していくとともに、他館や資料所蔵者の協力を得て、潜伏キリシタンあるいは「かくれキリシタン」に関する作品の調査と、展覧事業を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 高校所蔵考古資料を利用した博学連携活動の実践的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1)		
【事業概要】 全国の高等学校には現在、校内遺跡出土品、歴史系部活動による発掘調査出土品等々、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われていない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用に向けて、全国的な調査を実施し、その成果を展示、教育普及活動等の博物館活動を通じて広く公開するとともに、高等学校と博物館の効果的な連携活動について研究するものである。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子
【主な成果】 (1) 高等学校所蔵考古資料の調査 ・29年度は、日頃から当館が資料の借用、貸与等を行っている教育委員会職員からの情報や発掘調査報告書等を基に、都道府県・市町村教委、博物館等に現在の状況の問合せを行った。東京都、愛知県、三重県、京都府、兵庫県、熊本県、宮崎県の状況について情報を得られた。 (2) 「全国高等学校歴史学フォーラム」の実施 ・24年度から開催してきた「全国高等学校考古学フォーラム」を「全国高等学校歴史学フォーラム」と改称するとともに、壇上発表からポスターセッションへと開催形式を変更して実施した。(8月6日) 来場者が28年度の3倍の300人に増加した。 (3) 高等学校との連携事業の実施 ・「全国高等学校歴史学フォーラム」に参加した学校3校と連携事業を実施した。 ・歴史学フォーラムにおいて、奈良県立橿原高等学校考古学研究部と連携して、実験「高校生vsクロマニヨン人-今晚のごちそうを狩れ-」を実施した。同校が取り組んだ縄文時代の弓矢の再現を、当館「ラスコー展」の展示品である投槍器の再現と組み合わせ、それぞれの狩猟具の特徴を実際に使用することで理解する体験事業である。多くの観覧者が集まり、歴史学フォーラムのPRにもなった。 ・福岡県立朝倉高等学校史学部所蔵のキリシタン禁制高札研究に当館歴史資料担当研究員が協力した。同校生徒にキリシタン禁制高札の調査方法を教授し、判読困難な部分については協同で解読作業を行った。調査成果は、同校文化祭ならびに歴史学フォーラムで公開された。 ・福岡県立筑紫丘高等学校郷土研究部、朝倉高等学校史学部と連携して、文化財写真研修(11月3日)を行った。文化財の撮影方法を学ぶことで考古資料への興味関心を高めることが目的である。両校生徒にとっては、他校との交流の機会が刺激的であった様子で、同様の機会を今後も設けていく予定である。			
【備考】 ・「学校と文化資源」研究会(3月11日)「高等学校所在資料を活用した博学連携事業について」報告 ・「高等学校所在資料を活用した博学連携事業について」『東風西声』第13号(30年3月)			



全国高等学校歴史学フォーラム

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の3年計画の1年目である29年度は、考古資料を所蔵する全国の高等学校に関する情報収集を行った。これまで当館が収集してきた情報と合わせ、23都府県44校の資料の状況が把握できた。また、考古資料を所蔵し、かつ考古学系の部活動が行われている高校と連携事業を実施した。高校の所蔵資料や取り組んでいる活動を踏まえた事業内容とし、その成果を公表する機会を設けることで、高校側の取り組み意欲を刺激し、所蔵資料に対する興味関心を喚起できた。今回の連携事業を基に、継続的な連携事業のあり方を今後検討する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。30年度も引き続き高校所蔵考古資料についての全国調査を行うとともに、博学連携事業に取り組み、31年度に結果を取りまとめ、他機関で参考にできるように整理する予定である。 長期間継続可能な博学連携事業のあり方、内容について、実践を通して検討を進めるとともに、他機関の取り組みについても取材研究を進める必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 水中遺跡の保存活用に関する調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】 日本における水中遺跡保護体制の確立を目的とし、水中遺跡の保存・活用に関する取組を調査した。29年度の事業は、25年度から5年間継続してきた事業の最終年度にあたり、日本の水中遺跡の保護・管理体制に係る「指針」を示すことを目的とした。特に、①国内における漂流・漂着・難破等に関する文献情報の整理・分類と分析、②国内の水中遺跡の保存と活用の手法に関する調査研究（史跡鷹島神崎遺跡に関する保存と活用の調査研究、及び地方公共団体が実施する水中遺跡調査への適切な指導・助言の在り方に関する調査研究）、③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、④最終報告に向けたこれまでの調査研究のとりまとめの4件の課題を設定し、調査を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長（兼企画課長） 小泉恵英
【主な成果】 ①国内における漂流・漂着・難破等に関する文献情報の整理・分類と分析 文化庁から各都道府県の教育委員会に対して、日本各地の市町村史などに掲載されている漂流・漂着・難破等に関する情報提供を依頼し、これを収集した。得られた6,000件を超えるデータを整理・分析し、時代や地域による海難記録のばらつきなどを調べた。 ②国内の水中遺跡の保存と活用の手法に関する調査研究 ア)史跡鷹島神崎遺跡に関する保存と活用の調査研究 長崎県松浦市鷹島の沖で発見された鷹島2号沈没船の船首部の遺跡実測データ（琉球大学及び長崎県松浦市が作成）をもとに1/10の3Dプリンターモデル及びスチロール材を使用した展示可能な原寸大ジオラマを作成した。 イ)地方公共団体が実施する水中遺跡調査への適切な指導・助言の在り方に関する調査研究 地方自治体及び文化庁からの要請を受け、福岡県新宮町、福岡県宗像市、鹿児島県徳之島（伊仙町他）、沖縄県多良間村において、水中遺跡の調査・活用に関する取り組みの支援や指導・助言を行った。 ③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集 日本の水中遺跡の保護体制の骨子を作る参考とするため、諸外国における水中遺跡の調査と保護の先進的な事例の情報を集めた。特に、遺跡の現状保存の方法、水中考古学のトレーニング・教育についてまとめた。また、台湾やトルコなどこれまでの調査で焦点を当てていなかった国について、水中遺跡の保護体制など基礎的な情報を収集した。 ④最終報告に向けたこれまでの調査研究のとりまとめ 過去5年間の事業で実施した国内や海外調査の成果を整理し、日本の水中遺跡保護体制の現状を踏まえて、それぞれの調査の意義を再確認した。また、現地調査を行った10カ国（オーストラリア、アメリカ、イギリス、オランダ、デンマーク、スウェーデン、フランス、イタリア、韓国、中国）について、法律・体制の改変の有無や最新の調査・活用の事例について情報を収集した。			
【備考】 文化庁の取組：水中遺跡調査検討委員会（2回）、文化財担当員協力者会議（2回）、研究会・会議（4回） 報告件数：1件『水中遺跡の保存活用に関する調査研究5』（文化庁報告書、及び資料編） 取材：新聞（中日新聞、朝日新聞、西日本新聞 ほか）、テレビ（RKB毎日放送 ほか）			



新宮町相島における調査支援の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に予定していた①～④の課題について、予定通りに実施することができた。①では、沈没船という種類に限定されるが、日本で初めて国内の水中遺跡の推定件数を想定する資料ができた。②では、特に鷹島海底遺跡の船体復元など遺跡の活用において新たな取り組みの方法を提示した。③においては、これまでの調査と合わせて、世界各地の水中遺跡に関する基礎的な情報をまとめることができた。また、④で改めて過去5年間の調査研究の成果を見直す機会を持つことができた。これらの調査の結果を踏まえ、今後国内で行われる調査に関して指針を示すことができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの事業の総まとめを行ったことで、改めて日本の水中遺跡保護体制の整備を進める重要性を確認した。また、遺跡保護に関する諸問題を見出すことができた。当事業は、日本の水中遺跡保護の取り組みにおいて重要な基礎を築き、また今後の調査で活用できる実用的な資料を提供することができた。特に、諸外国の先進的な調査事例、遺跡探査手法、全国海難記録の分析結果など、水中遺跡をこれから保護・管理する各自治体が必要とする情報をまとめたことは重要な成果である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	オ タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究(科学研究費助成事業)((4)-①-1))		
【事業概要】 これまで知られてきた日タイ交流史料を新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイの文化交流の実相を再構築することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長 原田あゆみ
【主な成果】 29年度はこれまでの調査成果を特別展「タイ～仏の国の輝き～」(当館：4月11日～6月4日、東京国立博物館：7月4日～8月27日)として展示、図録、講演会等で広く紹介した。 (1) 上記展覧会をとおして研究協力機関であるタイ王国文化省芸術局の研究者を日本に招聘、講演会や情報交換を行った。 ・学術交流記念講演会「タイと日本 境界を越えて」(日程：4月29日 招聘者：アマラー・シースチャート氏、場所：当館)。 ・特別展「タイ～仏の国の輝き～」開催記念国際シンポジウム「タイの仏教美術と王権」(日程：6月15日 招聘者：サクチャイ・サーイン氏、ルンロート・タムルンアン氏、ナタパット・チャンドラウィット氏、場所：東京国立博物館)。 (2) 上記展覧会をとおして関係資料を紹介する一方で新たな情報収集も行った。具体的には明治期の積興然(1849～1924)請来タイ資料の調査(11月16日～20日、30年1月17日～18日)、織田得能(1860～1911)請来パーリ語貝葉経資料などの調査(30年1月22日～23日)を行った。 (3) 日本とタイに伝わる更紗の研究として、明治初期にタイから日本にもたらされた貝葉写本と包裂、江戸時代に日本に伝わった更紗裂帳、タイに伝わる更紗を比較調査した。この成果は、本科研のデータベースに反映するだけでなく、大谷大学真宗総合研究所の調査研究事業にも有効に活用されている。			
【備考】 科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の3年計画の3年目 原田あゆみ・小泉恵英「積興然請来仏像・仏画等調査報告」平成27～29年度科学研究費助成事業 基盤研究B 研究報告書『日タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究』15～76頁(30年3月31日)			



東泉寺での積興然請来仏像調査

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、収集してきたデータの整理と平行して、報告書の準備を進めた。本研究はタイ芸術局との信頼関係の下に進められ、情報公開や意見交換を行うなど相互補完的に研究成果を蓄積することができた。29年度は国際シンポジウム実施し、研究成果を広く紹介する機会も得、日本とタイの文化交流を裏付ける資料の発掘や情報共有など当初の目的を達成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。科学研究費助成事業の事業計画最終年度の29年度は、展覧会事業とも連動して教育普及プログラムによる一般の方々への成果紹介を行うとともに、これまでの調査成果の整理ならびに専門家向けの報告書を作成・公開するなど、中期計画に沿って順調に事業を実施した。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ a. 特別展示「神と仏と鬼の郷ー国東宇佐六郷満山ー」に関連する調査研究 ((4)-①-1) ※特別展示「大分県国東宇佐六郷満山展～神と仏と鬼の郷～」に名称を変更		
【事業概要】	特別展示「大分県国東宇佐六郷満山展～神と仏と鬼の郷～」開催に向け調査研究を行い、その成果を展示に反映するとともに、図録を発行する。		
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【主な成果】	<p>(1) 調査概要</p> <p>28年度に引き続き、本展開催のため下記の事前調査、撮影、輸送業者との現場打ち合わせなどを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大分県立歴史博物館（5月15日、6月12日） ・西予市三瓶文化会館（7月24日） ・文殊仙寺（7月27日） ・八幡奈多宮（7月31日） ・無動寺、長安寺、応暦寺（8月1日） ・神宮寺、熊野磨崖仏（8月2日） ・富貴寺（8月3日） ・日出町歴史資料館、法花寺跡、亀峯神社（8月11日） <p>(2) 地域との連携による開催</p> <p>この特別展示は、大分県国東半島・宇佐地域（国東市、豊後高田市、宇佐市、杵築市、日出町、姫島村）の共催で実施した。本展開催に至るまで、関係6市町村で構成される国東半島宇佐地域・六郷満山開山一三〇〇年誘客キャンペーン実行委員会と密に連携を図り、開催準備に当たった。</p> <p>(3) 特別展示の開催（会期：9月13日～11月5日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・47日間の会期中、62,688人の入場者があった。また、国東半島宇佐地域・六郷満山開山一三〇〇年誘客キャンペーン実行委員会と連携し、各種関連イベントが館内外で開催された。 ・これまでの特別展示と異なり、展示を関連展示室だけでなく、基本展示室3テーマエリアへ拡大的に展開し、特別展示のスケールアップを図った。 ・美術品展示にとどまらず、重要無形民俗文化財の「岩戸寺の修正鬼会」の映像も併せて上映し、国東半島の伝統文化を多角的に紹介した。 <p>(4) 図録刊行</p> <p>展示にあわせ、全112頁の図録を編集・発行し、総論、作品解説、コラム等にこれまでの調査の成果を盛り込んだ。出品作品及び参考図版をすべてカラー図版で掲載した。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・取材（新聞：毎日新聞、朝日新聞、西日本新聞、大分合同新聞ほか。TV：RKB毎日放送、FBS福岡放送、TNCテレビ西日本、OBS大分放送、ケーブルステーション福岡、JCOM、ラジオ：OBS大分放送） ・新聞寄稿（大分合同新聞 2回、愛媛新聞 1回） ・ミュージアムトーク 1回 ・夜間開館イベント（展示室内、夜のスケッチシナイト） 1回 ・X線CT撮影 1件 		



特別展示「大分県国東宇佐六郷満山展～神と仏と鬼の郷～」会場風景（基本展示室3テーマエリア）

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	九州に設置された国立博物館として、九州に関連する歴史や文化的に重要なテーマを設定して調査研究を実施し、その成果を展示に反映、広く発信することを博物館活動の柱の一つと捉えている当館にとって、今回の企画はそのコンセプトに合致したものであった。企画から準備、開催に至るまで、関係市町村及び関係組織と連携、相互に協力しながら事業を進めることができた。その結果、内容としても非常に多彩で魅力的な特別展示となり、入場者の評価、満足度もきわめて高かった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画のとおり、有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。地域に密着した展示活動は、九州の文化史的意義の再認識や地域における文化財への関心を高めることに大きく資するものである。今後も、九州に立脚したさまざまな企画を地域と連携、相互に協力しながら取り組んでゆく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ b. 特別展示「白隠さんと仙厓さん」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	白隠禅師遠忌 250 年に合わせて開催した、特別展示「白隠さんと仙厓さん」の調査研究を行い、その成果を展示に反映するとともに、図録を発行する。		
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【主な成果】	<p>(1) 調査概要</p> <p>本展開催のため、下記の出陳交渉、事前調査、撮影などを行った。事前調査を行うことで、安全な作品輸送、展示作業を行うことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 萬壽寺 (5月15日、11月21日) ・ 幻住庵 (7月6日、9月26日、11月9日) ・ 聖福寺 (8月8日、11月9日) ・ 松蔭寺 (8月17日、12月20日) ・ 福聚寺 (10月23日) ・ 多福寺 (11月24日) <p>(2) 展覧会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 展覧会名称や作品解説中では、「白隠さん」「仙厓さん」と表記することを各所蔵者や関係寺院に理解を求め、実現した。禅宗、禅僧、禅画といった一般的に難しい世界のものとの敬遠されがちなイメージを払拭する効果はかなりあったと考えている。 ・ 特別展示の開催 (会期：30年1月1日～2月12日) 38日間の会期中、32,021人の入場者があった。 ・ 臨済宗黄檗宗連合各派合議所および臨済宗妙心寺派と連携し、記念講演会を2回開催した。 <p>(3) 図録刊行</p> <p>展示にあわせ、全56頁の図録を編集・発行した。事前調査の成果は作品解説中に平易な文章で盛り込むよう努めた。出品作品及び参考図版をすべてカラー図版に掲載した。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取材 (新聞：西日本新聞4回、朝日新聞、毎日新聞、仏教タイムス、TV：NHK福岡放送局、テレビ山口ほか) ・ 寄稿 (九州王国、福岡リビング新聞、文化庁広報誌ぶんかる『文化財のトビラ』、WEBマガジン「アルトネ」) ・ 記念講演会 2回 (玄侑宗久「白隠と仙厓にみる大和の禅」223人参加 (30年1月14日)、芳澤勝弘「白隠と仙厓」180人参加 (30年1月28日)) ・ ミュージアムトーク 1回 		



萬壽寺での調査・撮影風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展示企画の開催年度である29年度は、準備に着手した28年度以来継続的に実施してきた九州内関係寺院の所蔵品調査の成果をもとに補足調査、状態確認や輸送に向けての事前調査を中心に行い、安全な作品輸送、展示作業に活かすことができた。また調査の成果は図録や会場解説、広報などに活かすことができた。特別展が開催されていない時期ではあったが、本展示の開催期間中には32,021人の入場者があり、しかも、有料入館者の割合が60%近くだったことは、本研究が時宜にかなう展示の実現に繋がったと評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って順調に展示事業に関連する調査研究を遂行し、その成果を展覧会に反映し、かつ広く一般に分かり易く発信することができた。今後も九州地域の有形文化財に着目した調査研究、展覧会事業を企画し、実施して参りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ c. 特集展示「国宝 銅鐸絵画」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業は、30年7月10日～9月2日の開催を予定している特集展示「国宝 銅鐸絵画」展に関する調査研究事業である。本展示は22年度より神戸市立博物館と当館が、国宝「桜ヶ丘銅鐸・銅戈群」（神戸市立博物館蔵）に関する共同研究を行ってきた成果を発表するものである。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 進村真之
【主な成果】 特集展示開催前年の29年度は、神戸市立博物館の協力を得ながら、展覧会開催に向けての調査および確認を行った。			
<p>(1) 6月27日、神戸市立博物館において桜ヶ丘銅鐸の実物及び3次元計測データ、X線CTデータを元にした当館への安全な作品輸送及び保管に関する確認、検討を行った。また、11月8日、神戸市立博物館の担当者と当館において実際の展覧会会場及び収蔵庫において効果的な展示とより安全な保管に関する調査、検討を行った。</p> <p>(2) 東京国立博物館所蔵の国宝「袈裟襷文銅鐸〈伝香川県出土〉」についても29年度に展覧会への出陳の了承が得られた。また、東京国立博物館に依頼し、「袈裟襷文銅鐸〈伝香川県出土〉」の3次元計測を行っている。 これで「桜ヶ丘銅鐸・銅戈群」全21点に加え、今回展示される全ての作品の3次元計測データが揃い、30年度に行う銅鐸・銅戈の実物および3次元計測データでの比較検討を行う基礎データが集まった。</p> <p>(3) 「桜ヶ丘銅鐸・銅戈群」の3次元計測データを元に乾拓の教育普及プログラムの開発を行った。展覧会の関連ワークショップでの活用を計画中である。</p> <p>以上により国宝「桜ヶ丘銅鐸・銅戈群」全21点のほか、東京国立博物館所蔵の国宝「袈裟襷文銅鐸〈伝香川県出土〉」の出品が決まり、いわゆる国宝「絵画銅鐸」3点全てが、九州の地で初めて並べて展示される準備が整った。</p>			
【備考】			



桜ヶ丘5号銅鐸 3D画像

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は開催年度の前年として、候補作品の全ての出陳が決まり、安全な輸送や効果的な展示を行う準備が整ったことは展覧会開催に向けて大きな進展である。また全作品の3次元計測データが揃ったことにより展覧会開催時に実物とデータ両方での比較・解析を進めることができる状況になった。29年度の成果を踏まえて、魅力的な展覧会につなげて行きたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画（有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究）に沿って、伝香川銅鐸の計測を行い、これにより展示作品全ての3次元計測データが揃い、データ上での比較・解析を行える状況が整った。30年度以降はこのデータを元に、実物での比較検討を行っていく予定である。この研究で得られた成果を多くの市民に解りやすく展示で紹介していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ d. 特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	30年開催予定の文化交流展 特別展示「全国高等学校考古名品展 2018」の開催に向けた調査研究		
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子
【主な成果】	<p>特集展示開催前年となる 29 年度は、各地で資料調査を実施し、展示資料の選定ならびに借用交渉を行った。借用交渉については概ね順調に進めることができた。また、展示手法の参考になるとと思われる展覧会を視察した。</p> <p>(1) 資料調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員・生徒による採集資料、校内出土資料、発掘調査出土資料と幅広い内容の資料を調査することができた。博物館等に貸与、寄託されている資料もあり、関係博物館等の協力を得ての調査となった。 ・記録類はあまり関心が払われず、学校側もきちんと管理できていないことが多いが、極力、生徒が残した写真その他の記録、冊子類も調査し、活動状況について把握するよう努めた。 ・資料調査を行った考古資料の中から、学校に入った経緯を確認しながら、地域性が顕著な資料、学史上重要な資料、生徒の活動状況を伝える資料を中心に、展示資料の選定と借用交渉を行い、概ね出品の理解が得られた。 ・資料調査の過程で、教職員の配置やカリキュラムを含む高校の現況やクラブ活動の状況等、博物館と高校の連携事業の参考となる情報を得ることができた。 <p>(2) 展示視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・玉川大学教育博物館において開催された「考古資料展－玉川学園考古学研究会の軌跡－」展を視察した。玉川学園は独自の教育方針をもち、公立高等学校とは生徒の活動状況が異なるものの、生徒による考古学研究が活発であった時期は全国の傾向と共通しており、他校生徒や研究者との交流が持たれるなど時流にのった活動であったことがわかった。豊富な記録類の展示、考古資料の露出展示など、展示手法の面でも参考になった。 ・南山大学人類学博物館では、常設展示を視察した。時代や地域別ではなく収集過程別に資料を展示するとともに、ほぼ全ての資料が露出展示されていた。本展でも、時代、地域別によらない展示方法や露出展示を検討しており、大いに参考になった。 		
【備考】	<p>29 年度資料調査：12 回</p> <p>愛知県立国府高等学校（7 月 28 日）、青森県立郷土館（8 月 8 日）、福岡県立宗像高等学校（10 月 25 日）、土岐市美濃陶磁文化館（11 月 14 日）、龍谷大学付属平安高等学校（11 月 16 日）、島根県立古代出雲歴史博物館・出雲弥生の森博物館・島根県立松江北高等学校（11 月 21 日）、青森県立郷土館（11 月 24 日）、福島県立博物館（11 月 29 日）、長崎県立対馬高等学校（12 月 12 日）、福島県立相馬高等学校（12 月 22 日、30 年 2 月 6 日）、玉川大学教育博物館（30 年 1 月 17 日）、福岡県立京都高等学校（30 年 1 月 23 日）</p>		



宗像高校での資料調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>特別展示開催に向けて、概ね順調に資料調査、展示資料選定、出品交渉を進めることができた。本研究成果は特別展示図録、展示において公開する予定である。</p> <p>26年、28年につづく第3回目の開催となるため、都道府県・市町村教委、博物館等に十分に周知されており、資料調査について理解、協力を得やすかった。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>資料調査、出品交渉を通じて、高等学校所蔵考古資料の実態・内容把握を進めることができただけでなく、高等学校の現状や考え方も知ることができた。本研究によって、本展に限らず、今後の当館の展示活動、教育普及活動の計画、展開の参考となる情報を得ることができた。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ e. 特集展示「坂本五郎コレクション受贈記念 北斎と鍋島、そして」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・29年度に寄贈された坂本五郎コレクションを対象とした展覧会に関する調査研究。 ・展覧会を通して寄贈品を館の事業の中に位置付け、今後の収蔵品の増加を見込む。 			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 河野一隆
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・29年度に寄贈されたコレクションを対象として、各分野ごとに研究員が写真撮影や調査研究を進め、総合的な形で、展覧会の企画を固めることができた。 			
【企画内容】			
タイトル「坂本五郎コレクション受贈記念 北斎と鍋島、そして」			
<ul style="list-style-type: none"> ・会期 30年9月12日(火)～10月21日(日)。 ・趣旨 本展は古美術「不言堂」を創設し、日本のみならず世界の美術市場を舞台にその名を馳せた坂本五郎氏(1923～2016)の没後に、当館に寄贈された、陶磁器・書跡・絵画・彫刻などのコレクション259件(重要文化財2件、重要美術品4件を含む)の全容を一挙公開する。 ・会場 文化交流展室第1室：陶磁の名品10件を常設するほか、寄贈された釜や絵画・書跡などを展示、第9室：陶磁・漆工・考古・彫刻分野の展示、第10室：茶の湯釜展示、第11室：絵画・書跡・工芸の展示。 ・ポスター・ちらし・図録(目録を兼ねる)を製作予定。 ・リリース 30年度事業紹介の形で公表した(30年1月9日)後、詳細な内容については、30年夏頃にプレス・リリースを行う予定。 ・29年度は写真撮影を中心として計画を推進した。 			
			
重要文化財「日新除魔図（北斎筆）」		重要文化財「鍋島瓶子」	
			
		コレクションの全体像写真	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に当館への寄贈が決定した坂本五郎コレクションについて、調査研究や写真撮影を行った。また、本調査研究を基礎として、展覧会概要を固めると同時に図録や陳列の設計にも着手し、30年度の展示開催にむけてのさまざまな作業を円滑に着手するための、基盤整備を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究について実施することができた。寄贈を受けた坂本五郎コレクションは、開館以来、質量共に最大規模のコレクションであり、本調査研究を通して30年度に開催予定の展示に活かし、本事業の目的を完遂する見込である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ f. 特集展示「平戸松浦家伝来の伊能図」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 30年は、日本地図史に大きな足跡を残した伊能忠敬の没後200年にあたる。忠敬の功績を記念して、平戸藩主であった松浦家に伝来した伊能図と関連作品を、展覧事業を通じて公開する。また、松浦家伝来の背景にあった、伊能忠敬と平戸藩主・松浦静山との交流もあわせて紹介する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 松浦晃佑
【主な成果】 30年度の展覧会に向けて、以下の通り、出品予定作品の調査を行った。 (1) 主要出品者である松浦史料博物館では、松浦家伝来の伊能図を調査するほか、伊能忠敬やその弟子達との交流を示す作品、測量器具などの調査を行った(12月21日)。 (2) 伊能忠敬記念館では、国宝「伊能忠敬関係資料」のうち、「伊能忠敬像」や平戸での測量日記などを調査した(30年2月23日)。 (3) 入船山記念館では、伊能隊が測量をする様子が描かれる呉市指定文化財「浦島測量之図」(個人蔵)の調査を行った(30年2月16日)。 以上の調査によって、松浦家伝来の伊能図の伝来の契機が、忠敬が平戸藩主に伊能図を譲渡するという約束に端を発したことが確認できた。また、展示を通じて、松浦家に伝来した伊能図の正確さとともに、伊能図が伝来した経緯を来館者に興味深く伝える準備ができた。さらに、測量器具や絵画作品の調査結果を通じて、忠敬らがどのように測量をしていたのかについて、来館者に紹介する方針が立った。			
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>松浦史料博物館での作品調査</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>伊能忠敬記念館での作品調査</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>入船山記念館での作品調査</p> </div> </div>			
【備考】 調査件数3件(松浦史料博物館、伊能忠敬記念館、入船山記念館)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は予定通り、所蔵機関の協力を得て、30年度の伊能忠敬没後200年の記念展示の準備を順調に行うことができた。30年度は調査の結果を展覧事業や図録等の刊行物に反映する予定である。なお、出品予定作品のうち、現在まで写真に撮影されていなかった作品を撮影し、図録を通じて広く一般に紹介する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、当館では日本とアジア諸地域の交流の歴史に関連する文化財の調査・展示を行うという方針に基づき、「アジアの古地図」や「伊能図」というテーマで、伊能図や伊能図が製作される以前の地図を継続的に展示し、伊能図の精度の高さや、日本の地理認識の変化を紹介してきた。29年度においても、同様の作品展示を行い、主にヨーロッパから地理の知識を得た日本の地図を紹介した(11月14日～12月24日)。30年度は、この展覧事業の成果を踏まえ、他館の協力を得て、本展覧会を開催し、調査・研究の成果を広く一般に公開する。この成果の公開により、ヨーロッパにおける地理の知識が日本においてどのように発展したのか、その文化交流の様相も示すことができる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ g. 特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	30年度実施予定の特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」に向けた調査研究事業		
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	研究員 小嶋篤
【主な成果】	<p>古墳時代の玉については、これまでその出土総数等の基礎的集積すらなされていない状況にある。本事業は、研究蓄積の厚い古墳時代研究における未開拓分野の開拓を果たした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島の南東部（新羅・伽耶領域）から出土する翡翠製玉類は、以前から日本列島産（糸魚川産）である可能性が指摘されていたが、蛍光X線分析等の理化学的分析により、その論拠が数値として提示できた。 ・大和、河内の古墳出土の翡翠製玉類が減少する時期と、新羅の墳墓出土の翡翠製玉類が増加する時期が一致しており、鉄素材等の交換財の一つとして稀少な宝石が用いられていた可能性が見出された。 ・特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」に向けた調査研究事業の成果は、29年度分については「第3回古代歴史文化協議会講演会 古墳時代の玉飾りの世界」を実施し、積極的に公開に努めた。（11月8日、東京・よみうり大手町ホール） ・古代の玉の流通範囲やその規模に関する基礎情報の蓄積を図った。 		
【備考】	本事業は、14県で構成される古代歴史文化協議会との共同で進められている。		



翡翠製玉類の調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・古代の玉は流通範囲が広く、その規模も大きい。日本列島出土玉類にも、地中海沿岸や東南アジア原産の素材が含まれている。実直な研究基盤の構築が今後の飛躍的なグローバル展開につながると考えられる。 ・考古学的調査に加えて、理化学的調査も併行して実施しており、客観的なデータ蓄積を実施した。 ・30年度は特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」に備えた調査研究を実施する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・中期計画に対し研究組織を立ち上げ、実地調査を含む基礎研究を実施することで取り組んだ。基礎的な研究データを蓄積したことで、30年度実施予定の特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」をはじめとした展覧事業・教育活動の基盤を整えた。 ・30年度は特集展示「玉 - 古代を彩る至宝 -」を基点に、展覧事業・教育普及活動を展開する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	a. 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究（科学研究費助成事業）（(4)-①-1）		
【事業概要】 これまで日本からの調査が十分に及んでいない在欧博物館等を中心に、日本仏教美術作品の悉皆調査を推進し、並行して新たな仏教美術作品の発掘も図る。調査で得た画像と情報をデジタル化し共有することによって、欧州における日本仏教美術研究の進展に寄与することも目指す。			
【担当部課】	九州国立博物館	【プロジェクト責任者】	館長 島谷弘幸
【主な成果】 (1) 下記の調査を行い、各館が収蔵する仏教美術作品の詳細な情報を得るとともに高精細画像を撮影した。 <ul style="list-style-type: none"> ・フィンランド・ヘルシンキのフィンランド国立博物館にて、同館の運用する所蔵品データベースを、日本において連携して運用するための調査を行った。（9月11日～12日） ・ドイツ・ポルトハイム基金民族学博物館にて、日本仏教美術作品（絵画、工芸など）の調査及び撮影を行った。また、滞在中に、ハイデルベルク大学において調査成果の発表を行った。（10月22日～27日） ・イタリア、アラ・パチス博物館、バルベリーニ宮、ピゴリーニ国立民族博物館、ウフィッツィ美術館にて、日本仏教美術作品の調査及び撮影を行った。（11月18日～25日） ・ドイツ・ブレーメン世界博物館にて、日本仏教美術作品（絵画、彫刻など）の調査及び撮影を行った。（12月11日～16日） (2) 各機関での調査に際し、現地の学芸員と面談を行い、今後の調査研究にとって有意義な情報と人脈を得ることができた。また資料や図録等の収集なども積極的に行い、30年度の調査を円滑に進めるための準備を進めることができた。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の2年目である。 現地調査回数：4回 調査作品件数：130件			



ドイツ・ポルトハイム基金民族学博物館での撮影風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の3年計画の2年目である29年度は、調査対象となっていた美術館・博物館でほぼ予定通りに調査及び資料の収集を行うことができた。調査対象に含まれていなかった美術館・博物館でも、今後の調査実施に向けて情報収集及び交渉を継続して行った。データベースの充実に向けて、各機関との協力関係を築き、ネットワークの形成を強固なものとしたことが意義深い。30年度には未調査の仏教美術コレクションの調査を行うとともに、事前調査で特に優品と認められたものについて専門家による追加調査を実施する予定である。また、科学研究費助成事業の最終年度として、調査の成果を整理し、データベースを完成させるほか、調査成果を印刷物にまとめる予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、29年度は調査対象となる日本仏教美術作品を所蔵する機関での調査を実施するとともにデータの蓄積を行った。最終年度となる3年目には調査成果をデータベース化し公開することと、報告書の作成を目指す。 各国の博物館・美術館との協力体制が構築できたが、調査受け入れ先である博物館・美術館の要望や所蔵品の傾向に合わせた研究分担者、研究協力者の日程調整が難しい点は課題である。各機関との交渉及び協議を重ね、より円滑な調査活動を行いたい。 上記のとおり、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究について29年度も計画的に実行している。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	b. 出土・在銘遺品を中心とした調査による明代彫漆器の基礎的研究（科学研究費助成事業） ((4)-①-1))		
【事業概要】 本研究は、世界各地に伝存する中国・明時代の彫漆器のうち、特に在銘・出土遺品の調査を通じてその様式や特質を明らかにし、いまだ判別の難しい明代彫漆器の制作地や編年を正しく捉えることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 川畑憲子
【主な成果】 29年度は、計画していた調査を進めて調査データを整理し、総括に向けて新たな検討課題について考察を進めることに努めた。 ・具体的には、28年度に続き、国内外に所蔵される明代彫漆器及び関連作品について、さらに広範囲に、作品調査を行った。 ・29年度、調査に訪れた主な所蔵先は、東京国立博物館、徳川美術館、個人（東京）、個人（京都）、台北国立故宫博物院、個人（台北）などである。 ・調査では、明代彫漆器を中心に文様技法や銘文に関する詳細な観察、記録、撮影を行ったが、明代のみならず、宋代、元代などの彫漆器、また他の技法を用いた中国漆器も合わせて調査することができ、当初の計画よりも多くの貴重な作品データを集積することができた。さらに、調査データをもとに国内外の研究者と議論を交わし、研究を深めることができた。 ・文献資料をあらためて博捜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討し、彫漆器の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。 ・ただし、29年度は担当研究者の傷病により研究活動が制限されたため、予定していた調査の一部を実施することができなかった。そのため研究期間を1年間延長し、延期した作品調査の実施や研究成果の公表に向けての総括を行う予定である。			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 調査回数 国内5か所 海外2か所 収集資料数 漆器ほか 約30点			



龍文堆朱合子および「大明宣徳年製」銘（台北・個人蔵）


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、計画していた調査を進めてデータを整理し、総括に向けて新たな検討課題について考察を進めることに努めた。 具体的な成果としては、多くの作品を実見し、さまざまな種類の官製銘を収集することで、より詳細なデータを得ることができたほか、日本で入れたと思われる作者銘や、評価に関する銘文も収集し、日本人が明代彫漆器の作者や制作地をいかに捉えていたか、具体的に知ることができた。 担当研究者の傷病により、計画していた一部調査については調査研究期間を30年度まで延長したので、30年度には延期した作品調査を実施しつつ、27年度からの研究成果を総括し、研究成果の公表を行う予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画において掲げられた、有形文化財に関する調査研究の目的の一部を達成することができた。 29年度は担当研究者の傷病により研究活動が制限されたので30年度まで研究期間を延長し、作品調査の成果を整理、検討をすすめ、総括として論文や発表などで成果を公表していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	c. 極薄青銅器と響銅を対象とした製作技術の比較—東アジア金属工芸史の再構築— (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】 戦国時代(紀元前5世紀)以降の中国で急速に普及していった、厚さ1mmに満たない青銅製容器「極薄青銅器」の製作技術について、3Dスキャン、蛍光X線元素分析装置など光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明する。また、南北朝時代(5世紀)以降に流行した轆轤挽きによる薄作りの青銅器「響銅」の製作技術との比較を通して、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を行う。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 川村佳男
【主な成果】 東京国立博物館、仙台市博物館や中国四川省、重慶市、貴州省などの博物館が所蔵する極薄青銅器、響銅、及びそれらに関連する青銅器の熟覧調査を行った。熟覧の結果、鑄造・鍛造・きさげ・轆轤引き・鑲付けなどによると思われる各種の製作痕を多数視認することができた。東京国立博物館では熟覧調査のほか、元素別デジタルマッピング機能をもつ蛍光X線分析装置(XRF)による計測も実施した。計測の結果、青銅器の表面に鍍金を施したと思われた部位が事前に鍍金を施した鍍金銀であったことが判明したほか、漆の塗布を予想させる元素を検出した例もあった。 東京藝術大学では、鑄造した板状サンプルに熱間鍛造による湾曲加工を施して小型の銅鑼状青銅器を作る実験を行った。何枚もの板状サンプルを積み重ねた状態で鍛打すると、熱が冷めにくく、地金の可変性を維持した状態でより確実かつ効率的に製作できることが分かった。仕上がった径は、重ねられた部位により少しずつ違いがあることから、法隆寺献納宝物の響銅八重鉢、和泉市久保惣記念美術館・山東博物館・中国国家博物館などが所蔵する戦国時代の極薄青銅器套匣(とうい:入れ子状の片口付碗)などは、この技法によって作られた可能性が高い。			
<div style="display: flex; align-items: center;">  </div> <p style="text-align: center;">三次元計測機による調査</p>			
【備考】 科学研究費助成事業3年計画の2年目 調査回数:7回(うち海外での調査2回) 作品調査件数:約50件 撮影点数:約400カット			

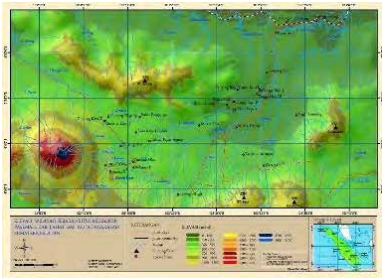
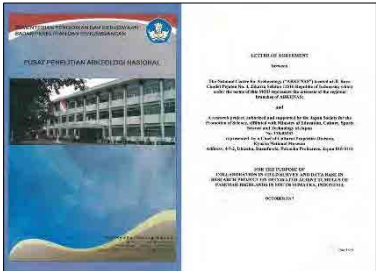
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である29年度は、国内外の多くの博物館などで予定していた極薄青銅器と響銅の幅広い調査を実施し、多彩な製作技法の痕跡を確認することができた。また、響銅八重鉢の製作技法とその効率を実験によって明らかにすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、29年度は熟覧、XRFによる元素の定性分析、実験などの多様な調査を実施することによって、極薄青銅器及び響銅の製作技法各種とその共通点について見通しを得ることができた。最終年度に当たる30年度は国内外で多角的な調査を継続するとともに、これまでの成果を整理して当館の文化交流展で公表する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	d. インドネシア・パセマ高原の装飾古墳の基礎的研究 (科学研究費助成事業) ((4)-①-1))		
【事業概要】	日本ではほとんど知られていないインドネシア・南スマトラの装飾古墳を対象に、考古学研究とデジタルアーカイブの構築を展開し、日本の装飾古墳研究にも寄与する。		
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 河野一隆
【主な成果】	<ul style="list-style-type: none"> ・本助成事業のうち、3年目に計画中であるフィールド調査のための覚書をインドネシア考古学研究所 (ARKENAS) にて締結、その折にインドネシア側で刊行されている巨石文化関連資料を入手し、翻訳を行った。 ・インドネシア考古学で先進的な取り組みを行っている、ボロブドゥール研究所を訪問し、意見交換を行った。 ・インドネシア・カウンターパートである考古学研究所の Tri wurjani 氏と調査成果を共有しつつ、地形図上に対象となる巨石文化関連遺跡を落とし込んだ遺跡分布地図を製作した。 ・先行調査で取得した GPS データをドットするための、パセマ高原をカバーするデジタル地図を公的機関 (BIG) から入手した。また、今まで所得した GPS データを地形図上に落としこんで、地理的特性を検討するための基盤づくりを行った。 ・フィールド対象地までの交通手段、効率的な搬入経路などの情報を入手し、インドネシア側と協議して確認した。 ・インドネシア考古学研究所 (ARKENAS) からいただいた、巨石文化関連資料の翻訳にもとづき、30年度の調査方針と対象範囲を決定した。 		
			
	対象地域の遺跡分布地図	インドネシア考古学研究所 (ARKENAS) と締結した覚書	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の3年計画の1年目である29年度は、インドネシア考古学研究所と覚書を締結し、資料収集を行うなど、2年目以降のための研究基盤の構築を行った。30年度以降の調査を順調に着手するための準備を当初の計画通り遂行することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。九州固有の文化財としてよく知られた、装飾古墳を対象とし、幅広いアジア的な視点から捉えるための研究基盤の構築のための、準備を順調に進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「運慶」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「運慶」に出品する作品の事前調査を行い、展示に反映させる。 東京国立博物館に作品を輸送後、科学機器を用いた調査、撮影などを行う。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	課長（兼国際交流室長） 浅見龍介
【主な成果】 (1) 運慶展出品の仏像 74 軀のうち、すでに調査済の 2 軀を除く 34 軀の X 線 CT 撮影、1 個の X 線撮影を実施した。 ・六波羅蜜寺地藏菩薩像の納入品の形状、納入状況等詳細を把握できた。 ・興福寺無著・世親像、南円堂四天王像の構造、木寄せを把握できた。両者とも木心のある材を寄せていることが分かった。 (2) 高野山金剛峯寺の八大童子像は彩色顔料特定のため、瀧山寺聖観音像は銅製装身具、銅製光背の金属含有物を特定するため蛍光 X 線分析調査を実施した。 (3) 興福寺無著・世親像、法相六祖像、東大寺重源上人像、長岳寺勢至菩薩像のファイバースコープによる像内観察を行った。 ・長岳寺勢至菩薩像の頭部内墨書銘を撮影。 (4) 出品作品はすべて写真撮影を行った。 以上、データを取得したので、今後時間をかけて分析する。			
【備考】			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	5年計画の2年目である29年度の特別展「運慶」の調査において、X線CT、蛍光X線、ファイバースコープ等の調査を実施し、成果の一部は展覧会場でパネルによって紹介した。また、テレビ、新聞等の取材を受け、注目を集めた。今後、調査画像を分析し、研究誌等で調査報告を行うことで、研究の進展が見込まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って有形文化財の展覧事業に関連する調査として、「運慶」展出品作品のうち予定していた調査はすべて実施することができた。30年度以降はその成果を研究誌などで発表することに尽力する。科学機器によって得られた情報を学会で共有すれば、研究の進展に寄与することができると考えられる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「仁和寺と御室派のみほとけ一天平と真言密教の名宝一」に関する調査研究 (4)-①-2)		
【事業概要】 真言宗御室派総本山仁和寺と御室派の寺院が所蔵する文化財を紹介した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長 丸山士郎
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名 特別展「仁和寺と御室派のみほとけ一天平と真言密教の名宝一」 ・会 期 30年1月16日(火)～3月11日(日) (48日間) ・会 場 平成館 ・主 催 東京国立博物館、真言宗御室派総本山仁和寺、読売新聞社 ・特別協力 仁和会 ・協 力 サビア ・協 賛 光村印刷・作品件数 20件 ・来館者数 324,042人(目標 150,000人・達成率 216.0%) ・入場料金 一般 1600円(1,400円/1,300円)、大学生 1,200円(1,000円/900円)、高校生 900円(700円/600円) 中学生以下無料、()内は前売り・20名以上の団体料金 ・アンケート結果 満足度 93.9% <p>真言宗御室派総本山仁和寺は、光孝天皇が仁和2年(886)に建立を發願し、次代の宇多天皇が仁和4年(888)に完成させた真言密教の寺院である。歴代天皇の厚い帰依を受けたことから、すぐれた絵画、書跡、彫刻、工芸品が伝わる。創建時の本尊である阿弥陀如来および両脇侍像(国宝)をはじめ、多くの作品について調査と写真撮影を行った。空海筆の三十帖冊子は全項撮影し、貴重な研究資料を作成することができた。また、仁和寺を総本山とする御室派寺院に伝わる仏像についても作品調査、撮影も行った。</p>			
			
「葛井寺調査風景」		「明通寺調査風景」	
【備考】 調査回数：13箇所 論文：総論1、各論4、コラム5、作品解説174件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	全ての出品作品について事前の調査を実施し、その成果を図録や会場の解説に活かすことができた。一部の作品については新たに写真撮影を行い、今後の研究のための資料の充実を図った。また、計画を上回る入場者があった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	真言宗御室派総本山仁和寺と全国の御室派寺院に伝わる文化財の魅力や価値を、堂内の再現を行うなどしてわかりやすい展示を行ったことから、計画を上回る入場者があった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 「アラビアの道—サウジアラビア王国の至宝」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 「アラビアの道」の実施のため、作品や展示手法を実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室長 白井克也
【主な成果】 (1) 韓国・国立中央博物館での展示調査 「アラビアの道」の巡回先の一つである韓国・国立中央博物館において、5月と6月に展示作品と展示手法を調査するとともに、サウジアラビア側担当者、韓国側担当者と意見交換を行った。 (2) サウジアラビアでの現地調査 「アラビアの道」の巡回先の一つであるサウジアラビア国立博物館において、11月に展示作品・展示手法を再度調査するとともに、主催者であるサウジアラビア国家遺産観光庁と、展覧会実施の詳細について意見交換を行った。 同時期に開催されていた Saudi Archaeology Convention に参加し、サウジアラビアにおける考古学の最先端について学び、参加者と意見交換した。 (3) 展覧会の実施と図録の発刊 以上の調査成果に基づき、30年1月23日から5月13日まで表慶館において展覧会「アラビアの道—サウジアラビア王国の至宝」を開催。また展示作品を解説する図録を発刊した。			
【備考】 展示調査 3回 展覧会「アラビアの道—サウジアラビア王国の至宝」開催 図録「アラビアの道—サウジアラビア王国の至宝」発刊			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査は、従来日本ではほとんど知られておらず、館蔵品でもほとんど該当作品の存在しなかったアラビア半島の歴史と文化について、人類の登場から現代にいたる作品に関して知見を深め、その普及を図るものである。東京国立博物館にとっても過去にない経験であったばかりでなく、世界的にも貴重な機会であった。 特に、世界の政治・経済情勢において、西アジアが注目され、イスラーム教への関心が高まる現状において、歴史や報道だけでは測らない、文化財という実物資料によってのみ知りうる人類の文化とその歩みを一般観覧者に提示したことの社会的意義は大きい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館にはアラビア半島にかかわる所蔵品はほとんどなく、またイスラム美術にかかわる所蔵品も乏しいため、それらの展示や普及の期間がほとんどなかったが、本調査を通じて所蔵品よりもさらに幅広く展示・普及の経験を得、またその過程でソウルやリヤドなど諸外国の展示・普及活動について知見を広めることができ、今後の博物活動に資するところが大きかった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 創刊記念『國華』130周年・朝日新聞140周年特別展「名作誕生一つながる日本美術」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	特別展「名作誕生一つながる日本美術」開催に向け、作品の状態確認、調査研究を行い、成果を展覧会に反映させる。		
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員 瀬谷愛
【主な成果】	<p>(1) 調査概要</p> <p>当館で開催予定の特別展「名作誕生一つながる日本美術」(30年4月13日～5月27日)出品予定の作品について調査した。調査先は下記のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・彫刻： 唐招提寺(奈良県)、成相寺(兵庫県)、笠区(奈良県)、春光寺(京都府)、孝恩寺(大阪府)、道明寺(大阪府) ・絵画： 善導寺(福岡県)、四天王寺(大阪府)、叡福寺(大阪府)、菊屋家住宅保存会(山口県)、山口県立美術館(山口県)、都内個人2件 ・陶磁： 岡田美術館(神奈川県)、MOA美術館(静岡県) <p>(2) 調査の結果得られた知見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査の結果、出品作品の現在の状態や、輸送経路の確認など事前に有益な情報を得られ、展覧会の構成や解説、安全な輸送への準備に取り組むことができた。 ・29年に84年ぶりに再発見された雪舟等楊の真筆について、その状態確認ができたこと、本展での東日本初公開への準備を行うことができたことは大きな成果である。 ・これまで展覧会では紹介されていない他の中世絵画新出作品の存在も明らかになり、展覧会内容が充実した。 		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査回数：のべ17回 ・プロジェクトメンバー(調査者)： 田沢裕賀(学芸研究部長)、猪熊兼樹(企画課出版企画室主任研究員)、丸山士郎(企画課特別展室長)、皿井舞(調査研究課絵画彫刻室主任研究員)、西木政統(列品管理課貸与特別観覧室研究員)、横山梓(保存修復課保存修復室研究員) 		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新出作品の存在確認により学界へ貢献することができるのは、本展の共催者である國華社の協力によるもので、本展の実施意義を大きく高めるものと考えられる。また、事前調査を行うことにより、出品予定作品の状態や美術史的表現に関する知見を深めることができ、作品解説の執筆や講演会、安全な輸送の準備を行なうことが可能となった。さらに、未撮影作品の写真撮影の成果を図録に掲載し、今後の研究に寄与することができる見込みである。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は現在出版される世界最古の美術雑誌『國華』の創刊130周年を記念する展覧会であり、その社会的役割としての優れた美術作品とその研究成果の紹介は、本展の重要な開催目的の一つでもある。作品同士の影響関係を来館者にわかりやすく説明し、また新しい作品との出会いや、これまで知っていた作品の新しい一面を発見する機会として、新出作品の発掘と紹介ができるよう準備を進めてきたことは大きな成果と考えている。本展で紹介する新作品や新知見は今後の研究に大きく寄与するであろう。また展示構成上、網羅的に紹介できない部分については、別途論文や学会発表によって公開したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「縄文—1万年の美の鼓動」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 30年7月3日(火)から9月2日(日)に開催予定の特別展「縄文—1万年の美の鼓動」の出品交渉並びに事前調査を行う。また、会場での展示方法などの参考のために、関連する作品の展示を行っている美術館・博物館の調査を行う。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
【主な成果】 (1) 出品交渉によって 40 を超える所蔵先から縄文時代の美に関する作品を集め、効果的な展示を行う見通しが得られた。 (2) なかでも火焰型土器(十日町市蔵)をはじめとした縄文時代の国宝 6 件全ての出品は、本展の目玉の一つになると考える。 (3) 出品作品の事前調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。また、関連作品の展示調査などによって、支持具などの展示方法についても知見を得ることができた。			
【備考】 ・ 29 年度の出品交渉並びに事前調査 14 回 (新潟県十日町市博物館・長野県茅野市尖石縄文考古館・青森県八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館など) ・ 展示構成などの打ち合わせ 2 回 ・ 共催社など含む打ち合わせ 17 回			
			
調査風景(左：井戸尻考古館、右：東京大学総合研究博物館)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	(1) 近年、従来とは異なり縄文時代・文化への関心が若年層、特に女性を中心に高まっている。そのため、本展は時宜を得たものであり、来館者層の拡大を図ることができると考えている。 (2) 時期や地域など幅広く出品作品を集め展示することによって、従来にない組み合わせや比較が可能になり、新たな発想や着想を生むきっかけになると考えている。 (3) 本展の準備作業によって多くの所蔵機関や研究機関と出品交渉や交流を行うことによって、今後の共同研究や特別展の企画立案に役立つと考える。 (4) 当館で21年度に行われた特別展「国宝土偶展」や特別公開「縄文の女神」などの知見などを本展に活用し、業務の効率化を図った。 (5) 本展に合わせて新規撮影や三次元計測・X線CT撮影などを行い、今後の研究や教育普及を行うためのデータが蓄積できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、30年度の広報・展示・図録など本展にかかわるさまざまな事業にその成果を反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 開館120周年記念特別展覧会「国宝」に関する調査研究((4)-①-2)		
【事業概要】	開館120周年記念特別展覧会「国宝」(10月3日～11月26日)の開催準備のため、国宝に指定されている文化財の調査研究を行い、その特徴や指定の意義などについて検証し、その成果を研究成果として、図録や展覧会出品作品の選定等に反映させた。		
【担当部】	学芸部	【プロジェクト責任】	工芸室研究員 降矢哲男
【主な成果】	<p>(1) 京都や関西圏を中心に、東北から沖縄まで、全国各地の国宝の文化財を調査し、その特徴や指定の意義などについて検証を行った。その成果をもとに、総件数210件にもおよぶ展示作品リストを確定させた。また、調査結果を反映し、考古、彫刻、絵画、書蹟、工芸、各分野においてテーマを設定した展示を行い、例えば、雪舟の国宝6件を同時公開、長谷川等伯・久蔵親子の作品競演、禅の世界観や東山御物の美意識を表現するなど、過去にない特徴ある展覧会構成となった。</p> <p>(2) 研究成果は、展覧会図録に論考3件、作品解説などに反映させた。また、展覧会期間中には、講演会を1回開催し、共催者主催の講演会や外部から依頼のあった講演会などにおいて、研究成果の公表を行うとともに、広く一般に文化財の意義について伝えることができた。図録は、第59回全国カタログ図録部門文部科学大臣賞を受賞した。</p> <p>(3) 41年ぶりに行った国宝展であったが、全国的に注目を集める展覧会となった。その背景として、国宝という希少性や展示のテーマ性に対する魅力があったことと共に、これまでに蓄積された当館における展示や調査研究の成果を活かし、例えば文化財修復される過程での新発見やCTなどの機器を利用し、その内容を積極的に取り入れたこともおおきな成果といえる。</p>		
			 <p>展覧会図録</p>  <p>展示風景</p>
【備考】	当館が開館して120年を迎える節目の年であり、かつ日本の法令上「国宝」の語が初めて使用された「古社寺保存法」制定より120年にもあたる。昭和51年(1976)に「日本国宝展」を開催して以来、41年ぶりとなったが、文化財の在り方について、これまでの展覧会や調査研究、そして文化財修復などの成果を基に、1期を約2週間として作品を入れ替えながら、210件の国宝を4期(48日間)に渡って展示した。		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	<p>今回展示を行うにあたり、各分野の研究員がそれぞれ京都や関西圏を中心として、日本全国の国宝の文化財の調査・研究を行った。それぞれの分野で蓄積されてきた研究成果に加えて、CT等の最新機器を用いた調査や文化財修復の過程では、例えば曼殊院所蔵の不動明王像(黄不動)に、仏画を描く前に行われる「御衣絹加持」と呼ばれる儀式の痕跡が見つかった。また、CTを用いた調査によって、四天王寺所蔵の掛守の内部構造が明らかになり、加えてその内部の様子を3Dプリンター等で立体的に再現することで、これまで知ることの出来なかった部分が明らかになった。このように、研究がし尽くされたと思われる国宝においても、新たに明らかとなった事実により、これまで研究を進めていくなかで提示できなかった新たな視点を広く一般に提示する、重要な機会となった。こうした研究成果の内容を踏まえて図録を作成し、講演会等において広くその内容を一般に伝えたことにより、注目が集まることとなり、結果的に研究成果とともに当館が120年にわたって文化財に寄り添ってきた過程を多くの人に認知される機会となった。</p> <p>テレビやラジオなどの放送や新聞報道、月刊誌や週刊誌などの特集、関連書籍の発行をはじめとして、その研究成果も取り上げられた。また、国内だけでなく海外メディアにも取り上げられ、成果も幅広く周知することができた今回の展覧会をきっかけに、国民の宝である「国宝」を守り伝えていくことを、62万人を超える多くの来館者に伝える機会となったことは極めて顕著な成果といえる。</p> <p>開館120年を記念する事業でもあったが、近年に例のない内容の展覧会を行えたことは、国宝に限らず多くの文化財を後世に伝えていく意義をあらためて多くの人に問う、重要な機会となったことは言うまでもなく、また研究面、社会へ貢献などを考えてもとても意義深い展覧会であった。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。文化財保護法に基づいた重要な役割のひとつである、国立博物館に収蔵・寄託されている国宝を広く公開するという点で、機構各博物館収蔵の国宝を数多く展示できたことは大きな成果といえる。また、それぞれの担当分野において、調査研究の成果を基にしたテーマを設けた展覧会であったことや、28年度から計画的に準備をしての開催により、質の高い展覧会を行うことができた。また、これまでの研究成果はもちろんであるが、調査成果や文化財修復、CT等の最新機器を活かした研究成果を積極的に公開できたことは、展覧事業のみでなく、各事業の成果を広く公開することにつながったといえる。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「池大雅 天衣無縫の旅の画家」に関する調査研究((4)-①-2))		
【事業概要】	特別展「池大雅 天衣無縫の旅の画家」(30年4月7日～5月20日)の開催のため、各地に所在する大雅作品及び関連資料の調査を行った。あわせて、展覧会への出品交渉を進め、図録等印刷物に掲載するための写真撮影も行った。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】	<p>(1)他機関の研究者等の協力も得ながら所在情報を収集したうえで、約700件の作品・資料の調査を行い、基本的な情報をまとめた調書を作成した。調査の過程で、従来未紹介の作品、近年の所在が不明であった作品、大雅研究上重要な意義を有する資料等を見出すことができた。</p> <p>(2)数値データ等の記録に加え、作品の細部や付属資料も含めた詳細な写真撮影を進め、作品間の様式比較や伝来等周辺情報の収集を可能とする画像データの蓄積を行った。</p> <p>(3)作品調査と並行して出品リストの絞り込みを行い、展覧会への出品交渉をスムーズに進めることができた。</p> <p>(4)既刊の研究書・論文、同時代史料等を幅広く参照し、作家の伝記研究や作品編年に関する最新の議論等について知見を深めることができた。</p> <p>(5)写真撮影については、可能な限り先行集荷のうえ館内で撮影を行い、経費節減とともに質の高い写真の確保に努めた。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数 約700件 ・出品予定作品数 約160件 		

九州国立博物館での作品調査
(池大雅筆「武陵桃源図」)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	江戸時代において最も重要であり、かつ京都を代表する画家の一人でありながら、池大雅の大規模展覧会は国内では長らく開催されてこなかった。その意味で、京都文化の発信を活動の柱に据える当館にとって、大雅展の開催は使命と言ってよく、一般社会及び学会の要請にも応えるものである。そのような画家の回顧展を開催するにあたっては、代表作を網羅するのみならず、画家の多様性を示す作品や資料として重要な作品を視野に入れた調査研究を進める必要がある。この点で、新出作品等を含む約700件の質の高い作品の調査研究を行うことができたことは、極めて大きな成果であった。展示・図録にはこうした調査研究の成果が反映される予定である。また、いくつかの作品については新規寄託品として受け入れる予定であり、年度計画に叶う成果が得られている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施した。そのなかで近世絵画分野においては、京都ゆかりの諸画家に関する資料・作品の調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、池大雅という京都ゆかりの画家の画業について、質・量ともに充実した調査研究を進めることができたことは、今後の画家に関する調査研究、さらには江戸時代中期以降の南画研究に大きく寄与するものであり、極めて高い成果であったと言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 1000年忌特別展「源信 地獄・極楽への扉」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「源信 地獄・極楽への扉」(会期:7月15日～9月3日)は1000年忌を迎えた恵心僧都源信の思想やその影響下で生み出された美術作品を一堂に展示する機会であり、これにあわせて関連する史料や美術作品の調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 北澤菜月
【主な成果】			
(1) 源信の伝記に関わる史料や源信の影響下で生み出された美術作品など、特別展開催前に展示予定品の調査を行った。先行研究や関連文献から、これまで展覧会等では紹介されなかった文献史料や美術作品について所在や内容の調査を重ねた。これによって著名な作品のみでなく、展示のコンセプトに合致する文化財を出陳作品として選定することができ、名品とともにあまり知られていない文化財をあわせて紹介し、特別展の学術的意義を高めることができた。		 <p>即成院所蔵 二十五菩薩坐像の調査・撮影風景</p>	
(2) 特別展に出陳された文化財について、カラー撮影、近赤外線撮影、X線撮影、CTスキャナといった光学調査を実施し基礎的な研究資料の蓄積を推進した。特別展図録では主要作品について詳細画像を多数掲載し、新たな作品評価・作品研究につながる情報提示を行った。なかでも国宝「六道絵」(滋賀・聖衆来迎寺所蔵)については特別展開催前に15幅すべての高精細撮影、近赤外線撮影を行い、研究資料としたほか、図録や、会場に設置したデジタルビューアーに活用することができた。			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> 調査・研究の成果を反映させた刊行物 北澤菜月「恵心僧都源信と浄土信仰の美術」(1000年忌特別展「源信 地獄・極楽への扉」図録総論、7月15日) 岩井共二『『往生要集』と浄土教の仏像』(1000年忌特別展「源信 地獄・極楽への扉」図録総論、7月15日)			
<ul style="list-style-type: none"> 調査・研究の成果を反映させた講演会、講座等 公開講座 3回 8月5日(土)「浄土の造形―源信以後を中心に―」武笠 朗(実践女子大学教授) 8月19日(土)『『往生要集』の成立―天台浄土教と源信の信心―』小原仁(聖心女子大学文学部名誉教授) 9月2日(土)「源信と浄土信仰の美術」北澤菜月(主任研究員) 夏季講座 1回 8月23日(水)～25日(金)夏季講座「地獄・極楽と浄土信仰の美術」 展覧会関連イベント 2回 7月29日(土)親子講座「エンマ様と地獄めぐり」鷹巣 純(愛知教育大学教授) / 参加者数 159人 7月30日(日)親子向けワークショップ「つくってわかる! 立体地獄絵」奈良教育大学大学院生 / 参加者数 35人			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	源信に関わる史料や源信の影響下で成立した美術品といった資料の調査、高精細撮影や様々な光学調査を特別展開催前に行い、その成果を展示や図録に反映することができた。また、特別展で借用した作品について高精細撮影や様々な光学調査を行うことにより、今後の研究に有用となる基礎的な研究資料の蓄積を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特別展は奈良を生誕の地とする源信を紹介するとともに、仏教美術のなかでも重要な位置を占める浄土信仰の美術を展示したため、展覧会に関する調査研究を通じ、仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究を推進することができたといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「第69回 正倉院展」に関する調査研究 ((4)-①-2)		
【事業概要】 特別展「第69回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境についての研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法など、多角的に研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水健
【主な成果】 (1) 宝物についての調査・研究 ・展覧会の開催に先立ち、宮内庁正倉院事務所の協力により、一部の宝物の閲覧、宝物調査の閲覧、宝物の詳細な写真の提供などによって正確かつ最新の情報を入手し、展覧会図録や会場の題箋、パネル等に反映させた。 ・正倉院、あるいは正倉院宝物についての研究成果を、展覧会図録所収の解説、小論文(「宝物寸描」)、公開講座、及び学術シンポジウム等を通じて公表した。また雑誌や新聞紙面等を通じて、研究員の日頃の研究成果を反映した最新の知見等をコラムやコメントのかたちで発信した。 ・研究員全員による宝物についての研究会を実施した。 (2) 展示環境についての調査・研究 ・文化財の適切な展示環境を考究するため、展覧会の会期中の温湿度データ、塵埃のデータを収集し、分析した。 ・文化財の展示環境についての検討会を、事前に宮内庁正倉院事務所とともにに行い、また事後には実際の計測データを検証し、30年度以降の展示環境の向上に繋げる検討会を持った。 (3) 観覧環境についての調査・研究 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な情報提供について考究するため、題箋やパネルの大きさ、位置等について検討し、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。題箋の内容、表記についての検討会を実施した。 ・作品の照明について外部専門家と意見を交換して、効果的な照明を会場にて試み、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な動線について考究するため、展示品やパネル等の配置、展示品への誘導方法、展示品の高さについて検討し、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。 ・文化財の安全かつ魅力的な展示についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。 (4) その他 ・文化財の安全な梱包・輸送のための検討会を内部で実施し、後に宮内庁正倉院事務所とも検討会を行った。			
【備考】 ・宝物に関する事前調査 6回 ・宝物についての内部研究会 2回 ・公開講座 3回 中川あや「正倉院の鏡」(11月4日)ほか ・正倉院学術シンポジウム 1回 ・『平成29年 正倉院展目録』(日・英) 奈良国立博物館 10月28日 日本語篇所収/吉澤悟「緑瑠璃十二曲長坏は乾隆ガラスか?」ほか			



「第69回 正倉院展」図録

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院展の開催を円滑かつ安全に遂行し、最新の成果を広く国民に周知するという事業計画に基づき、概ね順調に成果を上げている。最新の知見を反映した作品解説を、学芸部全体での検討を経て展覧会図録に掲載した。また、小論文や講座、シンポジウムを通じて、最新の研究成果を公表した。さらに、27年度よりはじまった宮内庁正倉院事務所との諸々の検討会は一層充実してきている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今期については、主に宝物についての調査・研究、観覧環境についての調査・研究を重点項目とし、充実を図っていきたいと考えている。宝物に関する調査・研究は、日々更新される成果を踏まえて着実に前進しており、多くの画像やメディアを活用して、最新の成果を広く一般に伝えることが概ね達成された。また宝物の観覧環境等に関する研究も進展しており、観覧者の不満は年を追って低減している。今後は一層のデータ・情報の収集に努めるとともに、質の高い学術情報の普及を行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 創建1250年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」に関する調査研究 ((4)-①-2)		
【事業概要】 30年度春に開催予定の特別展「国宝 春日大社のすべて」の開催に際し、展示品の候補となる作品、及び関連作品等の調査・研究を精力的に進め、展覧会の充実や高度な学術情報の発信を図る。また26年度～28年度まで行われた科学研究費・基盤研究(A)「春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究」(研究代表者・湯山賢一)を補完する目的も兼ねる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水健
【主な成果】 (1)出土遺物の調査 ・春日大社境内出土遺物の調査(6月15日・30年2月1日・春日大社) ・鹿島神宮周辺の出土遺物の調査(8月7日・鹿嶋市どきどきセンター) ・春日東西塔跡出土品の整理・調査(館藏品・通年) 春日大社境内出土遺物は、春日大社の黎明期に係るものもあり、上記科学研究費助成事業の対象とする年代を遡るものも含むことから、春日大社周辺での信仰を総体的に把握する上で有益な成果となった。なお、春日東西塔跡出土品の整理・調査は科学研究費助成事業終了後も着実に進捗している。 (2)美術・工芸品の調査 ・全国に所在する春日曼荼羅の調査(12月5日・静岡・佐野美術館、12月8日・栃木・遍照寺、12月18日・広島・海の見える杜美術館、30年2月16日・愛知・本光寺、30年2月20日・兵庫・白鶴美術館など) なお、個人蔵「春日宮曼荼羅(挿図)」は約40年ぶりに所在が確認された。 ・新出の春日若宮祭礼絵巻の調査(春日大社) ・岐阜・春日神社伝来の能装束の調査(6月15日・岐阜県関市) ・奈良・唐招提寺蔵春日赤童子像の調査・撮影(30年2月27日・奈良市唐招提寺) ・奈良・円成寺像十一面観音立像の調査・撮影(30年3月1日・奈良市円成寺) ・春日大社に関わる写経・文献史料の調査(30年2月2日・東京・根津美術館、30年2月3日・3月22日・国立公文書館、30年3月7日・奈良県立図書館情報館など) いずれも、科学研究費助成事業を継承するもので、資料・情報の蓄積が一層充実した。殊に春日曼荼羅については、調査を通じて国内に存する作品の情報がさらに拡充され、大変有意義な成果に育ってきている。			
【備考】 ・調査23回			



個人蔵「春日宮曼荼羅」

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度春に開催予定の特別展「国宝 春日大社のすべて」の開催に際し、展示品の候補となる作品、及び関連作品等の調査・研究を精力的に進め、展覧会の充実や高度な学術情報の発信を図るという事業概要に従い、概ね目的を達成している。また26年度～28年度に行われた科学研究費・基盤研究(A)「春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究」(研究代表者・湯山賢一)を補完する春日曼荼羅資料の蓄積や、春日東西塔跡出土品の整理・調査を推進することができた。さらに、新規の写真撮影などを含む本地仏像の調査等を行い、加えて、春日大社の創建に関わる史料や春日信仰に関連する説話資料、春日大社伝来経典の調査も実施した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度春季開催の特別展の充実という目的に向け、一定の成果を上げることができた。また、近年の神社の式年行事をめぐる世間の注目や、神仏習合への関心の高まりなどを反映し、これまで当館の挙げてきた成果を踏まえ、これを一層充実させるような展覧内容に向け、前進することができた。展覧会の会期中には、借用した資料の調査・研究・記録等を推進し、多くの関係資料を比較・検討することによって、単体の調査のみでは把握できない専門性の高い学術情報の収集に努め、当館の学術資源の一層の充実を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展 「王羲之と日本の書」 に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	<p>文字を手で書くことが少なくなった近年、毛筆の書への理解が遠くなり、書の文化的価値の断絶も懸念されている。王羲之の書を源とする日本の書の流れを、時代性や筆者の個性あふれる名品を通して紹介する特別展「王羲之と日本の書」を開催するための事前調査を行う。書は読めずとも見るだけでも十分に作品のよさを享受できることを、来館者と共有するための方策を探ることを目的とする。</p>		
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室長 丸山猶計
【主な成果】	<ul style="list-style-type: none"> 館内外で、筆勢と造形の関連性を捉えようとする問題意識で調査研究を行った。その結果、個々に異なる用筆原理を時代と筆者で見定めることができた。展覧会への出品を前提に、時代性や筆者の執筆状況が観覧者に想像しやすい作品の検討・選定を行った。展示内容・教育普及プログラムに、研究成果を反映させた。 宮内庁書陵部において、伏見・花園両天皇の自筆を実見し、墨色および墨の質、筆線に反映した毛先の質感を詳細に比較し、清書と草稿での文房具の使い分けと用具の使用傾向を分析した。 撮影担当者と協力して、8000万画素の高精細デジタルカメラで古筆手鑑「まつかぜ」(当館蔵)を撮影した。その結果、濃淡差が目視以上に筆線に反映していることが確認できた。 教育普及担当者と協力し、王羲之尺牘妹至帖と伊達政宗自筆書状(当館蔵)を例に、筆跡の3次元化のための毛筆の理論を提示し、3次元プリンタの制作を監修した。展示室で、筆跡の立体模型を手でさわれる初の試みとなった。 		
【備考】	<p>成田山書道美術館(6月21日)、根津美術館(9月12日)、佐賀県立美術館博物館(9月15日)、国立歴史民俗博物館(10月20日)、大阪歴史博物館(10月28日)、東京国立博物館(11月16日)、ふくやま書道美術館(11月17日)、宮内庁書陵部(12月18日)の計8件の外部調査を実施した。</p>		



展示室に掲示した教育普及パネル

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 書道史上に著名な名品と、従来さほど公開されてこなかった優品をバランスよく組込んだ展示構成となった。同時に、王羲之の書法を源とするわが国の書の歴史を、本質を外さず分かりやすく来館者に伝えられる作品で構成できた。 和様の書の成立と展開について、研究史と出品作品に則して考察を深め、図録原稿や会場のパネル等に反映した。 展覧会場で教育普及プログラムの一環として、平安中期の能書である藤原行成の運筆の分析と考察をもとに、和様の書に特徴的な丸みのある運筆を再現した動画を提供した。 上記のように、展覧会場においては、書の美とその文化について、本質を外さず来館者が親しめる環境を整備した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>下記の点により、中期計画を達成していると評価できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国立博物館で唯一、世界に誇る双鉤填墨本の王羲之尺牘「妹至帖」を所蔵する当館は、文化交流という観点を踏まえたアジアと日本の書跡の研究を、継続的に深めねばならない。その一環として特別展という適切な環境のもと、本件を実施できた。 分野の担当研究員と教育普及担当研究員が綿密に協議し、書跡という当館の特別展では未踏の分野でユニークな教育普及プログラムを、特別展において外国語対応も踏まえて実施できた。 手書きの書のもつ歴史的な意義を、特別展において作品を通して明瞭に解説し、手書きの文化の重要性を啓発することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 明治150年記念 特別展「オークラ コレクション」に関する調査研究 ((4)-①-2)		
【事業概要】 明治150年記念 特別展「オークラ コレクション」に関する調査研究。 日本最古の私立美術館で、2020年リニューアル・オープンを目指し休館中の大倉集古館のすぐれたコレクションを紹介する展覧会として企画。2018年秋開催を目指す。同コレクションを通じ、大倉喜八郎が行なった文化財保護の志、喜七郎による海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介するとともに、アジア諸国の多様なコレクションに光を当てることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 山下善也
【主な成果】 ・大倉集古館に関する図書・図録・文献などの情報収集を随時行った。 ・大倉集古館学芸課員諸氏と面談し、大倉コレクションの概要についての情報収集を行った。 ・多分野にわたる大倉コレクション展示構成、展示リスト、輸送計画等について検討し、具体的な実施案を作成した。 ・出品予定作品の調査は、30年度への持ち越しとし、29年度は、これまでの研究成果の整理把握を行った。			
			
大倉集古館外観			
 			
昭和5年の「ローマ展」会場写真(大倉集古館蔵)調査			
【備考】 ・大倉集古館学芸職員との打合せ(10月20日、30年2月23日) ・大倉集古館仮事務所での「ローマ展」写真資料調査(30年3月15日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は概ねリスト策定ができ、調査の前提を固めることができた。30年度は詳細な作品調査を行う予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画にもとづき本調査研究を行った。今後、具体的な作品調査を進めるとともに、輸送・展示作業の安全性を高めることにも活かしていきたい。さらに、30年度以降の展覧事業にも活かすようにしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「京都・醍醐寺—真言密教の宇宙—」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	30年度特別展「京都・醍醐寺—真言密教の宇宙—」(31年1月29日～3月24日)開催に向けた調査研究。真言宗の古刹・醍醐寺の所蔵する至宝を展覧する本展は、当館で初めての密教美術展として九州でも高い関心を集めるものと予想される。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 森實久美子
【主な成果】	<p>特別展「京都・醍醐寺—真言密教の宇宙—」開催準備のため、醍醐寺の協力を得て、展示作品を選定するための調査を実施した。未公開の史料の調査も行い、展示候補作品の状態確認をし、出陳について検討した。また、巡回館である東京・サントリー美術館とも協議を重ね、展示作品をほぼ固めることができた。</p> <p>東京・サントリー美術館での開催が先行することから、30年の初めから全国規模での広報を開始した。当館での開催についても認知度を高めるべく、早い段階での周知に努めた。</p>		
			
	醍醐寺での調査風景		醍醐寺での調査風景
【備考】	醍醐寺において、各会場（当館およびサントリー美術館）の特性を踏まえ、展示を視野に入れた具体的なデータ入手や撮影を行った。また、大型の作品などについては検討課題を共有し、円滑な輸送・展示のための情報収集に努めた。		


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品の調査により、出陳作品の精査及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。それによって安全な輸送及び展示に備える準備ができるようになり、また図録執筆に必要な情報も得ることができた。準備作業は予定通り遂行しており、30年度の特別展開催にむけて着実に準備を進められた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の通り、有形文化財の展覧事業の実施のために必要な調査研究を行った。特別展開催となる30年度は、調査成果を魅力的な展示に反映させ、一人でも多くの方に満足いただけるよう周到な準備を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「室町将軍(仮称)」に関する調査研究((4)-①-2))		
【事業概要】 31年度特別展「室町将軍(仮称)」(31年7月13日～9月1日)開催に向けた調査研究。本展覧会は、等持院霊光殿安置の歴代室町将軍像13軀を初めて一堂に展示するほか、歴代の将軍を通して、室町時代の歴史と文化、両側面から迫るものである。室町時代の戦乱をテーマとする書籍がヒットするなど、近年、室町時代への関心が急速に高まっており、高い注目を集めるものと推測される。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 森實久美子
【主な成果】 特別展「室町将軍(仮称)」開催に先立って、京都・等持院霊光殿安置の室町将軍像13軀及び徳川家康像1軀の計14軀を美術院による応急修理ののち当館に輸送・搬入した。等持院の室町将軍像が寺外で一挙公開されるのは初めてのことであり、特別展開催までに詳細な調査を行うため、像を所蔵する等持院及び天龍寺、京都市と綿密な協議を行った。 およそ200年にわたって続いた室町幕府について、歴代将軍の個性を浮き彫りにした展示内容とするため、展示作品の選定を進めた。			
			
等持院での室町将軍像応急修理の様子		等持院での室町将軍像梱包の様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

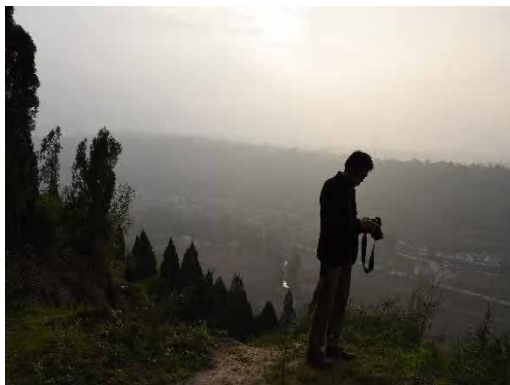
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示の核となる京都・等持院霊光殿安置の室町将軍像13軀の輸送を完了し、一部については調査を行い、彫刻の挿し首等に記された墨書銘の確認を行った。31年度の開催に向けて、30年度以降も展示作品確定のための調査を積極的に行い、より充実した展示内容を目指して準備作業を進めるとともに、本展開催をあまねく広報したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画において目標とする、有形文化財の展覧事業に関する調査研究を行った。特別展「室町将軍(仮称)」開催に向けて調査を積み重ね、その成果を展示会場および図録に分かりやすく反映させる予定である。本展を契機として新規観覧客を獲得するとともに、より広く一般に博物館の存在意義を認識する機会になると予想される。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「三国志展（仮称）」に関する調査研究（(4)-①-2）		
【事業概要】	近年実施する計画がある特別展「三国志展（仮称）」をより充実した内容にするため、中国各地の博物館、研究機関、三国志関連の史跡を訪れ、本展覧会の出品候補の調査、関連情報の収集、調査研究動向の把握、意見交換などを行う。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 川村佳男
【主な成果】	<p>中国の河北省、江蘇省、四川省、雲南省、甘肅省、陝西省、遼寧省、山東省、北京市、内モンゴル自治区、山西省の博物館、研究機関を訪れ、三国志に関連する文化財の調査を行った。陝西省定軍山遺跡などの古戦場から出土した三国間の軍事的緊張を物語る武器各種や、曹操の揮毫とされる摩崖石刻、曹操墓の副葬品とは対照的な復古のかつ華やかな曹植墓の副葬品など、三国志の具体的な人物像に迫る文物を展示品候補に加えることができた。また、魏・呉・蜀が政治的に区分された領域であるだけでなく、後漢時代からそれぞれ個性ある文化を展開していたこと、さらに、魏の領域内でも公孫氏の勢力が強かった遼寧省では、河南省から出土しないような独特な形状の文物が見つかっており、各国が政治的にも文化的にも多様であったことを確認した。このほか、五丈原や「桃園の誓い」の舞台となった涿県など、三国志ゆかりの地を踏査することで、土地の高低差、経路、水資源の有無、どれくらいの規模の軍隊を展開できる広さなのかなど、現地でしか知りえない詳細な地理情報を得ることができた。</p>		
【備考】	<p>調査回数：6回 作品調査件数：約5,500件 撮影点数：約22,000カット</p>		



五丈原での踏査の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は、中国各地の博物館や研究機関などで三国志関連文物の幅広い調査を実施し、展示品候補リストを充実させるとともに、三国志の一部のキャラクターの人物像や、魏・呉・蜀の文化的差異などに迫り得る手がかりを得た。また、三国志の主要な史跡や古戦場を踏査することによって、高低差、水資源の所在、平地の広さ、経路など現地ではしか知りえない詳細な地理情報を確認することができた。30年度はこのたたき台をもとに中国側と展示品出陳内容の協議を進めるとともに、29年度から引き続き関連情報の蒐集や、出陳内容の交渉過程で断念せざるを得なくなった展示品の代替候補の調査などを実施する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、31年度の開催を計画している特別展「三国志展（仮称）」の展示及び図録をより充実させるため、28年度と29年度は中国で多くの実施調査を行い、中期計画の目標である展示品リストのたたき台を作成することができた。このたたき台をもとに中国側と具体的な出陳交渉を行うのが次の段階のミッションであるが、交渉過程で断念せざるを得なくなった展示品が出た場合、その代替品となる候補選定は28、29年度の実地調査で得られた知見を踏まえて行うことになる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「瀋陽故宮展（仮称）」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	<p>近年実施する計画がある特別展「瀋陽故宮展（仮称）」をより充実した内容にするため、瀋陽故宮をはじめ中国各地の博物館、研究機関、満州族や清朝の歴史に関連する史跡を訪れ、本展覧会の出品候補の調査、関連情報の収集、調査研究動向の把握、意見交換などを行う。</p>		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 川村佳男
【主な成果】	<p>瀋陽故宮がある中国の遼寧省や、清朝を興した満州族の史跡が多く存在する吉林省の博物館、研究機関を訪問し、瀋陽故宮展に関連する文化財の調査を行った。清朝の建国から北京入城にいたるまでの「清朝前史」に関わる文物、例えば、清朝第2代皇帝ホンタイジ御用の刀や玉座、康熙帝から道光帝の治世にかけて举行された「東巡」（満州族の故地である中国東北地方、とくに瀋陽の宮殿や清朝皇帝の陵墓への行幸）と関連する文物を展示品候補のリストに加えた。また、吉林省長白山満族博物館や伊通満族博物館での調査を通して、清宮の宮廷文化と民間の満州族文化との関連や、清朝が長白山など満州族の聖地を東巡以降に宮廷儀礼に積極的に取り込んでいった過程にも注目した。こうした知見は、瀋陽故宮展の内容を吉林という別の視点からさらに深めるうえで有益であった。</p>		
			
	瀋陽故宮博物院での作品調査		
【備考】	<p>調査回数：3回 作品調査件数：約1,000件 撮影点数：約4,000カット</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>29年度は、中国の遼寧省及び吉林省にある清朝や満州族の歴史と文化に関連する博物館・研究機関などで予定していた調査を実施することで、展示品候補リストを充実させるとともに、清朝の宮廷儀礼と満州族の民間文化・習俗との関連性を確認することができた。30年度は東巡、特に清朝全盛期の乾隆帝による東巡の経路をたどる踏査を行い、瀋陽故宮及びその所蔵品が東巡によってどのように変質していったのかを検証し、展覧会の企画内容をさらに充実させたい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>特別展「瀋陽故宮展（仮称）」の実現に向け、28年度から30年度にかけては展示品候補の形状・来歴・保存状態に関する事前調査とともに、それらの作品を生み出した清朝の歴史的背景についても実地調査を実施する段階にある。29年度は中国の遼寧省及び吉林省の関連博物館・研究機関・史跡で幅広い実施調査を行い、瀋陽故宮博物院が所蔵する清宮儀礼の文物が満州族の民間の文化・習俗とも深い関連性を有することを確認した。30年度に清朝全盛期における瀋陽故宮とその文物の位置づけ、及び歴史背景を調査することができれば、28年度から30年度にかけては中期計画における目標を確実に達成することが見込まれる。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館環境デザインに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】	当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。		
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	デザイン室長 木下史青
【主な成果】	<p>(1) 本館展示の作品アイコン画像入りマップの看板を作成し、本館玄関と<日本美術の流れ>展示入り口に掲出した。</p> <p>(2) 本館前(屋外)の館内案内サイン表示のピクト東博仕様を標準化し、デザインを刷新した。</p> <p>(3) 西門北側の注意看板をピクト入り・多言語化更新・設置した。</p> <p>(4) 「庭園開放」時の「施設解説」「案内・誘導」等のサインを多言語化し更新・補充を行った。</p>		
			
	展示アイコン入り看板	館内案内サインの表示刷新	西門北側の注意看板
			庭園の解説サインを更新
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例・環境デザインを調査し、特に29年度においてはデジタルサイネージ・庭園等屋外サインのあり方のための参考とした。 ・調査先／厳島神社、呉 大和ミュージアム、てつにくじら館(海上自衛隊呉史料館)、広島市環境局中工場、世界平和記念聖堂、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館、広島平和記念資料館、那覇市壺屋焼物博物館、せんだいメディアテーク 		


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	所期の目標を達成している。サインの最新事例を調査し、好例をサイン・環境デザイン、情報提供・サインデザインの改修の参考とした。 また、関連各部署との連携で名称・ピクト・多言語化等館内表示の標準化を進めている。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	所期の目標を達成している。引き続き30年度計画への反映し、国際化対応への推進が期待される。中期計画初年度は、お客様への効率的かつより意味の伝わる情報提供のあり方(サイン、サイネージ)について、公共空間・商業空間についての最新事例を行うとともに、来る本館リニューアルへ向けた、デザインシステムの具体的な方法論を検討・実験を行った。 次年度は初年度の検討結果に基づき、より実践的なサイン・プランニングを進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】	来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。		
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長 小林牧
【主な成果】	<p>(1)各種ワークショップ、スクールプログラム等を通して、来館者の多様なニーズに沿ったプログラムの開発とその運営に関する研究を行い、既存のプログラムの充実を図るとともに新しいプログラムを開発することができた。スクールプログラムでは、新たに「学芸員体験」を実施。児童生徒が文化財への理解を深め、博物館の意義について学ぶ機会を提供することができた。ワークショップ「トーハク劇場」では、飛鳥時代を舞台とした新しいプログラムを法隆寺宝物館で展開し、低年齢層を対象としたプログラムの研究と実践を重ねることができた。</p> <p>(2)海外からの来館者を主な対象とした日本文化体験プログラムの開発と運営に着手。書、きものをテーマとした気軽な体験型プログラムは多くの参加者を得、好評を博した。(書 42 日間 5838 人、きもの 17 日 367 人)</p> <p>(3)夜間開館の拡充とプレミアムフライデーに対応する新規の有料プログラムとして、限られた人数で研究員のトークをゆったり楽しめる「プレミアムトークサロン」(食事付)を計 2 回実施した。</p> <p>(4)障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、特に聴覚障がい者に向けての UD トーク(音声認識ソフトによるコミュニケーション支援アプリ)の運用実験を行った。</p> <p>(5)他館との連携事業として、上野動物園、国立科学博物館との国際博物館の日記念ツアー「上野の山でキジめぐり」(5 月 14 日)並びに関連展示、親子のギャラリー「トーハクでバードウォッチング」(4 月 25 日～6 月 4 日)を実施。鳥の鳴き声の展示など、ICT 機器を使った新しい試みも展開した。</p> <p>(6)小・中・高等学校の教員を対象とした研修会(7 月 25 日、26 日)、東京都社会科教員を対象とした研修会(9 月 8 日)を行い、意見交換を行った。</p> <p>(7)東京藝術大学との連携事業として、琉球紅型の製作工程模型の製作・展示、それに関連したギャラリートークとワークショップを行った。</p> <p>(8)ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行い、新たに外国人対応をテーマとした研修を取り入れた。</p>		
	 <p>日本文化との出会い 書体験</p>		
【備考】調査	<p>(1)ワークショップ等における参加者アンケート調査 7 回、教員研修会参加者アンケート調査 4 回</p> <p>(2)上海博物館で開催されたシンポジウム「博物館ボランティア」(9 月 24～27 日)で発表を行い、他館の動向を知るとともに、上海博物館等の視察を行った。(鈴木みどり ボランティア室長)</p> <p>(3)国外博物館調査：ニューヨーク メトロポリタン美術館、ブルックリン美術館等(藤田千織 教育普及室長)</p> <p>(4)国内博物館調査：斎宮歴史博物館、葛西臨海水族園(小林牧)、すみだ北斎美術館(小林牧、藤田千織ほか)、竹中大工道具館、三重県総合博物館、大阪くらしの今昔館(小林牧、川岸瀬里)</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	さまざまな教育事業の実践や、ボランティア組織の運営を通じて、博物館教育についての研究を行うことができた。29年度は特に、外国人を主な対象としたもの、夜間開館に対応したもの、有料のプログラム開発など、新たな対象や多様なニーズに応じた教育プログラムの研究・開発を行うことができた。30年度は、こうした方向を維持しながら、プログラムのいっそうの充実を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>今中期では、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムの調査・研究と実践を目指している。未就学児を対象としたキッズデーなど、子どもを対象とした事業、障がい者を対象とした事業の調査・研究は、28年度から継続して行っている。29年度は、新たに外国人を対象とした事業や夜間開館に対応したプログラムに取り組むことができた。30年度は、これまで行ってきた調査・実践を生かして、それらをより充実させていきたい。</p> <p>また、こうした取り組みは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック後にも残るものとして位置付け、しっかりと調査・研究のもと、実践につなげることが重要である。他館の調査やプログラム参加者のアンケート調査なども、継続して行いたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ 凸版印刷と共同で実施する、ミュージアムシアターでの公開に向けた調査研究 ((4)-①-3))
【事業概要】 館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。	
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課
【プロジェクト責任者】	課長（兼情報資料室長） 田良島哲
【主な成果】 当館所蔵の重要文化財「夏秋草図屏風」「風神雷神図屏風」の高精細画像データ取得を行った上で、当館研究員（松嶋）の監修により、ミュージアムシアター上映コンテンツ「風神雷神図のウラー夏秋草図に秘めた想い」を作成し、30年1月4日から4月22日まで公開した。 既成コンテンツ「DOGU: 土偶」をもとに、当館研究員（品川）の監修により「DOGU 縄文図鑑で巡る旅」として、解説動画、パンフレット等を新作した。 (1) 調査概要 凸版印刷が作成したコンテンツ案について、当館研究員が内容の正確性や、映像表現の当否について確認を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 「夏秋草図屏風」「風神雷神図屏風」が表裏にある事実についての解釈を、VR技術を利用して説得力のある視覚表現とすることができた。 (3) 調査研究の成果 作成したコンテンツを当館ミュージアムシアターで公開した。	
【備考】	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	原品では行えない研究上の解釈に基づく復元的な表現をVR技術によって新規性のあるコンテンツにまとめることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	提携先の凸版印刷、館内担当部署と協議を行ってきたが、本事業実施の体制について変化が予想されるため、具体的な枠組みの見直しは30年度に行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英2ヶ国語による鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」のユーザー動向解析を用い、より豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、児童生徒のための鑑賞支援アプリ「学校版 トーハクナビ」のユーザー動向解析を用い、その活用・改善に関わる調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長 小林牧
【主な成果】 (1)スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクナビ」(日英2ヶ国語対応)を継続して配信した。 (2)29年1月より継続して、来館者サービスの一環として、「トーハクナビ」をインストールした端末の貸し出しサービスを行い、その結果、アプリのアクセス数を大きく伸ばすことができた。 (3)27年4月より継続して「トーハクナビ」のユーザーログを集積・解析。来館者の鑑賞体験を深めるための情報の在り方と発信方法、的確なシステムについて、調査・研究を行い、報告書を作成した。 (4)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるアプリ「学校版トーハクナビ」(中学生・高校生対象)の運用を継続した。児童生徒へのアンケート調査およびログの集積を行い、報告書を作成した。 (5)ICTを利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供、助言を行った。 (6)共同研究プロジェクトとして、電通国際情報サービス (ISID) とクウジットの協力を得た。また、3者による研究会を行った。			
【備考】 (1)報告書「「トーハクナビ」利用者の動向」30年3月作成 報告書「学校版トーハクナビ」利用者の動向 30年3月作成 (2)電通国際情報サービス (ISID) とクウジットとの研究会を行った (5回) (3)他館への助言 大阪城天守閣、水戸芸術館等			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>アプリ「トーハクナビ」によるサービスを提供しつつ、ユーザーの動向についてのデータを集積することができた。</p> <p>「学校版トーハクナビ」でも、生徒たちの使用状況についてデータを集積することができた。これらの実績とデータをもとに、運営方法等の改善を試み、オリンピック・パラリンピックに向けた新しい鑑賞ガイドシステムの開発を目指して、具体的な検討を開始した。</p> <p>現在の課題は、日英中韓による情報提供、ならびに展示替えに即した個別の作品解説の提供である。(当館は、展示作品数が膨大かつ頻りに展示替えされるため、「トーハクナビ」では本館、平成館考古展示室に限って個別作品解説を提供している)。</p> <p>30年度は、これらの課題を克服すべく、新しいシステムの開発を目指したい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>2020年東京オリンピック・パラリンピック開催にむけて、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの充実を目指しているが、29年度は28年度から継続して現行のシステムのユーザー動向解析や他館のシステム等の情報収集を行い、それをもとに今後のシステムのあり方について検討することができた。30年度は、31年度中の新鑑賞ガイドシステムの開発を目標として、その計画の具体化を目指す。また、学校団体での来館者に対しては、「学校版トーハクナビ」の提供を継続して行いたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究；新来館者の定着に向けた実証的調査分析（科学研究費助成事業）（(4)-①-3）		
【事業概要】 ミュージアムにおいて新規来館者の取り込みと既存来館者との繋がり醸成を同時に行う鑑賞者開発。この研究・取り込みは我が国ではほとんど行われていないため、より進んでいる欧米の事例研究を元に、我が国への応用方法を検証し、我が国ミュージアムの持続可能性への貢献を目的として実施する。			
【担当部課】	総務部総務課	【プロジェクト責任者】	前係長 関谷泰弘
【主な成果】 30年2月まで1年間滞在したサンフランシスコ・アジア美術館にて、以下の調査を実施し、ミュージアムにおける来館者層の変化、来館者の嗜好の変化、ミュージアムの今後の取り組みの方向性等について、調査分析・発表を行った。 (1) オークランド・カルフォルニア博物館等、鑑賞者開発が盛んなミュージアムの担当者にインタビューを実施 (2) アジア美術館で年間50回以上実施しているイベントで来場者調査を実施 (3) (2)との比較のため、一般来館者への出口調査を実施 (4) 会員、イベント参加者、非来館者の3グループを集め、フォーカス・グループを実施 (5) 来館者と非来館者の違いを分析するため、オンライン調査を実施 (6) 上記にかかる論文発表を実施 (7) 上記にかかる学会発表を実施			
【備考】 (1) 欧米ミュージアム専門家インタビュー 11施設 17人 (2) ミュージアム・イベント調査 21回（4～9月に実施） 605人 (3) 出口調査 2～10月に実施 計290人 (4) フォーカス・グループ 9、10月に実施 3グループ 19人 (5) オンライン調査 10～12月に実施 1,000サンプル (6) 論文発表 1回 6月 (7) 学会発表 1回 10月			
			
研究発表の様子			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の2年目である29年度は、30年2月まで、サンフランシスコ・アジア美術館に在籍し、ミュージアムにおける鑑賞者開発についてイベントを中心に調査分析した。鑑賞者開発は、我が国のミュージアムではほとんど研究・実施されていないため新規性が高く、ミュージアムの社会的な価値を高め、持続可能な存在とするためにも重要な研究である。29年度の研究では、主に米国のミュージアムの現状調査、イベントを中心とした鑑賞者開発の取り組みの効果測定等を実施した。そこからは、イベントへの来館者は若年層が中心だが、既存の来館者が中心で新たな層の開拓にはなっていないことが明らかになった。また、ミュージアムはこれまでの「教育的」なイメージではなく、「楽しめる」イメージの発信が新たな層の開拓に重要であることが浮き彫りになった。今後は、これらの成果を元に我が国ミュージアムへの応用方法を検証していく必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。科学研究費助成事業3年計画2年目の29年度は当初計画通り、サンフランシスコ・アジア美術館に滞在し、現場の担当者と共に研究を推進することができた。最終年度である30年度は、これまでの研究成果をまとめ、我が国ミュージアムへの応用方法を検討し、発表していくことを目指す。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア ボランティアによる、ハンズオン教材等を活用した展示作品理解のための事業に関する調査研究(科学研究費助成事業)((4)-①-3))		
【事業概要】 本研究では、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行う。具体的には、当館において26年9月にスタートした「京博ナビゲーター」の活動を対象とする。ミュージアム・カートやワークショップにおいて、来館者の主体的な興味・関心を引き出すためには、どのような手法や教材がもっとも有用かを検討、実践し、最終的にはその成果を普遍化して他の教育普及活動にも応用できるようにすることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【主な成果】 (1)26年度から活動してきた京博ナビゲーター第1期生(151人)が6月末に任期満了となったため、事業の活動方針から人数を拡充し、7月から208人の2期生を受け入れた。それぞれ月に1回以上来館し、館内で活動を行った。通常時の活動では、ミュージアム・カートに設置されたハンズ・オン教材を用いて来館者と交流した。 (2)第1期メンバーに向けて「卒業式」(1回)を実施、第2期メンバー受け入れのため、説明会(4回)、面談(6回)、基礎講座(8回)を実施、ワークショップ等実施のため研修会(6回)を実施した。 (3)特別展覧会「国宝」の期間中はミュージアム・カートに「金印」「桜ヶ丘銅鐸」を追加した(48日、概算189,000人体験) (4)特別展「海北友松」に関連したワークショップ、「描いてみよう!墨の線」を開館日の毎日実施した(36日、11,508人参加)。 (5)第2期メンバーの人数拡充に伴い、控室の移転・拡充を行った。 (6)3年半活動した第1期メンバーに対して、活動に関する詳細なアンケート調査を行った(90人回答)。 (7)外国人旅行者に対応するため、ミュージアム・カートに日英中韓の翻訳シートを設置した(20種)。 (8)ミュージアム・カートや京博ナビゲーターを含む教育普及活動について他館の視察があった(沖縄県立博物館)。 (9)活動中の見守りは教育室が中心となっているが、土日祝日は目が届きにくく、ボランティアとの意思疎通に影響が出ているため、限られた人員でどのように運営を継続するかが活動開始当初からの課題となっている。 (10)他館への調査(福岡市博物館)を行った。			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の2年目 ・ナビゲーター登録:208人 ・ミュージアム・カート活動日数:225日 ・カートに設置したハンズ・オン教材:17件(うち新規5件) ・ワークショップ「描いてみよう!墨の線」:36日11,508人 ・特別展覧会「国宝」関連特別版ミュージアム・カート「金印」「桜ヶ丘銅鐸」ほか:48日概算189,000人 ・ナビゲーターに向けた研修会:6回 ・卒業式:1回 ・外部視察受け入れ:1件 ・他館調査1件			



描いてみよう!墨の線

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である本年度は、28年度までの事業を継続しつつ、第2期ナビゲーターの受け入れ(説明会・面談・基礎講座)、控室の拡充、教材5件の追加と研修、特別展に関連したワークショップの実施と研修などを行った。合わせて、3年半の活動を終える第1期メンバーに対してアンケート調査を行い、分析のためのデータ入力を行った。30年度はアンケートの分析を行い、それに基づいて活動の改善、成果発表のための準備を行う。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。科学研究費助成事業4年計画では、現状の分析や実践方法の改良を行い、最終的には口頭発表や論文等で成果を広く公表することを目指している。29年度は、メンバーの入れ替えに伴う業務を行いつつ、分析のためのデータ収集を行うことができた。30年度は活動を継続しつつ、活動の分析・改良と成果発表のための準備を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究((4)-①-3))		
【事業概要】 本事業は、高精細デジタル複製を学校に持ち込んで訪問授業を行い、子ども達が文化財に親しむきっかけを作る活動である。当館は21年度に訪問授業を開始し、26年度にはNPO法人京都文化協会・京都市教育委員会と共に「文化財に親しむ授業実行委員会」を立ちあげた。訪問授業で講師をつとめるのは大学生ボランティアの「文化財ソムリエ」であり、子ども達が学ぶだけでなく、実践を通じた大学生の学びの場としても機能している。複製を軸として博物館、教員、大学生が交流することで互いに学び合い、新たな活動領域や価値観を獲得することを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【主な成果】 (1)文化財ソムリエ8期生8名を新たに採用し、計18名が活動した。29年度は21回のスクーリングを博物館にて実施、絵画担当の研究員が勉強会を行ったほか、教育室研究員の助言のもと、文化財ソムリエが授業の進め方、内容を検討した。8月には学校教員との交流会を行い意見交換を行うとともに、過去の授業例の紹介や複製の取り扱いレクチャーを行った。以上の訪問授業に関わる活動のほか、こどもひかりプロジェクトが主催する南相馬市での活動に参加、こどもひかりユース（東北の大学生ボランティア）と共に活動を行った。 (2)スクーリングでは、文化財ソムリエが主体的に考え、行動できるよう議論を促した。また絵画担当研究員が作品解説を行うことで、専門性の高い内容を学んだ上で、授業内容を検討することができた。教員との交流会では、学校教育と博物館教育の違いを再認識するとともに、互いのスキルを活かす方法について有意義な意見交換を行うことができた。また、こどもひかりプロジェクトへの参加は、他地域の大学生や他分野の博物館職員との交流の場となり、文化財ソムリエのモチベーションを大いに高める効果があった。 (3)スクーリングでの準備に基づき、京都市内への訪問授業7回を行った。また、交流会に出席した教員や他館職員による複製を活用した授業が7回実施された（京都市立2件、京都府内2件、大阪府1件、三重県1件、和歌山県1件）。また、大政奉還150年を記念して行われた「第33回京都市中学校総合文化祭」の会場では、文化財ソムリエによる「おしゃべり鑑賞会」を実施した。 (4)複製を使った活動や鑑賞教育に関して、調査4件（東京藝術大学 大学美術館等）を行った。			
【備考】 ・文化財ソムリエ：18人 ・スクーリング：21回 ・教員との交流会：1回13人 ・訪問授業：7回626人（小学校6回、中学校1回） ・教員・他館職員による授業7回548人 ・おしゃべり鑑賞会：1回29人 ・こどもひかりプロジェクトの体験イベント：1回120人 ・他館調査：4件 ・助成金：平成29年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業 3,296,000円 ・記事：「公募による大学生・大学院生が〈文化財ソムリエ〉として訪問授業」『ミュゼ』第117号、アム・プロモーション、4月			

文化財ソムリエによる
訪問授業


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本活動はノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、年々内容が深まっている。また交流会参加の教員や他館職員による授業・プログラムの実施も定着しつつある。29年度も京都市内だけでなく、近隣他府県でも活動を展開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。21年度より開始した高精細複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容を深めると共に活動も多様になっており、外部との協力・交流も広がりを見せているため、中期計画は順調に達成している。 ただし、外部からの希望は増える一方であり、研修を行った教員や他館職員による授業を行うなど、要望に応えるべく現在の体制でできる最大限の活動を行っている。研究と事業が密接に関連する調査研究であるため、事業面での人員不足が大きな課題である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】			
(1)奈良市教育委員会との連携事業による世界遺産学習の一環として、奈良市在住の小学生の親子を対象とする新たな教育プログラム開発に向けて検討を重ね、仏像館見学や仏像クイズを通じて地域の文化遺産について学ぶ「親子で学ぼう博物館」を7月26・27日に実施した。			
(2)奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESD(持続的開発のため教育)コンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループにおいて、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。			
(3)同ワーキングで提言された展示と密接に関連するクラフト教材活用及びワークショップの実践として、特別展「源信」関連の親子ワークショップ「つくってわかる!立体地獄絵」を奈良教育大学との連携事業として開催し(7月30日)、小学生の親子が立体地獄絵を自由に組み立てるという体験を通じて、地獄・極楽をテーマとする展覧会への理解を深めることができた。			
【備考】 ・「世界遺産学習」に来館した学校団体52校(奈良市世界遺産学習32校、その他20校) ※平成28年度実績:49校(奈良市世界遺産学習25校、その他24校)			

親子ワークショップ「つくってわかる!立体地獄絵」実施風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館における教育普及プログラムの重要な柱である「世界遺産学習」については、奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESDワーキング等で内容を随時検証しながらその継続性と質の確保に努めるとともに、実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大した結果、合計52の学校団体(奈良市32校/その他20校)を受け入れ、28年度を上回る実績を達成した。さらに親子ワークショップ「つくってわかる!立体地獄絵」や親子対象の教育プログラム「親子で学ぼう博物館」を実施し、「世界遺産学習」の地域学習・家庭学習への浸透というESDワーキングが提唱する理念を実践することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏像を主なテーマとしながら奈良の歴史、伝統文化に関する教育普及事業として継続的に行ってきた「世界遺産学習」は、全国から来館する小中校生を対象を拡大するなど、一定の成果を収めている。その内容の充実・向上に向けて継続的な検討を行っており、30年度から新たに導入する立体模型やワークシートの利用についてESDワーキング等の場で協議を重ねた。今後は「世界遺産学習」を地域学習・家庭学習に普及させることを目的として、地元の教育機関と連携しながら博物館の展示内容に密着した小中学生の親子を対象とする教育プログラム、ワークショップの一層の充実を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア NHKと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターでの映像公開に向けた調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 当館では開館以来、世界で唯一の常設設備として8Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を公開してきた。4Kの4倍の密度を有する8Kが持つ臨場感あふれる優れた映像美を生かした、魅力的なコンテンツ作りを行う。多言語化などの新しいシステムの調査研究を推進する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 森實久美子
【主な成果】 近年増加する外国人観覧者に対するサービス向上のため、展示室同様、スーパーハイビジョンシアターにおいても多言語化対応を実施した。経費や利便性などを考慮し検討した結果、映像と同期させた多言語のナレーションを準備し、個別のヘッドホンで聞く方法を採用した。日本語原稿を元に英語・中国語・韓国語の翻訳原稿を作成し、ナレーションの録音までを行い、導入の準備がすべて整った。 また、新しいコンテンツ作成に向けて、館内で協議を行った。8Kの特徴を最大限に発揮することのできるコンテンツあるいは作品は何か、その候補として当館が所蔵する王羲之尺牘の摸本「妹至帖」など複数の作品について検討した。新たなコンテンツ作りをNHKエンジニアリングとともに進めていくのに先立って、作品の担当者を主として詳細な情報収集を行うとともに、コンテンツのストーリー作成の準備を行った。			
			
導入予定のヘッドホン		多言語化対応の案内表示	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	8K映像で文化財の魅力や謎に迫るスーパーハイビジョンシアターは、当館を訪れる外国人観覧者にも人気を得ているが、日本語の上映で多言語化は喫緊の課題であった。29年度は、具体的かつ実践的な協議・検討を行い、その導入にこぎつけた。30年度には、シアター入口での看板等の設置やHP掲載によって観覧者への周知を徹底し、利用者の増加につなげたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の内容を展覧事業・教育普及活動に反映するという中期計画の達成に向けて、近年急増する外国人観光客へのサービスは必須である。日本語に加えて英中韓の全4ヶ国語に多言語化されたことは、普及の観点において非常に大きな一歩といえる。新コンテンツの作成準備も並行して行い、本プロジェクトを着実に推進していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】	特別展をより楽しくわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。29年度は「タイ～仏の国の輝き」展、「世界遺産 ラスコー展」、「王羲之と日本の書」展の3つの特別展において、教育普及プログラムを実施する。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 西島亜木子
【主な成果】	<p>過去の特別展のアンケート結果や、来館者調査に基づき、特別展の内容や来館者層に応じた効果的な教育普及プログラムを実施した。</p> <p>(1) 「タイ～仏の国の輝き～」展では、「ぜったい知りタイ」「もっと知りタイ」と題したわかりやすい解説パネルを設置した。内容は、日本人になじみのないタイの仏教（上座部仏教）やタムブン（徳を積むこと）のほか、出家の儀式、タイ人が身につけているお守り、曜日仏（生まれた曜日の仏像）など。また、僧侶の托鉢風景の動画や托鉢僧に渡す食事の食品サンプルの展示、曜日仏の展示を行った。さらに、来館者が、自分が生まれた曜日を調べるための体験コーナーも設置し、自分の曜日仏がわかるようにした。</p> <p>(2) 「世界遺産 ラスコー展」では、夏休み期間中ということもあり、子ども向けのプログラムを充実させた。展示室内のプログラムとして子ども向けの解説パネル、及びマンモスの牙を触る体験コーナーを設置した。また、劇団員扮するクロマニヨン人の男女が会場内に登場し、来館者とコミュニケーションを取りながら展示されている道具類の使い方を実演するイベント「クロマニヨン人現る!!」を夜間開館に合わせて4回実施した。これに先立ち、架空のクロマニヨン語を創作し、「はじめてのクロマニヨン語」というクロマニヨン語の使い方を紹介する動画を制作し、当館ホームページ上に掲載した。さらに、夜のイベントとして、「ナイトミュージアム 夜の洞窟探検」を実施。閉館後の展示室に来館者が探検に行き、クロマニヨン人や考古学者と遭遇、彼らがクイズを出しながらクロマニヨン人の生活や壁画について学べる内容とした。</p> <p>文化交流展関連イベント「全国高等学校歴史学フォーラム」の「実験タイム」で、高校生が作った弓矢とクロマニヨン人の投槍器を使って比較する「高校生 v.s.クロマニヨン人-今晚のごちそうを狩れ」を実施した。</p> <p>(3) 「王羲之と日本の書」展では、読むことよりも見ることに重きを置いた書の楽しみ方を紹介するプログラム「楽しみま書!」を実施した。技術と人を柱とし、イラストを交えてわかりやすい内容とした。また、平仮名は縦に書くことを前提に生まれたことを実感してもらうため、実際に平仮名を縦書き、横書きでタブレットに書く体験コーナーや、墨の濃淡を立体化し、触ってもらう体験コーナー、墨を磨って文字を書く実演をする動画も会場内に設置した。ワークショップでは、連綿（つづけ字）の筆の動きを針金で作成し、しおりにする「つづけ字しおりワークショップ」も開催した。</p>		
【備考】			



イベント「クロマニヨン人現る!!」


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室内のプログラムについてのアンケート結果では「タイ～仏の国の輝き～」展、「世界遺産 ラスコー展」とも87%が「楽しめた」「とても楽しめた」と回答しており、高評価を得ている。ラスコー展のイベント「クロマニヨン人現る!!」は当館初めての試みであったが、集客が難しい夜間開館時であったにもかかわらず、多くの来館者が訪れた。老若男女を問わず好評で、今後別の展覧会や当館の文化交流展での応用も期待できる。「王羲之と日本の書」展では、過去の展覧会の実績を踏まえ、タブレットに文字を書く体験コーナーや、「つづけ字しおりワークショップ」などの当館オリジナルのプログラムを実施、好評を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アンケート結果からもわかるとおり、28年度に引き続き特別展での教育普及プログラムは高い評価を得ている。それぞれの展覧会に想定される年齢層やニーズに十分こたえることができたと言える。29年度は劇団員とのコラボレーション企画など新たな試みも実施し、来館者の満足度、期待度も高い。それにより、中期計画における「教育普及活動に関する調査研究」のうちの教育普及事業については充分達成できたと考える。30年度以降も、来館者のニーズに沿ったプログラムを調査研究していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館の環境保存に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 当館による文化財の活用に伴い、保全の必要性が生じる保存環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上に結び付けることを目的として実施する事業。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長（兼書跡・歴史室長） 富坂賢
【主な成果】 (1) 展示環境に関する調査研究 ・ 収蔵品の国内外の貸与先等の施設環境調査を実施した。文化財に適した展示環境を実現するための協議や改善作業を通じて、施設毎に異なる様々な条件下における文化財の展示環境保全技術に関する事例研究を実施した。 ・ 特に、バンコク国立博物館においては、高温高湿環境下で、日本美術を中心とした文化財を安全に展示するための技術を現地のスタッフと共同して構築することができた。 (2) 展示ケースの開発 ・ 当館が新規に導入する展示ケースに新方式のマグネット式小型 LED 照明器具及び広発光面積を有する OLED 照明器具を構造的に取り入れた設計を実現化した。			
			
バンコク国立博物館における協議			
【備考】 ・ 国内調査先：長崎県立歴史文化博物館、朝倉市秋月郷土館、峰町歴史民俗資料館、いわき考古資料館 ・ 国外調査先：バンコク国立博物館(タイ)、ニューヨークジャパソサエティギャラリー(アメリカ)、グラスバウハーンフランクフルト工場(ドイツ)、プーシキン美術館(ロシア) ・ 学会発表：「東京国立博物館における展示ケースの進化」(日本展示学会)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財を積極的に公開活用することは社会的なニーズに対応するものであり、それを安全に行うための技術は博物館が研究しなければならない。本事業は上記を踏まえたものであり、さらに魅力的な展示を実現するために最新の技術を用いた展示ケースを積極的に開発する点等で先駆的な内容も併せ持つものである。研究成果の一部は学会発表を行い、様々な研究者との議論によって研究内容をより一層充実化させるための取り組みも行った。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の活用は今後も継続して実施あるいは実施が期待されるものと予想される。国内外における多くの施設で当館の収蔵品が公開活用されるためにも貸与先等の展示環境調査及び必要に応じた改善技術の研究が求められる。29年度は研究継続のための事例研究を数多く行うことができた。30年度も同様の調査研究を継続し、文化財の安全な活用を目指す。具体的には特に海外への文化財の貸与に伴う環境調査及び改善に重点を置いた研究活動を行う。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築 (科学研究費助成事業) ((4)-②-1))		
【事業概要】 輸送機関、梱包資材、文化財が輸送中に発生する振動に対してどのような応答を示すのかを調査し、科学的根拠に基づく梱包設計を行うシステムを構築する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	環境保存室長 和田浩
【主な成果】			
<p>(1) 【学会発表】「Study on transport environment of cultural properties via ship in Japan」28th IAPRI World Symposium on Packaging, Lausanne(5月1日)</p> <p>(2) 【学会発表】「文化財の国内長距離輸送時の各輸送工程において発生した加速度の評価」日本文化財科学会第34回大会(6月10日)</p> <p>(3) 【学会発表】「キトラ古墳壁画輸送時に発生した加速度の解析」文化財保存修復学会第39回大会(7月1日)</p> <p>(4) 【学会発表】「海上輸送を経由する文化財輸送環境の評価」日本包装学会第26回年次大会(7月11日)</p> <p>(5) 【講演】「マルチボディダイナミクスを活用した文化財輸送環境のシミュレーション」2017Japan Altair Technology Conference(7月25日)</p> <p>(6) 【学会発表】「A Case Study on Transport Environment of Cultural Properties by Ship」東亜文化遺産保護学会第6次国際学術研討会(8月25日)</p> <p>(7) 【論文】「キトラ古墳壁画の輸送-輸送中に発生した加速度について」月刊文化財649号(10月1日) 「美術品輸送専用車両による輸送環境のシミュレーションに関する基礎的研究」全日本包装技術研究大会(11月16日)</p> <p>(8) 【論文】「美術品輸送専用車両」日本包装学会誌26(6)(12月1日)</p> <p>(9) 【論文】「文化財の梱包」日本包装学会誌26(6)(12月1日)</p> <p>(10) 【論文】「美術品梱包輸送技能取得士」日本包装学会誌26(6)(12月1日)</p> <p>(11) 【学会発表】「文化財輸送環境の最適化に向けた基礎的研究」日本機械学会第26回交通・物流部門大会(12月4日)</p> <p>(12) 【論文】「キトラ古墳壁画の輸送環境解析から見た文化財の輸送および荷役作業の評価に関する考察」考古学と自然科学75(30年2月15日)</p>			
船舶輸送環境の調査			
【備考】 科学研究費助成事業4年計画の2年目 学会発表等：7回、論文：5本			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である29年度は、学会発表と論文発表を重点的に行った。特に輸送機関上で発生する振動や衝撃の解析についての調査研究及びその成果報告について充実させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、②その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。全体の研究計画は、輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答、文化財(素材、模造品など)の振動応答をそれぞれ調査し、最終的にそれらの情報を集積した科学的な梱包設計システムの基礎を構築するものである。28年度は輸送機関上で発生する振動データについて相当数を収集することができた。29年度は、輸送機関上で発生する振動調査を引き続き行い、その調査結果をとりまとめ、成果発表を行った。30年度以降は文化財の素材や梱包資材の振動応答について調査を実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究（科学研究費助成事業）((4)-②-1)		
【事業概要】	大規模災害時における文化財等の被災状況の調査及び情報収集、博物館施設等における空気汚染物質調査、博物館施設等における資料保存環境管理の実態調査を行う。それらの調査結果を基にして、被災博物館施設等における空気汚染環境を改善し、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を実施する。		
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	環境保存室長 和田浩
【主な成果】	<p>(1) 石巻市の旧湊二小学校(被災文化財一時保管施設)の調査と現地協議を行った。これまでのモニタリング結果から、施設が現状直面する空気環境に関する課題を絞り、それを解決するための手法の具体化を行った。(4月24日)</p> <p>(2) 「乾燥方法・災害種別の異なる被災水損資料の揮発成分について」と題し、研究グループが文化財保存修復学会で研究成果発表を行った。(7月1日)</p> <p>(3) 仙台市で被災文化財一時保管施設環境に関する協議会を開催した。旧湊二小学校に施工した設備の稼働後の環境状態についての報告を行い、今後の運用についての意見交換を行った。(10月16日)</p>		
【備考】	科学研究費助成事業5年計画の4年目		



旧湊二小学校(石巻市)における現地協議

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業5年計画の4年目である29年度は、宮城県石巻市における被災文化財の一時保管施設の空気環境調査結果をとりまとめ、同環境保全のための設備の取り付けと稼働を開始した。29年度は、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を重点的に実施する予定であったところ、上記のとおり計画どおりに実行することができた。30年度は29年度の事業実施後の環境計測結果から、29年度の実施項目を客観的に評価する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、②その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。全体の研究計画は、大規模災害における被災状況の調査、博物館施設等における空気汚染物質調査、資料保存環境管理の実態調査を行い、被災博物館施設等における空気汚染環境を改善し、安定した資料保存環境を構築するための技術や手法に関する調査研究を実施するものである。29年度の成果によって、30年度に被災博物館施設等における空気汚染環境を改善する効果が得られれば、30年度には安定した資料保存環境を構築するための技術や手法についての提案を取りまとめることができる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究((4)-②-1))		
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊 保存科学室長 降幡順子
<p>【主な成果】</p> <p>(1)情報の収集と調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 29年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、180件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 当館研究員により11回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 <p>(2)情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> 28年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書(報告書)」に基づき、1,870件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 <p>(3)情報の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 26年度に修理が完成した文化財141件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第15号(30年3月31日発行)に掲載した。 修理時の調査により発見された銘文25件を「銘文集成」として同書に報告した。 			
			
科学調査の様子		『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第15号(部分)	
<p>【備考】</p> <p>(1) データ収集件数 180件 巡回回数 11回</p> <p>(2) データベースの追加更新件数 1,870件</p> <p>(3) 報告書 1冊(修理報告141件、銘文報告25件を含む)</p>			


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施してきた事業であり、効率性・正確性を担保しつつ順調に実施されている。『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第15号は、30年3月に刊行し、諸研究機関に送付を済ませている。30年度計画も29年度に準じて実施するが、得られた知見を元にした研究の活性化が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、法人化以前から継続してきた事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、有形文化財の修復や模写にかかる調査研究の情報を継続的に蓄積していく所期の目標は順調に達成している。課題となっていた『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』の刊行形態を他業務との関係から再検討し、修復次々年度に報告刊行という現行の態勢で実施していくこととした。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財の保存・修復に関する調査研究((4)-②-1))		
【事業概要】 修理を実施している文化財について、その保存修復に関する調査研究を修理事業者と協力して行い、また、復元模写事業を行うことで文化財の保全と公開に役立てる。あわせて、調査研究の過程で得ることのできた貴重な情報を蓄積し、学術的な利用のみならず、最適な修理方針の策定など、今後の保存修復事業にも活用する。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室 学芸部保存科学室 学芸部美術室	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊 保存科学室長 降幡順子 美術室研究員 井並林太郎
【主な成果】			
<p>(1)29年度、所蔵者の協力を得て修理所内工房と実施した科学分析調査は、作品の内部構造調査としてはFPD(フラットパネルディスプレイ)を用いた透過X線撮影3回、I.P(イメージングプレート)を用いたX線透過撮影7回、X線CT撮像2点を実施した。作品の材質調査としては蛍光X線分析調査19件、微細構造調査としてはデジタルマイクロスコブ撮影1件である。</p> <p>(2)システムの整備の一環として、新たなX線透過撮影装置の使用を開始し、詳細なデジタル画像取得が可能となった。</p> <p>(3)博物館と模写修理事業者(六法美術)とによって、当館館蔵若狭国鎮守神人絵系図の復元模写を5ヵ年計画で実施することを決定し、作品の予備調査を行った。</p> <p>(4)学叢39号に井並林太郎「若狭国鎮守神人絵系図—修理報告を踏まえて—」(5月)を近年の修復事業の成果を取り込んで執筆し、(2)の事業実施に向けた研究を進めた。</p> <p>(5)国宝「不動明王像(黄不動、曼殊院蔵)」の当所での修理過程における御衣絹加持の痕跡の発見について、修復を担当した岡墨光堂とともに8月7日に記者発表を行った。</p> <p>(6)東京文化財研究所・佐賀大学共同研究シンポジウム「日本における染織文化財の保存」において、「京都国立博物館の染織品の保存と修理計画」に関して発表を行った。</p> <p>(7)国宝 四天王寺所蔵懸守(木製絹貼)7点についてX線CT撮像を実施した結果、表面を覆う錦の木質部への差し込み長さや木材部分の木取り、接合箇所とその手法、納入品に関する多くの知見を得ることができたことから、今後の保存修復にも有用な情報を得ることができ、その成果について30年2月9日に記者発表を行った。</p>		 <p>復元模写作業</p>	
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> 論文：井並林太郎「若狭国鎮守神人絵系図—修理報告を踏まえて—」『学叢』39号、京都国立博物館、5月 論文：大原嘉豊「国宝 絹本著色不動明王像(黄不動)〔京都・曼殊院蔵〕修理時に発見された御衣絹加持の痕跡に関して」『月刊文化財』650号、第一法規、11月 発表：山川暁「京都国立博物館の染織品の保存と修理計画」東京文化財研究所・佐賀大学共同研究シンポジウム「日本における染織文化財の保存」、7月29日 外部資金の導入 若狭国鎮守神人絵系図復元模写…清風会研究支援経費 			

年度計画に対する総合的評価

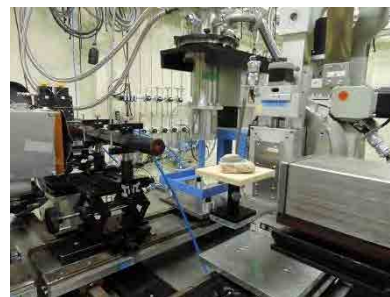
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	29年度は、若狭国鎮守神人絵系図を新規5ヵ年事業として実施することとなった。また、この事業の実施に備え、近年の修理成果をもとに論文を公刊した。また、従来から実施している展示前状態調査や文化財修理所各工房からの修理前・後調査依頼を受け入れ、透過X線撮影、X線CT撮像、顕微鏡観察、蛍光X線分析等の共同調査をおこなった。修理前調査では、文化財の構造調査、材料調査を実施し多くの情報を修復技術担当者と共有することができ、修理方針の策定などに役立てた。29年度から設置された保存科学室とも連携し、今後も継続を図りたい。また、修復及び調査で得られた知見につき記者発表を行った点も注目に値すると考える。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、有形文化財に関連する調査研究について順調に成果を上げている。27年に始めた復元模写事業は研究や一般啓蒙上の効果が高いため継続事業化を進めており、当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の一部の復元模写を実施することとなった。また、保存科学室設立以降、修復の場以外も含めた科学調査は質量共に増加しており、30年度以降、体制を見直し、分析情報の継続的な蓄積・管理とともに、より迅速な情報公開をはかるよう改善をはかりたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	鉛釉陶器の鉛同位体比值と金属元素の価数から考察する生産地と焼成技術の特徴に関する調査研究(科学研究費助成事業)((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究で着目する鉛釉陶器について、7世紀後半から8世紀初頭の最も古い国産鉛釉陶器は、単彩釉・赤褐色・軟質胎土であり、その後、多彩釉・白色・軟質胎土の奈良三彩、さらに単彩釉・青灰色・硬質胎土が主流の平安緑釉へと、釉薬・胎土の色調などは変化しながら、生産は11世紀後半頃まで継続してゆく。本研究で着目する「白色・軟質」胎土の焼成技術は、初現期の奈良三彩からすでに認められるものの、当時の土師器や須恵器、さらに中国における唐三彩の焼成技術とは異なっている。そこで鉄分の多い粘土を用いた白色軟質胎土の焼成技術の特徴と系譜について究明することを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室長 降幡順子
【主な成果】 29年度は、28年度調査で新たに判明した軟質度胎土のみにみられる鉄の価数の同一性についてさらに検証するために、比較試料を製作し、これらと藤原京・平城京から出土した施釉陶器・瓦資料50点について、非破壊分析による胎土に含まれる鉄の価数の分析を高輝度光科学研究センター(SPring-8)のBL01B1を使用して実施した。さらに胎土に含まれる重元素の調査のために、窯跡出土須恵器および藤原京出土須恵器・土師器約150点を高輝度光科学研究センター(SPring-8)のBL08Wを使用して調査を実施した。これらから7世紀から8世紀に都城へ搬入された土器・瓦の胎土に関する特徴を明らかにするための基礎的な情報を得ることができた。さらに、釉薬の鉛同一体分析を軽継続して実施し、8世の奈良三彩および施釉瓦・磚に関するデータの蓄積をおこなった。これらの結果は、28年度調査結果および29年度調査で実施した蛍光X線分析結果と総合的に比較検討し、研究途上ではあるが、成果の一部を奈良文化財研究所紀要に執筆し、情報の早期公開に努めた。			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の2年目である ・降幡順子・神野恵「縄生廃寺出土唐三彩の化学分析」『奈良文化財研究所紀要』2017、pp.60-61、6月 ・今井晃樹・神野恵・降幡順子「平城京出土の奈良三彩陶器と施釉瓦磚」『奈良文化財研究所紀要』2017、pp.280-285、6月			



施釉瓦の非破壊分析調査
(Spring-8・BL01B1)


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業4年計画の2年目である本年度は、28年度調査で新たに判明した軟質度胎土のみにみられる鉄の価数の類似性について検証するために、比較試料の調査を実施し、さらに7世紀から8世紀の施釉瓦・磚、奈良三彩の調査を継続した。特に29年度は胎土分析を重点的におこない、高輝度光科学研究センター(SPring-8)のBL01B1およびBL08Wを使用し、鉄の価数と重元素に関する分析調査を実施した。特にBL01B1では文化財を非破壊で分析調査を実施することができ、独自性・発展性の観点からも文化財の科学調査に対して新しいアプローチの一つとなりうると考える。また一般の研究室内装置では分析不可能な手法を用いて調査を実施することができた成果は重要であるといえる。次年度計画では、さらなる資料の分析調査と詳細なデータの蓄積を図るとともに、成果の公表へ向けて準備を始めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、その他の有形文化財に関連する調査研究を実施した。これまでの調査から、鉄の価数と鉄含有量および胎土色調に関しては、軟質胎土と埋蔵環境の相関について調査を進めることができた。初現期の奈良三彩については、7世紀から8世紀の都城周辺の須恵器窯出土品や唐三彩の調査を実施するなど、進捗状況は順調であるといえる。 4ヵ年計画の3年目となる30年度は、継続してデータの蓄積を図るとともに、取得したデータ解析を進め、最終年年度の研究成果の公表に向けて情報発信に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。 (1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3)文化財害虫トラップの設置及び回収			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】			
<p>(1)28年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで24時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても、28年度と同様に温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。</p> <p>(2)正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。</p> <p>(3)28年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2ヵ月に1回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することでIPM（総合的有害生物管理）を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し、害虫の防止を図るとともに、施設周囲に害虫忌避剤の散布を行った。また、清掃と防塵マット交換を定期的に行い、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。</p>		 <p style="text-align: center;">温湿度センサーの設置状況 被</p>	
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。 (1)展示室内温湿度調査：163箇所 (2)展示ケース内ほか粉塵調査：25箇所 (3)文化財害虫生息状況調査：150箇所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：12回開催 			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実にやっている。また調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。データの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えたい。なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査を行う。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では継続したモニタリングや調査を行っている。30年度以降も収蔵庫や展示室等において各分野の文化財に対応する最適な保存環境を構築すべく継続したデータの蓄積を着実に実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1)		
【事業概要】 本事業では、以下の3点の内容について実施した。 (1)修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態に関する科学的な調査を行う。その内容を保存カルテとして記録する。 (2)館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るための科学的な調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。 (3)修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要などへの掲載等を行いデータの蓄積を実施している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)28年度に引き続き、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報を踏まえ保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2)28年度に引き続き、館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果を踏まえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3)28年度に引き続き、修理中の木製文化財から得られた木片について、共同研究の一環として京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施し樹種を同定した。また、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い、情報化と整理を実施した。26年度分以降の成果については、文化財保存修理所修理報告として新たに刊行する予定。			
			
館内鑑査の様子			
【備考】 ・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表している。 (1)保存カルテ作成件数：総計112件 (内訳 絵画：38件、書跡：18件、彫刻：20件、工芸：16件、考古：20件) (2)修理調書作成件数：総計8件 (内訳 絵画：1件、彫刻：4件、工芸：2件、考古：1件) (3)材質調査及び銘文調査件数：3件 (内訳 材質調査実施件数：3件)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、修理に有用な成果が得られた。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。30年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するとともに、将来の文化財修理に役立ていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の2点の内容について実施した。 (1)館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査(X線透過撮影・蛍光X線分析)を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。 (2)文化財修理所での修理中の文化財については、当館の研究者と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)29年度春にX線CTスキャナを新たに導入し、運用を始めた。 館蔵・寄託の文化財(彫刻や漆工品など)の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。また、絵画の彩色材料である顔料に関する情報を得るため、蛍光X線分析装置を用いた分析を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。 (2)当館研究者と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影及び蛍光X線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となった。特にX線CTスキャナの導入により、修理前や修理中に調査を行うことができるようになったことで、彫刻作品や漆工品のより安全な修理に役立てることができた。			
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査回数：6件(X線透過撮影調査を含む。28年度はX線透過撮影のみで5件) 蛍光X線分析実施回数：1件(28年度実施回数：3件)			



蛍光X線分析の様子

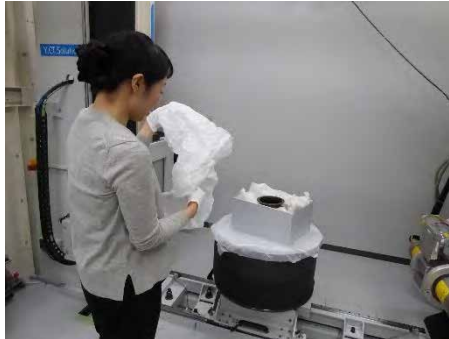

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度に引き続き、修理等の際に、内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。特に29年度はX線CTスキャナを導入したことにより、X線透過撮影より詳細に内部構造や納入品を把握できるようになり、調査の質が大幅に向上した。光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに、修理方針の策定にも役立てている。30年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年春にX線CTスキャナを導入し、彫刻や漆工品などの修理に活用し始めた。修理所での修理内容を踏まえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査も併せて行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。30年度以降も調査を継続し、データの蓄積を図ることにより、安全で適切な文化財修理に反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】	文化財の材質・構造等に関する共同研究		
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長(兼環境保全室長) 木川りか
【主な成果】	<p>(1) 金工品(水指)の構造、科学調査 金工品(水指)の構造や材質に関しての知見を得るため、作品担当者と共同で科学調査を行った。X線CT、三次元計測のほか、表面の蛍光X線分析を行い、目視ではわからなかった補修痕が胴部の下方にあることがわかった。また球状の足は別の材を用いて後から付加したこともわかった。今後これらのデータを用いて3Dプリンターによるレプリカ作製を行う予定である。調査結果に基づいて30年度に作品所有者の研究紀要で成果を公表する予定である。</p> <p>(2) 陶器の構造、材料調査 陶器についてX線CTによる構造調査を行い、本体部分に細かい空隙が観察された。また、蛍光X線分析では、修理された部分の白い色材では、別の白の部分とは異なる元素が確認された。</p> <p>(3) 屏風の骨組みの調査 大型の屏風の堅牢性について情報を得るため、骨組みを透過X線撮影により調査し、木組みについては建造物で行われているような珍しい木組みが採用されていること、材料についても、外枠部分と内部の骨では異なる木材が使用されていることなどの知見を得ることができた。</p> <p>(4) 考古金工品の科学調査 作品担当者と共同で金工品の蛍光X線分析と拡大観察を行い、金の部分についてアマルガム法による鍍金ではなく、金を貼ったものであることを示唆する知見が得られた。</p> <p>(5) 28年度の研究成果の発表 28年度の共同研究に関する成果を日本文化財科学会にて発表した。</p>		
	 <p>金工品のX線CTによる調査風景</p>		
	 <p>陶器の蛍光X線分析による調査</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・X線CT調査件数：46件・調査回数373回 ・3次元計測調査件数：20件・調査回数86回 ・28年度の研究成果： <ul style="list-style-type: none"> 学会発表 X線CTスキャナを用いた国宝「初音の調度」の構造調査-小櫛箱、乱れ箱、湯桶の構造研究-日本文化財科学会34回大会(6月10日、11日) 		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は調査件数として、66件の文化財調査を実施することができ、金工品、陶器、屏風、考古金工品などで目視ではわからなかった製作技法にかかわる情報や、修理痕に関する情報を得ることができた。これらの情報は個々の作品の理解のみならず、それぞれの分野の作品に関する深い理解の一助となるため、30年度も実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、これまで様々な文化財の調査を実施しており、構造や製作技法などについての知見を蓄積してきている。作品の個別にはそれぞれ興味深い成果が出ており、今後は得られてきたデータをもとに、作品群ごとに共通してみられる特徴などをまとめていき、その成果をわかりやすい形で公表し、一般の方々にも興味をもっていただけるようにしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館における文化財保存修復に関する研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】	当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装演技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。また、「文化財をまもりつたえる」という博物館の役割について、作品展示を通して一般の方々に知って頂く機会を設ける。		
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【主な成果】	<p>○「文化財保存修復研修」 実施日：8月28日～9月1日の5日間 参加者：佐賀大学2名、広島市立大学1名の計2大学3名 内 容：屏風の下張り製作 協力者：一般社団法人国宝修理装演師連盟 国の選定保存技術保存団体（装演修理技術）であり、当館文化財保存修復施設の利用者でもある一般社団法人国宝修理装演師連盟からの協力が得られたことにより、実際に屏風の下張り製作を行い実践的な研修の場を設けることができた。本研修の実施により、修理技術者の育成に寄与すると共に、参加学生の文化財保護への理解を深めることができた。</p> <p>○常設展示「文化財をまもりつたえる博物館」 実施日：4月1日～30年3月31日の通年 展示場所：文化交流展示室 第1室 展示替回数：7回 博物館の役割については、これまでバックヤード見学でしか知ることができなかったが、展示室において本テーマに沿って作品を展示することにより、より多くの方々に博物館の役割を知って頂く機会となった。展示は、28年度に引き続き、文化財をまもりつたえてきた「保存箱」を象徴の展示とし、「修理」、「模写模造と科学調査」、「収蔵」、「環境」の4つのテーマで展開した。</p>		
【備考】			



「文化財をまもりつたえる博物館」展示風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>公共の財産である文化財を後世に伝えていくためには修復技術者の育成が不可欠であり、育成は継続的に行う必要がある。国宝修理装演師連盟の協力を得て毎年実践的な研修を少人数で継続している本研修は、適時性や継続性が高いため評価できる。</p> <p>また、博物館の役割についての展示は、同様な展示を通年で行っている博物館は他に極めて少なく、バックヤードツアーと共に当館の特色であり評価できる。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画のとおり、文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究を実施、及び将来的に展覧事業や教育活動等に結びつく基礎的な調査研究を実施した。</p> <p>「博物館の役割についての展示」及び「バックヤードツアー」の双方の事業とも好評を得た。30年度以降は事業を適宜取捨選択し、質を上げて継続していきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館におけるIPM（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、研究会の開催、及び地元NPO法人やボランティア、大学・専門教育機関・地域文化施設の連携によるIPM研修プログラム確立を通じ、IPMの社会的理解度を深めつつ、博物館等におけるIPMを軸にした自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長（兼環境保存室長） 木川りか
【主な成果】			
<p>(1)文化財保存修復学会主催、当館共催で文化財保存修復学会公開シンポジウム「博物館におけるIPMのこれから」を開催した（4月8日）。</p> <p>(2)カナダとイタリアからそれぞれ文化財施設の虫害対策の専門家を招聘するとともに、東京文化財研究所、千葉県立中央博物館からも講演協力を仰ぎ、IPMセミナーを実施した（10月25日）。国内の博物館、美術館、図書館関係者のみならず、館内でのIPM事業にかかわるスタッフやNPO法人やボランティアあわせて146名の参加を得た。</p> <p>(3)IPM研修を28年度に引き続き実施した（10月26日、27日）。28年度から、各施設の職種の異なる2名1組（総務系と学芸系など）での参加を原則としている。その結果、自館に戻ってからIPMを実践していく上で、研修で得た知識を共有し、IPMを進めやすくなったと考える。29年度のIPM研修では、募集定員24名のところ北海道から九州まで全国54の施設から96名の応募があり、34名が受講した。28年度に引き続きIPMへの関心の高さがうかがえた。また、無記名でのアンケート結果も、「とても良かった」と最高の評価で回答した参加者が全体の75%以上と、非常に満足度が高い結果となった。</p>		 <p>IPMセミナーにおけるイタリアの チェザーレオ・ウバルド氏の講演</p>	
<p>(4)館内向けIPM研修の開催 館内スタッフ、国立文化財機構内希望者向けのIPM研修をはじめの試みとして実施した（5月24日）。</p> <p>(5)環境ボランティア活動として、館内ウォッチングや博物館科学課スタッフによる小話会、昆虫インジケータ組み立てなどの活動を実施した。</p>		 <p>IPM研修風景</p>  <p>環境ボランティア活動での 館内ウォッチング風景</p>	
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・IPMシンポジウム（共催） 参加人数：126名 ・IPMセミナー 1回 参加人数：146人 ・IPM研修（2日間） 1回 参加人数：34人 ・館内・国立文化財機構内希望者向けIPM研修（1日間） 1回 参加人数：24人 ・学会研究会等発表：木川・秋山・大城戸・柿本・泊・光山・本田、ガラス外壁を有する博物館建造物における衝突野鳥の傾向分析と対策、文化財保存修復学会第39回大会（7月1日、金沢） 			


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度は、28年度よりIPM研修の内容を大幅に変更した。受講条件を1館に対し、2人で参加するようになったところ、お互いに研修内容を共有でき、自館に戻ってIPMを実践しやすくなった様子がうかがえた。IPMシステム構築に向け、セミナーや研修の受講条件、研修内容を検討して行った結果、IPM実践に向け、より確かな形で普及することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の通り、文化財の保存に関する博物館等の業務に関連し、セミナーやIPM研修等を全国の博物館等から担当者を受け入れて実施している。IPM研修は毎年、受講の希望者が多く、今後もこのようなニーズを踏まえつつ、調査研究により最新の状況を反映した教育活動を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討（科学研究費助成事業）((4)-②-1))		
【事業概要】 近年、文化財の科学調査が一般的に行われるようになってきた。しかし文化財は脆弱な材質、構造のものが多く、文化財の科学調査は調査のための作品移動の機会をなるべく少なくし、短時間に非破壊で行うことが求められる。これまでは制限がある中で点分析が主流であったが、文化財を総合的に理解するには面的な広がりで見える調査が必要である。本研究では文化財の科学調査に面的な手法を導入した有効な調査法を検討する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員 秋山純子
【主な成果】			
(1) 「博物図譜」（香川県立ミュージアム保管）画帖4帖のカラー画像及び赤外線画像を高精細スキャナーで撮影、蛍光X線分析の結果と合わせて解析した結果を日本文化財科学会で発表した。(6月10日、11日)			
(2) 顔料・染料カラーチャートの分光スペクトルを測定し、基準となる彩色材料の基礎データを得ることができた。(7月27日、28日)			
(3) 顔料・染料カラーチャートの分光スペクトル分析の結果を解析し、その成果を上海で開催された東アジア文化遺産保存学会主催の2017上海国際文化遺産シンポジウムで発表した。(8月24日、25日)			
(4) 「博物図譜」（香川県立ミュージアム保管）画帖2帖のカラー画像及び赤外線画像の調査結果を踏まえ、分光スペクトル分析を行った。(11月2日、30年1月30日、31日) 赤外線画像では同じ色に見える箇所でも顔料・染料の違いが濃淡となって現れる。このことを利用し、染料と推定される箇所の広がりを面的に捉え、分析することができた。			
【備考】 科学研究費助成事業の4年計画の3年目 調査回数：4回 学会発表等： 「赤外線画像を使った彩色材料の面的調査」日本文化財科学会第34回大会（6月10日、11日） 「赤外線画像を利用した彩色材料の検討」2017上海国際文化遺産シンポジウム（8月24日、25日）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業の4年計画の3年目である29年度は、27・28年度の成果に加え、最終年度である30年度に向けてデータを蓄積することができた。また、29年度は上海で開催された国際文化遺産シンポジウムで成果を発表することができ、日本語・英語・中国語の要約として論文集にもまとめられることになった。30年度は最終年度となるので、これまで蓄積したデータをまとめ、赤外線画像の面的調査への有効性を明らかにしたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。本研究では面的調査に赤外線画像が有効であることを検証してきた。検証するのに実際の資料として「博物図譜」の調査は非常に有効であるので、30年度も引き続き「博物図譜」の科学調査を中心に、面的調査の有効性を検証する。30年度は最終年度であるので、これまでの顔料・染料の調査データを検証し、面的調査に有効なデータを総合的にまとめる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討 (科学研究費助成事業) ((4)-②-1))		
【事業概要】 歴史的木造文化財建造物の劣化要因として虫害などの生物劣化は大きなウェイトを占め、従来、文化財建造物が木材害虫であるシバンムシなどによって顕著な被害を受けた場合には、修理にあわせて建物全体のガス燻蒸処理が実施されてきた。ガス燻蒸は、比較的短時間で部材内部に生息する虫まで駆除できるという点で、現時点で唯一の有効な方法である反面、燻蒸剤は毒ガスであるため、作業員や観光客の安全確保のために厳重な対策が必要となる。さらに施工後放出される有毒ガスの周辺環境に対する影響も懸念される。本研究では、人体や環境に対して安全で、かつ有効な殺虫処理として、既に欧州などで小型の文化財について実績のある調湿温風による殺虫をとりあげ、これを漆などの彩色を施した日本の大型建造物に適用する手法を確立する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長(兼環境保全室長) 木川りか
【主な成果】 (1) 試験用建物における実処理に向けての処理工程の構築：プロトタイプチャンバーの原理を応用して、試験用の建造物(ログハウス)を処理するための装置を製作し、ポリプロピレンフォームを使用した断熱覆屋を周囲に作成して、実際の建造物の処理を実施した。処理では、木材の水分量を一定に保ちつつ、部材表面と中心部の温度差をできるだけ小さく保ちながら材の温度をムラなく上昇させることが重要であるが、その性能を実現できるシステムとなった。また、その後に予定されている日光の歴史的建造物の処理が気温の低い時期になる場合に備え、加湿に使用する水のパイプ内の凍結防止対策の方法について研究協力者の北原博幸氏を中心に検討した(京都大学にて試験)。 (2) 日光の歴史的建造物における建物の実処理における各種計測及び評価：11月に日光の中禅寺愛染堂にて、これまでの検討結果を踏まえた装置と断熱覆屋を使用して加湿温風処理による殺虫処理を実施した。その際、処理前後での建物の亀裂や彩色箇所の状態記録をとるとともに、建物内数十か所の空間温湿度とテスト部材内中心部の温度を計測した。また、日光の歴史的建造物に使用される極彩色の彩色テスト材や、テスト部材内中心部に木材害虫を埋め込んで殺虫効果を検証する試験も同時に実施した。本結果は今後学会や論文等に取りまとめていく予定である。			
 <p>日光中禅寺愛染堂の加湿温風処理用断熱覆屋と覆屋内部の様子</p>			
【備考】 科学研究費助成事業の3年計画の3年目 研究全体会議 3回、5月19日(東京)、7月31日(日光)、10月5日(東京) 9月以降は主に日光での作業実施、日光中禅寺における加湿温風処理実施における検証：11月1日～16日 歴史的木造建造物における新たなモニタリング手法の実用性の検討、小峰幸夫、原田正彦、斉藤明子、佐藤嘉則、木川りか、藤井義久、文化財保存修復学会第39回大会 7月1日(金沢)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、これまで作成したプロトタイプの装置、及び運用プログラムと大学におけるテスト建物により十分な結果を出すことができ、実際に日光の歴史的建造物の加湿温風処理に利用することができた。当初は夏季の処理を想定していたが、低温になる時期の処理となったため、加湿用の水の凍結防止策など、かなり困難があったものの、安定的に目標温度を実現し、実際の建造物の処理を安全に利用できるまで到達することができた。海外でこれまで報告されている歴史的建造物の温風処理では、処理空間の温度湿度値が上下に大きくふれ、必ずしも緻密な制御は実施されていなかった。しかし、今回歴史的建造物で実現した温度湿度制御の精度はきわめて高く、目標温度(材の芯温60℃)の正確な制御とともに、材の含水率もほぼ一定に保つことができた。このような条件での歴史的建造物の加湿処理は世界で初めての例であり、大きな成果といえる。当初の目標を達成した上、実際の運用に応用することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでの実地試験用の装置の作成や方法の検討により、最終年度に当初の目標を達成しただけでなく、実際に当初予定していたよりも難しい外気温の低い時期に適用する条件も検討し、日光の歴史的建造物を加湿温風処理で処理することができた。今後、彩色テストサンプルの細かな影響の解析や木材害虫への効果などの検証結果を学会や論文等で公表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 文化財防災ネットワーク推進事業（平成29年度文化芸術振興費補助金）((4)-②-1))		
【事業概要】	<p>独立行政法人国立文化財機構では、26年7月に文化財防災ネットワーク推進室を設置し、各地において文化財を不時の災害から守るためのネットワークの構築を進め、当館は、九州地方におけるネットワーク構築を担当している。29年度は28年度に引き続き、28年4月に発生した熊本地震によって被災した文化財の救出に取り組み、福岡県うきは市における調査事業を通して、市民向けの文化財サポーター育成講座を実施した。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長（兼企画課長） 小泉恵英
【主な成果】	<p>(1) 地域防災ネットワークの確立促進（九州地方） 九州地方における文化財防災の取り組みについて学ぶために、各地で開催された研究会、シンポジウムに出席し、情報収集と共に関係者と意見交換を行った。また、30年2月14日～15日に、九州歴史資料館との共催で、九州・山口地方の博物館等関係者を対象とした、水損資料応急処置ワークショップ（会場は九州歴史資料館）を開催した。7月に発生した九州北部豪雨においては、緊急対応として、各地と連携して文化財の被害情報の収集に取り組んだ。</p> <p>(2) 被災地（熊本）におけるネットワークの確立促進 29年度より熊本県主体で実施している熊本県被災文化財救援事業に関与し、派遣人員の調整、救出活動への参加、文化財レスキュー手法の整理・共有に取り組んだ。国立文化財機構と九州・山口各県の学芸員及び文化財行政関係者からのべ678名が参加し、17件の救出活動があり、約8,000点にのぼる文化財を救出した。</p> <p>(3) 被災状況に即した被災文化財の処置・保管に関する研究 電力供給がないなど与えられた条件の中で、保護された文化財等を最大限適切な状況で保管することができるよう、状況に即した形で殺虫や応急的なカビの除去など、保管に至る流れの検討、確立を目指し、29年度は、被災資料の生物処理、一時保管庫の温湿度データの収集、捕獲された虫体の同定分析等を行った。</p> <p>(4) 地域の文化財等防災体制構築のためのモデル策定事業 27年度から、福岡県うきは市に所在する楠森河北家当主・河北宣正氏の協力を得て、河北家所蔵の文化財調査をモデルに、うきは市と協働で市民向けの文化財サポーター育成講座を開催してきた。29年度は、引き続き、講座内で実施してきた楠森河北家に保管されてきた文化財の整理事業を行い、今後の文化財調査を担う市民の育成に取り組んだ。</p>		
【備考】	<p>国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業4年目 情報発信実績：秋山純子ほか「空調のない被災文化財の一時保管場所における様々な保管容器内の環境調査」、三角菜緒ほか「熊本地震で被災した古文書の救出と整理会の開催について一救古文書を未来に伝えるための取り組み」、本田光子ほか「熊本地震被災文化財救出後の応急処置および整理・保管手法の検討」、松下久子ほか「県域を越えた博物館ネットワークによる文化財防災連携体制の構築」（文化財保存修復学会第39回大会、7月1日～2日）。島谷弘幸「基調講演 大規模災害時における博物館の役割」、小泉恵英「活動報告 九州国立博物館の取り組み」、岡田健「パネルディスカッション司会」（シンポジウム「大規模災害時における博物館の役割」、くまもと県民交流館パレア、7月5日）。松下久子「被災文化財の調査・レスキューにおける九州国立博物館のとりくみ」（「全国歴史民俗系博物館協議会 第6回年次集会」、九州国立博物館、7月13日）。</p>		



熊本地震被災甲冑の整理


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度文化芸術振興費補助金事業は、28年度に引き続き、熊本県被災文化財救援事業への参加と、福岡県うきは市における地域の文化財等防災体制構築のためのモデル策定事業を主とした。熊本県被災文化財救援事業は、29年度も救援活動が続けられている状況ではあるが、熊本県が独自に活動に取り組む方向で動いており、国立文化財機構としての当初の活動目標は十分に達成できたといえる。また、福岡県うきは市における事業についても、事業開始から3年目となり、市民の講座に対する積極性が高まり、楠森河北家の調査終了に向けて目途がつつある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期計画に沿って、九州地方における文化財防災ネットワークの構築に取り組んできた。熊本地震や九州北部豪雨を受けて、災害時における文化財救援の方法や関連する研究成果の整理・共有を進めてきたが、今後も引き続き情報発信を行っていくことが重要である。それによって文化財を核とした地域活性化の実現を目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	X線 CT を用いた文化財有機質材料の同定方法の確立 (科学研究費助成事業) ((4)-②-1))		
【事業概要】	<p>本研究の目的は文化財に用いられる有機質の文化財材料について X 線 CT のデータで得られる資料特有のコントラストから材料の判別を行うものである。これは木材同士の接合や漆工芸の下地など解体しなければ見ることができない部位の製作工程を明らかにすることができるため、文化財の製作技法や状態調査を行う上で大いに役立つと考えている。</p>		
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	客員研究員 赤田昌倫
【主な成果】	<p>当館保有のミリフォーカス CT では木材と塗膜、下地の明確な境界線を判別することは困難であったが、ノイズを軽減させたデータであれば、各材料を判別することができるのではないかと考え、29 年度は有機質の文化財材料について、ノイズが少ない CT の撮影条件の調査に集中して取り組んだ。</p> <p>資料は下地を施した漆塗り手板と乾性油で塗装した手板とした。漆塗り手板について投影数を変化させ撮影を行った。その結果、投影数を上限まで上げたデータでは資料と空気の境界部のエッジが明瞭になり、ノイズも少なくなることが分かった。ノイズが少ないデータを見ると、資料の材質である木材と漆の塗膜、下地に対応する各ピークが明瞭に現れることが分かった。</p> <p>次に漆と乾性油について見え方を比較した結果、漆では下地の影響を強く受けたデータが得られ、乾性油では下地がないため木地の影響を強く受けたデータが得られた。このことから、漆と乾性油を CT のデータから判別できることが分かった。この手法を使うことで CT による複数の文化財材料が判別できる可能性がある。</p>		
			
	右が漆、左が乾性油を塗布した手板		
【備考】	<p>日本文化財科学会第 34 回大会 X線 CT スキャナを用いた「国宝初音の調度」の構造調査～小櫛箱、乱れ箱、湯桶の構造研究～</p>		


年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 科学研究費助成事業3年計画の2年目である29年度は、1年目から2年目までの成果を国際学会で発表するなど成果の公開に力を入れた。 2年目の成果としては、漆と乾性油について、ヒストグラム中のピーク位置を検証した結果、漆と乾性油とは異なる位置にピークが現れ、CTデータからそれぞれ抽出できることがわかった。この手法は様々な材料が複合的に用いられることが多い文化財の材料調査において、今後の応用性、発展性が高いと考えられる。 PVA(合成樹脂)、乳香、フノリ、市販接着剤のサンプルを作製したので、30年度はこれらの材料についてもCTデータを比較検討し、CTを用いた文化財の材料判別の可能性について検証を行う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究を実施した。</p> <p>CT データからコントラストを数値化する研究を実施し、その結果、漆と乾性油のサンプルについて二つの材料を判別できることがわかった。</p> <p>科学研究費助成事業の最終年度となる30年度は、29年度に作製したサンプルのCTデータから各サンプルのコントラスト範囲を検証し、CTによる文化財材料の判別方法の精度を高める予定である。</p> <p>特に漆と膠のサンプルについては、刻苧が入った時のヒストグラムやコントラスト範囲の変化について検証を行う。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】	当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。		
【担当部署】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長 村田良二
【主な成果】	<p>(1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。</p> <p>(2) X線CTスキャン、三次元計測、冊子体資料の全画面像、ガイド音声等、作品に関連するデジタルデータの有無及び各データの作成日、作成担当者、データ保管部署を登録する機能を追加した。また、作品検索画面、作品詳細画面にこれらのデータの有無を表示するようにした。</p> <p>(3) 作品データを多数追加登録する必要が生じた際、従来はデータの内容ごとに専用のプログラムを作成していたが、汎用のインポート機能を新規に開発した。</p> <p>(4) システムを構成するソフトウェアライブラリをバージョンアップし、これに伴うプログラムの調整を行った。</p> <p>(5) 機構内4博物館の収蔵品データを公開する「Col Base」との効率的なデータ連携について検討した。</p>		
	 <p>デジタルデータの有無の表示</p>		
【備考】	<p>収集データ件数 225,161件 (内訳)</p> <p>作品データ件数 215,945件 平常展データ件数 4,816件 鑑査会議データ件数 91件 貸与データ件数 1,649件 修理データ件数 2,660件</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発でき、学芸業務に欠かせないツールとして着実に発展させることができた。X線CTスキャン等により作成されたデジタルデータを登録、表示できるようにすることにより、作成済みデータを活用しやすくとともに、データ作成の計画を立てやすくなった。作品データを多数追加登録する汎用の機能の追加により、データ流し込みの作業量を大幅に削減することができた。また、ソフトウェアライブラリのバージョンアップにより、30年度以降の継続的な開発の基盤を準備することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていく。29年度は、継続的な改善と同時に、ソフトウェアライブラリのバージョンアップとこれに伴う作業により、現行システムの課題を確認するとともに、不要な機能の整理や、プログラムコードの不統一の修正などを行うことができた。30年度以降は、データモデルの再検討、ユーザインターフェースの改善及び「Col Base」において公開するデータとの効率的なデータ連携の検討をさらに進める。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究 ((4)-②-2)		
【事業概要】	34年度の当館創立150年へ向けて、『東京国立博物館150年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。29年度は関係文書類の付箋挿入と整理、館内より新たに収集した資料の目録化に加え、PDFなどデータ化を進め、保存措置を講じる。		
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】	<p>(1) 収集した文書類の整理・目録化・保存措置 (4月3日～30年3月30日：週に1～2日) 資料保管室(資料館3階)に収集した約8,500件の館史関係文書類について、27年度に完成した目録(仮)と対応するための付箋挿入をするなど整理を進めた。以上は、資料整理アルバイト1名、非常勤職員1名と、当館百五十年史編纂室員がともに作業を行った。</p> <p>(2) 東京国立博物館百五十年史編纂ワーキング打合せの実施 (6月6日ほか) 『150年史』編纂のためのワーキング打合せを実施した。28年度に決定した編纂物の内容をもとに、執筆者を決めた。</p> <p>(3) 館史の内容に即した文書類の整理・確認 ・当館館史における調査研究活動の記録 (7月31日から) 『150年史』編纂に向けて執筆者選定の資料とするため、館史上の調査研究活動の課題とその担当者について資料を収集し、データ化を行った。非常勤職員1名がこれを進めた。 ・分野・年代別資料一覧の作成 (6月6日から) 『150年史』編纂に向けて、執筆資料とするために、館史関係文書類を分野別、年代別に選定し、一覧年表の作成を進めた。室員1名、非常勤職員1名、インターン3名がこれを進めた。</p> <p>(4) 文書類のデジタル化 (4月6日ほか) 『東京国立博物館百年史』編纂の際に用いられた資料・原稿等のPDF化を進めるとともに、『150年史』編纂の資料として活用すべく館史資料のテキストをデジタル・データ化した。</p> <p>(5) 総合文化展にて館史に関わる特集展示の実施 (10月3日～11月26日) 特集「明治時代の日本美術史編纂」の展示を企画し実施した。また、この特集に関連する連続講座(11月17日)において、室長1名、室員1名が研究成果を報告した。</p> <p>(6) 問い合わせへの対応 (9月21日ほか) 館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。</p>		
【備考】	<p>(1) 収集した文書類の整理：65日間実施</p> <p>(2) 編纂ワーキング打合せ：4回実施</p> <p>(3) ・当館館史における調査研究活動の記録のデータ化：32日間実施 ・分野・年代別資料一覧の作成：のべ81日間実施</p> <p>(4) 資料・原稿等デジタル化：275件(約3,500点)</p> <p>(6) 問い合わせ対応：5件</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度より継続的に行ってきた文書類の整理・保存措置について29年度も進めることができた。また、収集・整理した文書類のデータを活用し、調査研究の歴史に関するデータを収集し、編纂資料年表を作成することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類の収集整理を課題とするとともに、それらの文書類を『150年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、他の事業にも役立つようなデータ作成を行っていく。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料目録について館内での周知が進み、文書類の活用希望者も増えてきた。また、館史に関わるさまざまな作業に迅速に対応できるようになったことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。平成30年度以降も引き続き文書類の整理を進めるとともに、利用しやすいデータ作りに努め、さらなる活用を図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 博物館における文化財の情報資源化に関する研究(科学研究費助成事業)((4)-②-2)		
【事業概要】	<p>本研究は、博物館が収集した文化財と関連する資料(図書・文書など)の分析と整理、データ化を行い、文化財との相互の関連付けを行うことで、これらを一元的に管理し、必要ときに引き出して活用できる博物館アーカイブズを構築する。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究する。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	客員研究員 高橋裕次
【主な成果】	<p>① 個々の文化財に関連付けた目録類、図書、文書などのデータをもとに、文化財を多角的にとらえた総合的な情報のあり方について検討した。また、他の研究機関と情報を共有する上での検索にどのような考え方が必要かをいくつかの事例から考えた。</p> <p>② 8月11日から18日の日程で、ドイツ連邦共和国のケルン市立東洋美術館、ミュンヘンのバイエルン州立図書館において、日本の古典籍資料を中心に、作品の活用、管理や登録情報などについて調査を行った。世界的に知られる海外の施設であっても、所蔵する日本の文化財に関して、情報量の不足などの理由から、十分に活用されていない状況であり、日本での研究成果の伝達法などに検討の余地が認められる。</p> <p>③ 報告書では、研究の目的に沿って、既成のデータベースにはないような特色を持たせるために必要な考え方を検討した。具体的には、東京国立博物館が歴史資料の列品として所蔵する医学、博物学関連を中心とする図書を対象に、森鷗外が作成した解題および著者略伝との関連付けを行い、研究によって導き出された考え方にもとづいて、利用者が必要とするデータに到達するための情報資源化の方法を検討して、その成果を報告書にまとめた。</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の4年計画の4年目</p> <p>調査件数 300件</p> <p>デジタル撮影件数 50件</p> <p>公文書テキストデータ化 21件</p>		

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>科学研究費助成事業4ヵ年計画の4年目である29年度は、研究の総括の意味で、博物館が所蔵する多くの文化財のなかから、東京国立博物館の特色を反映し、かつMLA連携(ミュージアム(Museum)・図書館(Library)・文書館(Archives)の連携)に対応できる性質を備えたものを選択することを試みた。その結果、明治時代に展示に活用する列品と位置づけられ、大正時代に総長となった森鷗外が自ら解題および略伝を執筆した約4,200件の「帝室博物館蔵本」とよばれる図書を対象として、情報資源化の方圖書法論を検討することにした。鷗外が著した解題と、序文、奥書、識語、跋文などから抽出した著者とその周辺の人物の略伝のうち、情報量の多いもの約180件をとりあげた。自筆本文の画像と釈文、さらに図書の画像、博物館のデータベースなど、図書に関わった人物を中心に据えたさまざまな情報を参照ポイントとして逆引きすることで、必要とする文化財(図書)にたどり着くという考え方についての研究の成果をまとめた報告書を刊行するにいたった。近くこれらの情報をもとにデータベースを公開する予定である。</p>

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、課題と対応等
B	<p>全体として、26年度は、文化財に関連する目録類、図書、各種文書など、基礎資料のリストをまとめ、その全体像を明らかにした。27年度は各資料の作成時期、保管の状況を検討しつつ、資料群としてのまとまりと、時代の変遷をふまえながら、分類を実施し、28年度は文化財の活用のあり方や、文化財の相互の関係を検討し、人々が必要とする情報にたどり着くための方法を模索した。さらに29年度は個々の文化財に関連付けた目録類、図書、文書などのデータをもとに、文化財を多角的にとらえた総合的な情報のあり方について検討した。また、他の研究機関と情報を共有する上でどのような考え方が必要かをいくつかの事例をもとに研究し、その成果をまとめた報告書を刊行した。</p> <p>中期計画に沿って、東京国立博物館百五十年史の編纂に向けた作業のなかで、文化財の情報資源化という観点から、将来的にはMLA連携(ミュージアム(Museum)・図書館(Library)・文書館(Archives)の連携)を見据えた統合データベースの構築をめざしている。計画的に調査・研究を行い、所期の目標を達成した。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	文化財情報資源の探索と発見のためのデータ連携に関する研究(科学研究費助成事業)((4)-②-2))		
【事業概要】	本研究は、Linked Dataによって文化財情報資源を効果的に探索・発見することのできる環境の構築を目指すものである。そのため、機構内4博物館の所蔵品総合データベース(ColBase)にLinked Dataによるデータ出力機能を開発する。		
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長 村田良二
【主な成果】	<p>(1) 研究代表者、研究分担者及び連携研究者による全体ミーティングを行った。</p> <p>(2) Linked Dataによるデータ公開を行っている国内外の機関について、各機関のデータベース、Webサイト等を調査した。</p> <p>(3) 公開するメタデータ語彙の基盤として、博物館におけるLinked Data提供に適合的なものを利用する方針を固め、ICOM CIDOCが開発したCIDOC CRMを採用することとした。</p> <p>(4) CIDOC CRMを用いたメタデータフォーマットを検討し、ColBaseのデータ項目とのマッピングを行った。</p> <p>(5) 公開している作品情報について、作者の人名を中心に索引データを整備し、国立国会図書館典拠データ及びGetty Research InstituteによるUnion List of Artist Names(ULAN)のURLとの関連付けを行った。</p> <p>(6) 索引データの整備にあたって、システムの反応速度が遅くなる箇所が明らかとなったため、改修を行った。</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の1年目</p> <p>全体ミーティング 2回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回 8月24日 於 東京国立博物館 ・第2回 30年2月2日 於 東京国立博物館 <p>索引データ整備件数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作者 2,220件 ・分類 2件 		


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の1年目である29年度は、基盤となるメタデータ語彙を十分に比較検討することができ、その結果としてCIDOC CRMを採用する方針を確定することができた。また、ColBaseにおけるデータ項目をどのようにCIDOC CRMを用いて表現するかマッピングを行うことができた。索引データについても、作者の人名を中心に実施することができ、既存の典拠データとの関連付けも実際に行うことができた。さらに、これらの作業を行う上でのシステムの処理速度の問題を明らかにし、改善することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に沿って、②その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。</p> <p>本研究では3年間で次のことを実施する。(1)メタデータ語彙を選定し、マッピングを行う。(2)人名・地名等の索引情報を整備し、既存の典拠情報との関連付けを行う。(3)SPARQL EndpointをColBaseに実装し、問い合わせを試行する。(4)既存の外部システムとの連携を検討する。</p> <p>1年目である本年度は、主として(1)語彙の選定とマッピングおよび(2)索引データ整備に取り組んでおり、順調に作業を進めることができた。30年度以降は、引き続き(2)の索引データ整備を行うとともに、(3)のシステム開発を実施し、最終年度には(4)外部システム連携の検討を行う計画である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	東京国立博物館所蔵写真資料データベース (科学研究費助成事業) ((4)-②-2))		
【事業概要】	<p>当館所蔵写真資料データベースは、当館が所蔵する幕末から昭和初期にかけて撮影された紙焼き写真をデジタル化し、広く一般に公開することを目的とする。現在「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」としてホームページ上で公開しているデータは、18～21年度の科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付によって作成された。</p> <p>本事業では、上記のデータベース作成事業を引き継ぎ、従来の紙焼き写真に加え、当館が所蔵するガラス乾板を含めた全写真資料について調査とデジタル化を行い、データベースの充実を図る。</p>		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	部長 富田淳
【主な成果】	<p>(1)ガラス乾板の調査 当館が収蔵する明治～昭和初期撮影されたガラス乾板のうち、四切写真約1,200枚とキャビネ写真約3,100枚の法量(縦、横)、墨書等文字の項目について、5月～30年3月に当館で調査し、併せてガラス乾板の保存状態を確認した。</p> <p>(2)ガラス乾板のスキャナー作業 未撮影の乾板の内、約830枚のスキャナー作業を5月～30年3月に当館で行った。</p> <p>(3)紙焼き写真のデータ整理 紙焼き写真について、約3,500枚について既成画像を元に公開用データを作成した。</p>		
			
	<p style="text-align: center;">スキャナー作業風景</p>		
【備考】	<p>科学研究費助成事業の3年計画の3年目 「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/kaken/oldphotos.html)において約8,800件を公開した。 調査回数 24回。ガラス乾板のスキャナー作業 16回。</p>		


年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費助成事業3年計画の3年目である29年度は、未撮影乾板のスキャナー作業を加え、当館が収蔵する明治～大正時代にかけて撮影された主要なガラス乾板を調査することができた。また、紙焼き写真については予定していた件数のを上回るデータ整理を行うことができたため、おおむね所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、②その他有形文化財に関連する調査研究を実施した。本研究計画では、当館が収蔵する主なガラス乾板を3ヵ年に分けて実施調査を計画しており、最終年度である29年度は、中期計画をほぼ達成した。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財情報に関する調査研究((4)-②-2))		
【事業概要】 当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討するとともに、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川禎一
【主な成果】			
<p>(1) 当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、文化財情報に関する調査研究を推進した。</p> <p>(2) 博物館におけるインフラとしての情報ネットワーク整備や、デジタルアーカイブズに求められる知財管理についての情報収集を行い、平面作品高精細画像の多くが、判例により著作権法上の知財として保護されない点を踏まえ、許諾ベースにおける保護のあり方や、国際的な Creative Commons をベースとした許諾について、事例収集・検討を行った。また、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、今後も継続して調査・検討を行う。</p> <p>(3) 文化財保全のための収蔵・展示環境を監視する環境モニタリングシステムについて、信頼性向上のため不具合への対応や各種の改善を行った。</p> <p>(4) 写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大する画像データを安全かつ効率的に収容するため、データを保管するストレージシステムを更改した。また、データ量の増大によって既存の手法では対応が難しくなったバックアップやアクセスコントロール等の仕様・運用両面について、新しい技術的仕様（イメージバックアップ方式や主体認証等）の調査・検証を行う事で、既存装置の2倍を超える大幅な容量性能の改善ができた。</p>			
			
<p>環境モニタリングシステムのサーバに対し 自動送信を行うデータロガー（調整後の試験）</p>			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・情報システム検討会 6回 ・情報システム調査 6回 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、調査研究を通じて環境モニタリングシステムの改善や画像ストレージシステムの強化を実施できた。30年度については、文化財情報に関わる情報セキュリティの強化や、ウェブサイト公開機能の見直しを図るとともに、引き続き画像ストレージシステムの強化を継続したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画で求められている文化財情報に関する調査研究について、写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大した画像データの効率的かつ安全な収容を進めるため、技術的仕様の調査・検証を行った上で、大幅な容量性能の向上を図る事ができた。増大するデジタル情報の安全な収容は、文化財情報とアーカイブにとって欠かせない研究課題であり、今回整備した新仕様によってデータの収容・バックアップが、30年度以降の増大するデータと増強機器を安全に処理できるか等の継続的検証環境としても、重要な基盤になると見込んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】	当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開並びに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。		
【担当課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎幹子
【主な成果】	<p>デジタル撮影の安定的な稼働を目指し、撮影機材、環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の撮影を実施した。情報システムや公開用データベースの更新を適宜行い、情報の拡充と公開に積極的に取り組んだ。</p> <p>(1)特別展「快慶－日本人を魅了した仏のかたち」並びに「源信－地獄・極楽への扉」の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を多数行った。快慶展では、現時点で移動・撮影可能な快慶作品のほぼすべてについて最新の撮影機材をもちいた撮影が叶い、学界で待望される快慶作品を集成した大型図録の出版にむけて基礎資料とすることが出来た。また、源信展でも多数の浄土教絵画の撮影を実施することが出来た。これらによって、当館における文化財アーカイブズの更なる充実が図られた。さらに、東京国立博物館で開催された「興福寺中金堂再建記念特別展－運慶」に際し、当館の研究員と写真技師が撮影事業の一端を担うこととなり、撮影機会の稀少な運慶作品の画像を当館のアーカイブズに加えることが実現した。</p> <p>(2)28年度に引き続き、ガラス乾板の保存活用のための作業を行った。この作業は、デジタル化、ガラス乾板の保存処置(カビや埃の除去)、畳紙・保存箱への納入、新たな専用キャビネットへの排架とが連動したもので、館内の貴重な歴史資料の保存活用と公開を目指さずものである。今後も継続して行う計画である。</p> <p>(3)『日本彫刻史基礎資料集成』(水野敬三郎他編、中央公論美術出版)画像を掲載するため、秋篠寺等において文化財調査にともなう撮影を実施した。当館のアーカイブズの充実にとどまらず、広く学界へ貢献する活動にも結び付けることができた。</p>		
【備考】			



撮影風景(重要文化財「伝伎芸天立像」秋篠寺)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>当館では、文化財アーカイブズの形成を重要な活動のひとつとして位置付けている。なかでも拝観や移動、調査の機会が稀少な文化財を画像データとして蓄積し、共有可能な研究資源としていくことには、大きな意味がある。文化財の撮影は、保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではないが、主な成果でも述べたとおり、学術的に重要でありながら撮影の機会を得ることが難しい文化財について、継続的に調査を実施して質の高い画像データを取得し、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。近年では、文化財写真の黎明期を伝えるガラス乾板のデジタル化にも取り組むなど、更なる発展も視野に入れている。今後も当館の展覧会事業等と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、文化財アーカイブズの質・量双方の維持に努める予定である。</p> <p>人員と予算に限られる現在のような体制で、他館と比して幅広い活動を展開できている点も評価できる。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>デジタル撮影を含む画像データの作成については、現在のところ安定的な稼働を維持できている。内部での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過X線のデジタル撮影に加えて、29年度より本格稼働したCT撮影についても、情報の蓄積と共有を実現させるべく、機材・設備の充実が急務である。</p> <p>当館では仏教美術分野において国内唯一と言っている貴重な画像データのコレクションを運用しているが、CT撮影に代表されるような文化財調査の進展に併せ、文化財アーカイブズの拡充が図れるよう、更なる体制整備が肝要である。今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。</p>

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																																	
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等																																																	
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議) 京都大会に向けた活動を促進する。 (東京国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2) アジア国立博物館協会(ANMA) 理事会・定期大会、IEO(国際展覧会オーガナイザー会議)、日中韓国立博物館館長会議等の国際会議へ参加する。																																																		
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	課長(兼国際交流室長)	浅見龍介																																														
【実績・成果】 (4館共通) 1) 中国、韓国、タイの博物館・美術館等から計35人の研究者・研修生を招へい・受け入れ、研究交流を行った。 2) 中国、韓国、タイ、米国、ヨーロッパなど10カ国・地域の博物館・美術館等へ研究職員を67人派遣し、収藏品とその活用に関する研究および、研究交流を行った。 3) 文化庁支援、北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として国際シンポジウム「ミュージアムにおける日本美術の再発見」(30年1月12日～13日、東京国立博物館)及び日本美術専門家会議(30年1月14日、同館)を開催した。 4) アジア国立博物館協会(ANMA)第6回理事会・大会(12月21日～22日、バンコク)への参加を通して、ICOM京都大会への参加を呼びかけた。 (東京国立博物館) 1) 韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館等との学術交流協定に基づき、研究員の交流・派遣を行うとともに、海外での共同事業の企画・実施準備、国際会議に研究員を派遣した。また、日タイ修好130周年記念「日本美術のあゆみー信仰とくらしの造形ー」展(12月27日～30年2月18日、タイ・バンコク国立博物館)開催にあたり、現地の展示環境等に関する助言を行ったのはじめ、国際的な調査研究、ネットワーク構築、交流事業の推進を図った。 2) 第10回韓中日国立博物館長会議に参加し、中国国立国家博物館及び韓国国立中央博物館の代表者と交流・情報交換を行い(30年1月25日ソウル)、国立博物館合同企画特別展「東アジアの虎美術ー韓国・日本・中国ー」を韓国国立中央博物館にて行った(30年1月26日～3月18日)。																																																		
【補足事項】 (4館共通) 上記研究員派遣人数は当館予算による派遣延べ人数を示す。 科学研究費助成事業等外部資金等を含む人数は89人。 (東京国立博物館) 1) 学術交流発表会を次の通り実施し、研究交流成果を報告した。 韓国国立中央博物館研究員(10月24日尹芝蓮氏・11月22日朴鉉澤氏)、当館研究員(30年1月31日河野正訓研究員・猪熊兼樹主任研究員) 2) 毎年開催の日中韓国立博物館館長会議では、次回31年日本での会議・展覧会開催等について協議した。																																																		
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>29年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評定</th> <th></th> <th>25</th> <th>26</th> <th>27</th> <th>28</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>海外からの研究者招聘</td> <td>35人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td rowspan="4">経年 変化</td> <td>21</td> <td>47</td> <td>83</td> <td>73</td> </tr> <tr> <td>海外への研究者派遣</td> <td>67人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>41</td> <td>18</td> <td>47</td> <td>60</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム開催数</td> <td>1回</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム参加者数</td> <td>334人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>422</td> <td>284</td> <td>463</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定		25	26	27	28	海外からの研究者招聘	35人	-	-	経年 変化	21	47	83	73	海外への研究者派遣	67人	-	-	41	18	47	60	国際シンポジウム開催数	1回	-	-	-	2	1	1	国際シンポジウム参加者数	334人	-	-	-	422	284	463
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定		25	26	27	28																																										
海外からの研究者招聘	35人	-	-	経年 変化	21	47	83	73																																										
海外への研究者派遣	67人	-	-		41	18	47	60																																										
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		-	2	1	1																																										
国際シンポジウム参加者数	334人	-	-		-	422	284	463																																										
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 韓国国立中央博物館・上海博物館との協定に基づく招へいを含め、海外から合計35人の研究者を受け入れた。また海外へは67人を派遣した。29年度で4度目となる米国・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業には9カ国334人の参加があった。また、当館が韓国・中国と共に創設に携わったアジア国立博物館協会は19年の設立以来2年に一度の大会を経て、今回新たに2カ国を加え16カ国が加盟し、発展を続けている。これらの取り組みにより海外研究者・博物館関係者との交流が進み、今後の展覧会等事業や研究交流につながっている。今後、交流対象国をさらに広めていくことに努めたい。																																																
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。																																																		
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 例年規模の研究者招へいと派遣により成果を達成し、順調に遂行できた。第4回となった米国・欧州ミュージアム日本美術専門家会議では、日本美術の展示について前向きかつ活発な議論が進んだ。2日間のシンポジウムには一般参加を含め延べ334人が参加し、国内外のミュージアム活性化の先導的役割かつネットワーク構築について着実な成果を結んできている。今後、2019年ICOM京都大会に向け、具体的な活動の更なる活発化を目指す。																																																



学術交流発表会(11/22)



ANMA 理事会(12/22)

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																																
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等																																																
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議)京都大会に向けた活動を促進する。																																																	
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 数馬厚人 企画室長 伊藤信二																																														
【実績・成果】 (4館共通) 1) 下記(2)～(3)のシンポジウム等のために海外研究者を2人招聘した。 2) 研究交流並びに研修のため職員を21人派遣した。 3) 9月21日～29日、ブリティッシュ・カウンシル統括責任者代理 HEDLEY SWAIN氏を招へいし、「イギリスにおける最新文化政策動向とオリンピック文化プログラム」講演会・ワークショップを開催した。 4) ・5月17日～22日、ICOM会長 Suay Fatama Aksoy氏を招聘し、国際博物館の日シンポジウム「ICOM京都大会へ向けて」(参加者数:140人)での講演及びICOM京都大会に関する打ち合わせを行った。 ・ICOM京都大会に向けて、職員を関連の国際会議へ派遣した。																																																	
【補足事項】 2) ・7月、海外交流招待事業として公開講座講演及び情報交換のため、当館職員1人を韓国へ派遣した。 ・7月、国際シンポジウムでの発表のため、当館職員1人を中国へ派遣した。 ・ほか、アムステルダム博物館(オランダ)、河南省文物考古研究院(中国)などへ派遣した。 3) 文化庁より「著名外国人招へいによる日本文化発信に係る調査研究事業」として受託した。 4) ・4月、国際会議出席、ICOM京都大会の広報活動、アメリカ博物館協会大会参加し、職員1人をアメリカへ派遣し、情報収集を行った。 ・11月、ICOM-ICDAD国際委員会会議出席するため、職員1人をアメリカへ派遣した。																																																	
<table border="1"> <tr> <td>【定量的評価】項目</td> <td>29年度実績</td> <td>目標値</td> <td>評定</td> <td rowspan="5">経年変化</td> <td>25</td> <td>26</td> <td>27</td> <td>28</td> </tr> <tr> <td>海外からの研究者招聘</td> <td>2人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>海外への研究者派遣</td> <td>21人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>19</td> <td>14</td> <td>17</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム開催数</td> <td>1回</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム参加者数</td> <td>140人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>168</td> <td>200</td> <td>0</td> </tr> </table>									【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定	経年変化	25	26	27	28	海外からの研究者招聘	2人	-	-	0	2	2	2	海外への研究者派遣	21人	-	-	19	14	17	21	国際シンポジウム開催数	1回	-	-	-	1	1	0	国際シンポジウム参加者数	140人	-	-	-	168	200	0
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定	経年変化	25	26	27	28																																									
海外からの研究者招聘	2人	-	-		0	2	2	2																																									
海外への研究者派遣	21人	-	-		19	14	17	21																																									
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		-	1	1	0																																									
国際シンポジウム参加者数	140人	-	-		-	168	200	0																																									
【年度計画に対する総合評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 例年の海外交流に加えて、29年度はICOM京都大会開催に向けた活動促進のため、アメリカを始め様々の国々に職員を派遣し、広報活動等を実施した。																																														
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。																																																	
【中期計画に対する評価】 評定：B			【判定根拠、課題と対応】 29年度はICOM京都大会の開催に向けて、ICOM会長 Suay Fatama Aksoy氏を招聘し、国際博物館の日シンポジウムやICOM京都大会に関する打ち合わせ実施するなど、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与した。30年度以降においても引き続きICOM京都大会に向けた国際シンポジウム等を開催し、一般の方々への広報活動を実施していく予定である。																																														




国際博物館の日
シンポジウム



中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																																				
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等																																																				
【年度計画】(4館共通)																																																					
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。																																																					
2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。																																																					
3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。																																																					
4) 2019年ICOM(国際博物館会議) 京都大会に向けた活動を促進する。 (奈良国立博物館)																																																					
1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館との交流を活発に行う。																																																					
担当部課	学芸部	事業責任者	部長	内藤栄																																																	
【実績・成果】(4館共通)																																																					
1) 中国・韓国の博物館から研究者等11人を招聘し、最新の研究状況について情報交換するとともに、今後の研究や展示活動および博物館活動全般について意見を交わした。また、特別展「快慶」でアメリカ合衆国の美術館から展示品を借用するにあたり、先方のクレーエ(作品輸送の管理・監督、並びに展示立会を行う職員)をのべ6人招聘した。																																																					
2) 職員のべ22人を諸外国に派遣し、文化財に関する研修及び現地研究者との研究交流を実施した。																																																					
3) 国際研究集会「唐と西域文化」を11月28日に開催した。学術交流事業で招聘した国立慶州博物館研究員と当館研究員2人による研究発表と討論を行い、計60人の参加があった。																																																					
4) ICOMの委員会の一つであるCOMCOLの年次会合(12月5日～9日、スウェーデン、ウメオ市、Västerbottens Museum) およびICOM2019 京都大会関係のワークショップと国際シンポジウム(ともに5月、京都)に参加した。 (奈良国立博物館)																																																					
1) 中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて職員を派遣し、また先方の館員を招聘して、それぞれの専門分野にかかわる研究交流、意見交換を実施した。																																																					
【補足事項】(4館共通)																																																					
1) ・中国・韓国からの招聘者の内訳は、韓国国立慶州博物館4人、中国上海博物館3人、中国河南博物院3人、中国浙江省博物館1人。クレーエは、メトロポリタン美術館・ボストン美術館・キンベル美術館から借用時・返却時各1人。 ・前項のうち浙江省博物館 歴史文物部 研究員の魏 祝挺 氏の招聘では、2ヵ月間に及ぶ日本滞在を当館がサポートし、氏が専門とする仏塔建築に関する有益な研究交流を実施できた。																																																					
2) 当館から海外への派遣人数の内訳は、韓国国立慶州博物館2人、韓国国立中央博物館3人、済州研究院済州学術研究センター1人、中国上海博物館5人、中国河南博物院1人、中国国家博物館1人、山東省博物館1人、国立故宮博物院5人、インドネシア国立中央博物館1人、パリ博物館1人、スウェーデンVästerbottens Museum1人。																																																					
3) 国際研究集会「唐と西域文化」(於当館講堂) 11月28日 研究発表「アスターナ古墳群を通して見た唐代辺境の生活 附：大谷探検隊収集トルファン出土陶俑の出土地と編年検討」 発表者：李 泰熹(国立慶州博物館学芸研究士) 研究発表「正倉院宝物からみた『胡風』と『西域趣味』」 発表者：吉澤悟(当館列品室長)																																																					
4) COMCOLの年次会合では、研究報告会に参加して発表したほか、ICOM京都大会2019におけるCOMCOL委員会オフサイトミーティング・プレカンファレンスに関する協議に加わった。 (奈良国立博物館)																																																					
1) 学術交流協定に基づいて、以下の交流を実施した。 ・中国上海博物館から職員3人を10日間招聘し、当館から職員3人を10日間派遣した。 ・中国河南博物院から院長を含む3人を11月に5ヵ日間招聘し、今後5年間有効の交流協定書を新たに結ぶことができた。12月には、この新協定書に基づき、当館から職員1人を4週間派遣した。 ・韓国国立慶州博物館から職員2人を各1ヵ月間招聘し、当館から職員2人をそれぞれ4週間と3週間派遣した。																																																					
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>29年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評価</th> <th>経年変化</th> <th>25</th> <th>26</th> <th>27</th> <th>28</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>海外からの研究者招聘</td> <td>17人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>9</td> <td>9</td> <td>13</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>海外への研究者派遣</td> <td>22人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>8</td> <td>13</td> <td>20</td> <td>16</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム開催数</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム参加者数</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>									【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評価	経年変化	25	26	27	28	海外からの研究者招聘	17人	-	-		9	9	13	9	海外への研究者派遣	22人	-	-		8	13	20	16	国際シンポジウム開催数	-	-	-		-	-	-	-	国際シンポジウム参加者数	-	-	-		-	-	-	-
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評価	経年変化	25	26	27	28																																													
海外からの研究者招聘	17人	-	-		9	9	13	9																																													
海外への研究者派遣	22人	-	-		8	13	20	16																																													
国際シンポジウム開催数	-	-	-		-	-	-	-																																													
国際シンポジウム参加者数	-	-	-		-	-	-	-																																													
【年度計画に対する総合評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 招聘者の数は例年よりも増しているが、これは展覧会のクレーエが多かったためであり、継続的な国際交流の数に絞れば例年並である。研究者の招聘時及び派遣時には、各研究者が文化財調査や研究交流を着実に実施できている。29年度は長期の滞在を受け入れるなど新たな試みもあったが、年度計画を大きく超えるとは言えないため、左記の評価とする。今後も継続的な研究交流を、途切れることなく進めていかなければならない。																																																	
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。																																																					
【中期計画に対する評価】 評価：B				【判定根拠、課題と対応】 当館の海外博物館との学術交流は、上海博物館と慶州博物館については20年の長きに及び、河南博物院との間の交流も10年を超えている(本年度に今後5年間有効の協定を新たに結んだ)。異国間相互の信頼関係の構築には継続性が何よりも肝要であり、その意味で着実な実績を上げていると言える。それぞれの分野で優れた研究者を招聘することもできており、国際研究集会を開いて情報交換する機会も設けている。さらに、ICOM京都大会を意識し、COMCOLの国際会議に職員を派遣した。今後も、文化財研究における国際交流の拠点であるとの自覚に基づき、多様な取り組みを進めていく。																																																	




国立慶州博物館より招聘の金赫中先生による古墳石室の調査(4月20日)

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学术交流等							
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 2019年ICOM(国際博物館会議)京都大会に向けた活動を促進する。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招聘し、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。								
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長(兼環境保全室長) 木川りか 課長 吉川利幸 課長 菅原秀倫					
【実績・成果】 (4館共通) 1) 韓国等海外の博物館・美術館等の研究者等を9人招聘した。また、特別展「タイ～仏の国の輝き～」の開会式に合わせ、タイ王国文化省芸術局長を招聘し交流を深めた。 2) 当機構職員を韓国、中国をはじめとした海外の博物館等に延べ47人派遣し、研究交流等を実施した。 3) 国際シンポジウムは、招聘予定者の母国(ミャンマー)における国内情勢が悪化したことから29年度の開催を見送ることになった。 4) イランで開催されたICOM-ASPACに出席した。また、30年度の当館におけるICOM-ASPACの開催に向け、準備を開始した。 (九州国立博物館) 1) 従前の国際交流活動推進のための基盤を利用し、アジアを中心とする海外博物館との交流を実施した。(韓国国立公州博物館、国立扶餘博物館) 2) カナダからトム・ストラング氏、イタリアからチェザーレオ・ウバルド氏を招聘して、博物館等のIPM(総合的有害生物管理)に関するセミナーを実施した(10月25日)。日本国内の全国の美術館、博物館等の担当者等の参加を得、交流を促進した(参加人数:146人)。								
【補足事項】 (4館共通) 1) 特別展「タイ～仏の国の輝き～」の開会式に合わせ、タイ王国文化省芸術局長を招聘し周辺史跡の視察等を行った(4月10日～13日)。また、特別展記念講演会として、同局から研究員を招聘し講演を行った(4月29日)。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定に基づく交流事業により、韓国国立公州博物館及び国立扶餘博物館の研究員各1人を招聘し(12月4日～17日)、また、当館の研究員2人を同2館に派遣して(11月28日、12月5日～11日)研究員の交流を実施した。								
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評価	経年 変化	25	26	27	28
海外からの研究者招聘	9人	-	-		16	35	51	43
海外への研究者派遣	47人	-	-		87	82	77	67
国際シンポジウム開催数	0回	-	-		1	2	1	1
国際シンポジウム参加者数	0人	-	-	207	403	80	173	
【年度計画に対する総合評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 韓国等海外の博物館・美術館等の研究者等を9人招聘し、また、学術文化交流協定締結館を中心に47人の研究員を海外へ派遣して交流を深めた。年度計画どおり事業を実施できた。							
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価: B	【判定根拠、課題と対応】 2人の海外の研究者を招聘し、博物館等のIPMに関するセミナーを実施するなど、中期計画に沿った事業を順調に行うことができた。また、イランで開催されたICOM-ASPACに出席するなど、国内外の博物館等とのネットワーク構築を推進することができた。今後も海外の優れた研究者を招聘し、国際シンポジウムの開催や共同調査の実施などの取組を進めていきたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 「東京国立博物館情報アーカイブズ」等を運をし、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課	事業責任者	課長 (兼国際交流室長) 浅見龍介 課長 田良島哲					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『東京国立博物館文化財修理報告XVIII』を刊行した。 (東京国立博物館) 1) ・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。 ・特集印刷物リーフレット等6件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって研究情報の普及を図った。 2) ・『東京国立博物館紀要』53号を刊行した。 ・『東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇(西日本)新訂』を刊行した。 3) 『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXVII 古今目録抄4』を刊行した。 4) 研究誌『MUSEUM』667号～672号を刊行した。 ○『東京国立博物館セレクション「旧儀式図画帖」にみる宮廷の年中行事』を刊行した。 ○特別展図録5件・特集印刷物9件(リーフレット6件、冊子3件)を編集した。 ○出版企画委員会3回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会6回を開催し、博物館出版事業の拡充を図った。								
【補足事項】 ○出版物については別記(c-⑥ 調査研究刊行物一覧)を参照。								
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定		25	26	27	28
定期刊行物	16件	16件	B	経 年 変 化	16	16	16	16
紀要等	4件	4件	B		4	4	4	4
『MUSEUM』	6件	6件	B		6	6	6	6
『東京国立博物館ニュース』	6件	6件	B		6	6	6	6
特別展の開催回数(海外展除く)	5回	-	-		6	6	6	8
テーマ別展示の開催件数	28件	-	-		33	22	31	33
講演会等の開催回数	199回	-	-	131	127	146	160	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』等の定期刊行物を8件刊行するとともに、文化財修理報告書、図版目録等を計画どおり刊行することができた。また、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で研究員の調査研究活動等に関する情報を随時公開することができた。加えて、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版を当館ウェブサイトに掲載することで、さらなる情報公開に努めた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 『東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇(西日本)新訂』を発行するなど、図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行するとともに、来館者の要望が高い出版物を刊行し、販売部数を伸ばすことができた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。また今後「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」での発信をさらに拡充する。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1)研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトにて公開する。 2)社寺調査報告書等を刊行する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 伊藤信二 連携協力室長 浅湊毅					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)『文化財修理報告書15』を刊行した。 (京都国立博物館) 1)『学叢39号』を刊行した。29年度は学叢29号のPDFを当館ウェブサイトにて追加公開した。 2)『社寺調査報告書28号』を刊行した。 ○特別展覧会にて2件、特集展示にて1件、特別企画にて1件の図録を刊行した。(定期刊行物実績値には含まない)								
【補足事項】 (京都国立博物館) ○特集展示「名刀聚英 一永藤一の愛刀一」図録については名物秋田藤四郎をはじめ、正宗の系譜を引く左文字や秋広などの数々の名刀を全点新規撮影し、掲載した解説付き図版目録である。 ○特別企画 貝塚廣海家コレクション受贈記念「豪商の蔵—美しい暮らしの遺産—」図録については、117件の出品作品の解説と図版を掲載した図録であるとともに、1,000件を超える寄贈作品の一覧を掲載した。								
								
「名刀聚英 一永藤一の愛刀一」図録			「豪商の蔵—美しい暮らしの遺産—」図録					
【定量的評価】 項目	29年度実績	目標値	評定		25	26	27	28
定期刊行物	11件	11件	B	経年変化	10	10	11	10
紀要等	3件	3件	B		3	2	3	2
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
『Newsletter』	4件	4件	B		3	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	2回	-	-		3	2	3	2
テーマ別展示の開催件数	8件	-	-		-	4	7	9
講演会等の開催回数	32回	-	-		21	36	39	45
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 定期刊行物件数については目標値を達成することができた。また、特集展示等の図録を2件刊行し、展覧会に関する調査研究成果の公表も充分に行うとともに、来館者サービスの向上に寄与することができた。成果としては充分である。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 昨年度刊行できなかった社寺調査報告書を刊行したことや、ウェブサイトへの学叢の追加公開など、中期計画2年目として調査研究成果の発信を拡充することができた。引続き調査研究成果の発信を拡充していきたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (奈良国立博物館) 1)研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。 2)東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査について、報告書を刊行する。 3)文化財修理に関する印刷物を刊行する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤栄					
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1)研究紀要『鹿園雑集』19号(7月31日刊行)・20号(30年3月31日刊行)を刊行。併せて当館ウェブサイトに掲載することで研究成果を広く公表した。 2)東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査について報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻—光学調査編—』を30年3月に刊行した。 3)文化財修理に関する調査研究成果を『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』(案)として刊行するため、準備を進めている。								
【補足事項】  展覧会図録・研究紀要等								
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定	経年変化	25	26	27	28
定期刊行物	6件	5件	A		4	5	4	6
紀要等	2件	1件	B		0	1	0	2
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	3件	-	-		3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数	4件	-	-		10	9	4	4
講演会等の開催回数	26回	-	-	26	27	28	26	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 『鹿園雑集』19号・20号を刊行し、29年12月までの調査研究事業報告を完了することができた。また、東京文化財研究所と共同で行っている光学的調査の報告書を刊行することができた。その他定期刊行物についても順調に刊行、公開することができており、目標を達成している。また、29年度中に刊行できなかったものについても、継続して準備作業を進めている。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 調査・研究の成果は、展覧会に関わる刊行物を中心に発信できている。また、文化財研究の成果を研究紀要『鹿園雑集』として刊行、報告するとともに、ウェブサイトでの公開を実施し、中期計画は順調に遂行している。また、29年度から、文化財の修理報告書を単体で刊行することとしたため、より充実した内容を目指し30年度の刊行に向けて準備を進めている。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表								
【年度計画】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 博物館科学に関する印刷物を刊行する。									
担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課	事業責任者	課長 (兼環境保全室長) 木川りか 課長 河野一隆						
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第13号を刊行した (部数1,030部)。 2) 『九州国立博物館 博物館科学部門の取り組みIV』(発行部数1,000部)を編集、刊行した。23年度から27年度までの「環境保全」、「科学調査」、「材質・技法」、「保存修理」にかかわる学会発表等の内容をまとめ、当館の博物館科学の成果を広く紹介した。 ○特別展図録・特別展示図録等を9冊刊行した。(うち特別展示図録4冊) ・特別展図録 『タイ ～仏の国の輝き～』、『世界遺産 ラスコウ展 クロマニヨン人が見た世界』、『新・桃山展―大航海時代の日本美術』、『王羲之と日本の書』。 ・特別展示図録等 『水の中からよみがえる歴史―水中考古学最前線―』、『対馬―遺宝にみる交流の足跡―』、『大分県国東宇佐六郷満山展～神と仏と鬼の郷～』、『白隠さんと仙厓さん』、『災害に学ぶ・備える～熊本地震と文化財レスキュー～』。									
【補足事項】 1) 『東風西声』第13号では11本の論文を掲載した。(うち当館職員執筆7本、外部研究者からの寄稿1本、外部研究者との共同執筆3本) 2) 『九州国立博物館 博物館科学部門の取り組みIV』は、絵画、歴史資料、教育、情報、考古、科学調査、修理など多岐にわたる内容であり、当館の活動の幅広さを示すことが出来た。									
									
				東風西声第13号 表紙		博物館科学部門 の取り組みIV			
【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	25	26	27	28	
定期刊行物	5件	5件			5	5	5	5	
紀要等	1件	1件			1	1	1	1	
季刊情報誌『アジアージュ』	4件	4件			4	4	4	4	
特別展の開催回数 (海外展除く)	3回	-	-		4	5	4	4	
テーマ別展示の開催件数	6件	-	-		14	11	8	6	
講演会等の開催回数	84回	-	-		90	82	87	77	
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要について、11本の論文を掲載し、「当館所蔵『大方広華嚴経巻第十五 (泉福寺焼経)』及び長松寺所蔵『重要文化財 高麗版大般若経』の紙継ぎに使用された膠着剤の調査」、「高等学校所在資料を活用した博学連携事業について」等、内容がより充実したものを刊行することができた。その他、特別展図録、特別展示図録においても調査研究成果を報告した。								
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 予定通りに印刷物を刊行することができた。また、調査研究の結果を文化交流展示やさまざまな機会に応じて公表することができ、中期計画に沿って順調に計画を実施している。								